

杏雨書屋所藏敦煌文獻『大乘起信論疏』 (擬題, 羽333V) について

池田 將則 (이케다 마사노리)
(金剛大學校佛教文化研究所 HK研究教授)

국문요약

주지하는 바와 같이 중국(그리고 한국)에서 찬술된 초기 『대승기신론』 주석서로는 담연曇延(516-588) 『대승기신론의소大乘起信論義疏』(이하 「曇延疏」), 정영사 혜원淨影寺 慧遠(523-592) 『대승기신론의소大乘起信論義疏』(이하 「慧遠疏」), 원효元曉(617-686) 『기신론소起信論疏』(이하 「元曉疏」), 법장法藏(643-712) 『대승기신론의기大乘起信論義記』(이하 「法藏疏」) 네 종류가 현존한다.

이들 가운데 예로부터 현존하는 가장 오래된 『기신론』 주석서로 간주되

* 본 논문은 2007년 정부(교육과학기술부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임(NRF-2007-361-AM0046)

불교학리뷰(Critical Review for Buddhist Studies)

12권 (2012. 12) 45p~167p

www.kci.go.kr

어 온 것은 曇延疏이나, 필자는 아주 최근에 공개된 일본 교우 쇼오쿠杏雨書屋가 소장하고 있는 돈황문헌 중에 曇延疏에 선행하는 『기신론』 주석서가 전해지고 있음을 알게 되었다. 본고에서는 새로 발견된 이 교우 쇼오쿠에 소장된 『대승기신론소大乘起信論疏』(추정제목, 하네羽 333V. 이하 「杏雨書屋本」)의 전체적인 성격을 주로 曇延疏와 비교하여 이하의 사항들을 밝히고자 한다.

1. 杏雨書屋本과 曇延疏를 비교·대조해 보면 曇延疏가 杏雨書屋本의 주석내용을 요약한 예, 그리고 曇延疏가 杏雨書屋本에는 없는 설명을 부가한 예를 여러 곳에서 찾을 수 있다. 따라서 杏雨書屋本은 曇延疏에 선행한다.

2. 杏雨書屋本은 진제眞諦 역 『섭대승론석攝大乘論釋』을 인용하고 있고, 또한 曇延疏에 선행한다. 따라서 杏雨書屋本이 찬술된 것은 『섭대승론석』의 역출(564년) 이후, 담연의 입멸(588) 이전이다.

3. 杏雨書屋本에는 진제가 찬술한 『구식장九識章』이나 그가 번역한 『섭대승론석』 『불성론佛性論』에 나온 교설들에 기초하여 주석한 예가 다수 있으며, 또한 曇延疏와 비교할 경우 杏雨書屋本이 진제에 보다 가깝다. 따라서 杏雨書屋本의 찬술자는 진제가 번역 또는 찬술한 여러 문헌에 친숙했으며 진제와 밀접한 관계에 있던 사람이었을 가능성이 높다.

4. 현존하는 사본에는 저자 자신에 의한 것이라고 생각되는 수정의 흔적들이 있으며, 한편 편집자가 개입하였을 것이라는 의구심을 가질 만한 서사의 생략도 존재한다. 또한 그러한 수정들 가운데 일부분은 曇延疏에 알려졌을 가능성이 있지만, 다른 몇 가지 것들은 曇延疏에는 알려지지 않았다고 생각된다. 따라서 杏雨書屋本은 아마도 저자(즉 스승)와 편집자(즉 제자들)가 공동으로 만든 강의록과 같은 성질의 문헌이며, 저자에 의한 수정을 반영하면서도 각기 편집 양상이 다른 복수의 이본異本이 존재했던 것이

아닐까 생각된다.

5. 慧遠疏 및 元曉疏와 杏雨書屋本과의 관계는 알 수 없지만 法藏疏는 杏雨書屋本을 참조하고 있다. 따라서 杏雨書屋本은 적어도 법장의 시대까지는 중원中原에서 유통했을 것이고 생각된다.

주제어 : 돈황사본 『대승기신론소』(羽333V), 교우 쇼오쿠杏雨書屋, 담연 『대승기신론의소』, 진제 삼장, 법장 『대승기신론의기』

はじめに

周知のように, 中國(および朝鮮)において撰述された初期の『大乘起信論』注釋書として, 曇延(516-588)『大乘起信論義疏』(卷上のみ現存, 以下「曇延疏」)・淨影寺慧遠(523-592)『大乘起信論義疏』(以下「慧遠疏」)・元曉(617-686)『起信論疏』(以下「元曉疏」)・法藏(643-712)『大乘起信論義記』(以下「法藏疏」)の四疏が現存する。これらのうち一般に『起信論』の「三大疏」¹⁾と呼ばれるのは慧遠・元曉・法藏の三疏であり, 後世に特に大きな影響を與えたのは法藏疏であるが, 一方「三大疏」のうちには含まれない曇延疏も, 特に近現代の學者によって現存最古の『起信論』注釋書とみなされ, 『起信論』の成立問題や初期の傳播狀況を考えるうえでの重要資料の一つとして注目されてきた²⁾。

-
- 1) 今津洪嶽 [1918] (p.30) を参照する限り, 「三大疏」(「起信の三疏」) という呼稱を用いたのは本邦の普寂(1707-81)『大乘起信論義記要決』卷上が最初のようなのである。
 2) 曇延疏に関する主な先行研究として, 望月信亨 [1922], 吉津宜英 [1972] [1973] [1976] [1991], 高崎直道 [1986] [1997], 荒牧典俊 [2000], 丹治昭義 [2004] 等を参照。

ところが筆者は、ごく最近公開されたばかりの杏雨書屋所藏敦煌文獻のなかに、曇延疏に先行すると考えられる『起信論』注釋書が傳存していることに気がついた。この杏雨書屋所藏『大乘起信論疏』(擬題, 羽333V, 以下「杏雨書屋本」)は、從來現存最古の『起信論』注釋書と考えられてきた曇延疏の成立過程を明らかにする重要資料であり、また『起信論』の初期の傳播狀況を考えるうえでも、從來知られていなかった新たな情報を読み取ることのできるきわめて貴重な新資料である。

本稿ではこの新出の杏雨書屋本の成立背景や歴史的 위치づけ等を、主に曇延疏との比較の觀點から考察し、明らかにしてみたい。以下、(一) 杏雨書屋本の書誌, (二) 杏雨書屋本と曇延疏との先後關係, (三) 杏雨書屋本の歴史的 위치, の三節に分かつて論ずる。なお本稿末尾に杏雨書屋本全文の翻刻も附載するので、あわせて参照されたい。

一 杏雨書屋本の書誌

杏雨書屋本『大乘起信論疏』(羽333V)は、公益財團法人 武田科學振興財團の圖書資料館「杏雨書屋」が所藏する羽田亨(1882-1955)氏舊藏資料(羽田文庫, 略號「羽」)の一點であり、杏雨書屋(編)[2009-] 影片冊5に寫眞版が掲載されている。同書所載の目録が本文獻を王重民(編)[1962]所收「李氏鑒藏燉煌寫本目録(據傳鈔本)」³⁾の「0490 殘經疏卷(草書 背亦有字)」に同定しているの、本文獻

3) 「李氏鑒藏燉煌寫本目録」(『李木齋氏鑒藏燉煌寫本目録』)については張娜麗 [2006]を参照。

はもと李盛鐸 (1858-1935) 所藏の敦煌寫本の一點であり、それが後に羽田氏の所有に歸したのだと考えてよい。周知のように「李盛鐸舊藏」と稱する敦煌寫本のうちにはかなりの数の偽寫本が含まれていることが指摘されているが⁴⁾、少なくともこの『大乘起信論疏』(羽333V) に関しては、以下本稿で考察するような内容上の特質から考えて、偽寫本である可能性を過度に考慮する必要はないものと思われる。

現存の寫本は首尾ともに缺けており、題記等はない。寫本の行數でいえば379行、注釋對象の『起信論』との對應でいえば「心眞如門」の「所言空者、從本已來一切染法不相應故」(T32, 576a) 以下に對する注釋の途中から、「心生滅門」の「又染心義者、名爲煩惱礙」(T32, 577c) 以下に對する注釋の途中までが残存している(次節以下で比較する曇延疏との對應でいうと、Z1.71.3, 269a~278aに相當する部分が残存)。

現存の寫本の特徴として、朱の鉤印によって段落を區切っているほか、文字あるいは文章を修正した跡がかなり多くみられる點が挙げられる(筆跡は同一)⁵⁾。特に注意されるのは、單純な脱字の補いではない行間の加筆や、單なる誤字の訂正ではない文章の修訂の跡が複數存在していることである。

以下、二つの例を釋文風に示す。行頭のアラビア數字は寫本の行數、「……」は引用者(池田)による省略、{ } 内は抹消された文字、〈 〉内は行間に書き加えられた文字を表す。

4) 藤枝晃 [1985] 等を参照。

5) 墨の線で文を圍っている箇所もあるが(羽333V, 60-61)、何を意味するしるしなのか未詳。欄外上部のところどころに墨で書かれた「△」の記號もみられるが、これが何を意味するのかも未詳。

【例1.1】『起信論』「五者名爲相續識，以念相應不斷故」(T32, 577b) 以下に對する注釋

292…… {釋第五中，分文有三。初釋其義。第二「是故」已下，} {「五名爲相續識」，此即阿梨耶}

293 {引經證成。} {識。以何義故，名相續識。此有二義。一自相續，二令他相續。自相續者，如『論』「以念}

294 釋第五內有三。初釋名義。第二「是故」已下，引經證成。第三「此義云何」已下，釋所引經義。初

295 言「相續識」者，即是阿梨耶識。以何義故，名爲相續。下釋其義，就中有二。初明自相續，

296 即是略釋。第二「復能住持」已下，令他相續，即是廣解。

……

この例では、次のような三段階の修訂の跡があることが確認される。

① 「五名爲相續識」，此即阿梨耶識。以何義故，名相續識。此有二義。一自相續，二令他相續。自相續者，如『論』「以念

↓

② 釋第五中，分文有三。初釋其義。第二「是故」已下，引經證成。「五名爲相續識」，此即阿梨耶識。以何義故，名相續識。此有二義。一自相續，二令他相續。自相續者，如『論』「以念

↓

③ 釋第五內有三。初釋名義。第二「是故」已下，引經證成。第三「此義云何」已下，釋所引經義。

初言「相續識」者，即是阿梨耶識。以何義故，名爲相續。下釋其義，就中有二。初明自相續，即是略釋。第二「復能住持」已下，令他相續，即是廣解。

この修訂の跡は次のように理解することができる。

- ① 最初, 第292行の途中から、『起信論』のいわゆる「五意」の第五「相續識」に對する注釋を特に分節せず書き始めたが, 途中でやはり「相續識」の中を三つに區分することにし, 第293行の終わりで書寫を一旦中斷した。
- ② 分節の説明を行間に挿入することにし, 第292行の行脇から書き加え始めたが, 途中でやはり全體をあらためて書き直すことにして, 第293行に「引經證成」の四字を書き加えたところで中斷した。
- ③ 第292・293行の文字を抹消し, 第294行の行頭からあらためて「相續識」の注釋を書き出し, そのまま書き進めていった。

注目すべきことは, この修訂が明らかに單なる書寫時の誤字脱字の訂正ではなく, 文章構成そのものの改訂となっていることである(單純な脱文の補いではないことは, ②と③の文章表現が細かく相違していることから明らかである)。また寫本全體を一旦すべて書き終えた後で修正が施されているのでもなく, 注釋を書き進める過程で文章が改訂されているということも注目すべき事柄である。單に原本を書き寫したのであればこのような内容そのものに關わる修訂の跡が残ることはあり得ないから, 現存の寫本は著者のオリジナルにかなり近いものである可能性がある。

【例1.2】『起信論』「染心者有六種」(T32, 577c) 以下に對する注釋

355 ……下次第二正辨心義。就中有三。初 {約位辨心相, □}
 〈舉染心, 約位〉

356 {〈舉心就位〉} 明治斷分齊。第二「不了一法界義者」已下,

重舉 {上心體}〈無明〉, 〈約〉位明治斷得證分齊。第

357 三「言相應者」已下, 辨染淨龜細即異之義。……

この例では、『起信論』のいわゆる「六染」を注釋するに当たってまず全體を三つに區分し, その最初の小區分が次のように三段階に書き改められている。

初約位辨心相, □明治斷分齊。

↓

初舉心就位, 明治斷分齊。

↓

初舉染心, 約位明治斷分齊。

また次の第二の小區分は次のように書き改められている。

第二「不了一法界義者」已下, 重舉上心體, 〈約〉位明治斷得證分齊。

↓

第二「不了一法界義者」已下, 重舉無明, 約位明治斷得證分齊。

この例の場合も, やはり單なる書き誤りの訂正ではなく, 最終的に「初舉染心, 約位明治斷分齊」と第二「重舉無明, 約位明治斷得證分齊」とが綺麗に對になるように考えられた推敲の跡と理解することができる。單に原本を書き寫したのであれば, このような修訂はあり得ないはずである。

以上の例にみられるような修訂の跡は, 明らかに單なる寫本の書寫者が原本を書き寫す過程で生じた誤字脱字を訂正したというような性質のものではない(後掲の【例3.2.1~3】も參照)。したがってこれらの例を見る限り, 現存の寫本は著者のオリジナルにかなり近

いものなのではないかと考えられる。

ただここで問題となるのは、現存寫本に一箇所だけ、本來存在していたはずの注釋が脱落していると思われる部分があることである。

杏雨書屋本の注釋形式は『起信論』全體を詳細に科段分けした上で一つ一つの語句を注解していく典型的な隨文解釋であるが、「不思議業相」を説く『起信論』の文「不思議業相者、……種種而現、得利益故」（T32, 576c）を注釋する箇所のみ、この一文に對する分科を提示するだけで終わっていて、その後に續くはずの個々の語句に對する注釋を欠いている（羽333V, 163-165）。個別の語句に對する注釋がこの箇所においてのみもともと存在していなかったとは考え難いから⁶⁾、現存寫本はおそらく何らかの理由で書寫を省略したのではないかとされるが（料紙の破損等の外的な要因による脱落ではない）、もしそうだとすれば、現存の寫本は著者のオリジナルのものではなく、何らかの編集の手が加わったものであるということになる。

この現存寫本の性格をめぐる問題點については、本稿第三節の第二項であらためて検討することとしたい。

なお杏雨書屋本の紙正（羽333R）には別筆で「十地義」（首尾缺、擬題）が書寫されている（ただし杏雨書屋〔編〕[2009-] 所載目録の記事によれば本來は『大乘起信論疏』[羽333V] が紙正で、先に書寫）。この文獻はおそらく眞諦（499-569）譯『攝大乘論釋』に對する「章」形式の注釋の一章の殘簡であり、大英圖書館所藏スタイン將來敦煌寫本中に傳存する攝論宗文獻「三性義」（S2743）と筆跡が類似していることが注目されるが、詳細は別稿に譲る。

6) 曇延疏の對應部分（Z1.71.3, 272cd）には個々の語句に對する注釋が存在している。

二 杏雨書屋本と曇延疏との先後關係

杏雨書屋本の出自を考えるうえでまず第一に注目すべきことは、文獻全體にわたって、從來現存最古の『起信論』注釋書と考えられてきた曇延『大乘起信論義疏』と一致あるいは類似する部分が見出されることである。いま兩文獻の注釋が一致する例を一つだけ挙げると次のようになる。兩者の注釋内容が一致する部分に下線を引いて示す。

【例2.0】『起信論』「所言不空者，已顯法體空無妄故，即是眞心常恒不變，淨法滿足，故名不空。亦無有相可取，以離念境界，唯證相應故」(T32, 576b) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 26-32)	曇延疏 (Z1.71.3, 269cd)
次辨不空，就中有三。初舉章門，牒前起後。第二「即是□□」，正解不空之義。第三「亦無有相」已下，明此眞如遠離外相，唯是內證相應。 初中先舉章門，次牒前起後。 「以顯自體空無妄」者， <u>以無妄想自性，故即顯法體本來自空也。</u> 下解釋中，「即是眞心」者， <u>謂自性清淨心也。</u> 「常恒不變」者， <u>於未來佛不染，於過現佛不淨也。</u> 「淨法滿足」者， <u>此眞如之外，更無一法自體具有，無所少也。</u> 「故名不空」者， <u>以義定名。</u> 「亦無有相可取」者， <u>示離有無相也。</u> 「以離念境」者， <u>示一切妄心皆不相應。</u>	「所言不空者」，次釋第二不空義也。此文有四。「所言不空者」，此初題章。「已顯法體不空」，第二釋義。「故名不空者」，第三以義定名。「亦無有相者」下，第四明不空義離相。 「已顯法體空無妄故」者， <u>以無妄相法，故即顯法體本來自空。</u> 「即是眞心」者， <u>謂自性淨心也。</u> 「常恒不變」者， <u>於未來佛不染，於過去現在佛不淨法也。</u> 「淨法滿足」者， <u>此眞如之外，更無一法自體具有無量功德，無一念所少也。</u> 「故名不空」者，此第三以義定名。 「亦無有相」下，第四明不空離相。 「亦無有相可取」者， <u>亦⁷離有無相也。</u> 「離念境界」者， <u>示一切妄心皆不相應也。</u>

「唯證相應故」者、示證時離覺觀、復無能所心也。

「唯證相應故」者、示現證時離覺觀、無有能所也。

杏雨書屋本および曇延疏は『起信論』のこの一節をそれぞれ次のように区分しており、科段構成に相違がみられるが、個々の文に對する注釋自體は語句レベルでほぼ一致している。

杏雨書屋本

1 舉章門, 牒前起後

1.1 舉章門—————「所言不空者」

1.2 牒前起後—————「已顯法體空無妄故」

2 正解不空之義—————「即是真心常恒不變, 淨法滿足, 故名不空」

3 明此眞如遠離外相,

唯是內證相應—————「亦無有相可取, 以離念境界, 唯證相應故」

曇延疏

1 題章—————「所言不空者」

2 釋義—————「已顯法體空無妄故, 即是真心常恒不變, 淨法滿足」

3 以義定名—————「故名不空」

4 明不空義離相——「亦無有相可取, 以離念境界, 唯證相應故」

いまはこの一例を示すにとどめるが、杏雨書屋本と曇延疏の注釋内容は基本的にかなりの割合で一致するので、兩文獻の間にどちらかがどちらかを参照した影響関係があることは間違いない。したがって杏雨書屋本の來歴を明らかにするためには、まず曇延疏との先後を

7) 「示」の誤植か。

確定する必要がある。

ただここで問題となるのは、單純に兩文獻を比較對照しただけでは、どちらがどちらを要略し、どちらがどちらを發展させたのか、明確に言えない場合がほとんどであるということである。ひとまず全體的な傾向としては、杏雨書屋本の煩瑣な科段や注釋内容を曇延疏が簡潔にまとめ直しているという印象を受けるが、逆に曇延疏の注釋のほうが詳細になっている部分も複数あり、また曇延疏が杏雨書屋本の説明を要略して、その結果文意が通じにくくなっている例も数多く存在するが、單にそれだけでは兩文獻の先後を決定する確實な論據とすることはできないからである。

本節では以下、かなりの根據をもって兩文獻の先後を明らかにする例證とすることができると考えられる用例に絞って、(1) 曇延疏が杏雨書屋本の注釋内容を要略したと考えられる文例、(2) 曇延疏が杏雨書屋本にはない説明を附加したと考えられる文例、の順に検討を加え、兩者の先後關係を明らかにしてみたい。

(1) 曇延疏が杏雨書屋本の注釋内容を要略した例

本項では曇延疏が杏雨書屋本を要約あるいは省略したと考えられる文例を兩文獻の注釋の順序に沿って列擧し、考察を加える。兩文獻の注釋が相違する部分に下線を引いて示す。

【例2.1.1】『起信論』「四者緣熏習鏡」(T32, 576c) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 199-201)	曇延疏 (Z1.71.3, 273bc)
「緣熏習」者、此出離法身、流出應化二身。此應化二身、復流出無分別後智。此無分別後智、復流出大悲。此大悲復流出十二	「四緣薰鏡」者、依出離法身、起應化二身、從於大悲、流出十二部經、作諸衆生外緣薰習。

部經, 安立衆生。言教内, 與衆生作外緣 熏習也。	
------------------------------	--

一見して杏雨書屋本の注釋のほうが曇延疏よりも詳細であり、一般的にいえば前者が後者を参照して細かい説明を付け加えたと考えられるところだが、この場合は逆に後者が前者を要約したのだと考えられる。この注釋は、眞諦譯『攝大乘論釋』入因果修差別勝相品の次のような説を典據としていると考えられるからである。

無分別智是眞如所流, 此智於諸智中最勝。因此智流出無分別後智所生大悲, 此大悲於一切定中最勝。因此大悲, 如來欲安立正法, 救濟衆生, 說大乘十二部經。(T31, 222b)

この『攝大乘論釋』の文と比較すると、明らかに曇延疏よりも杏雨書屋本のほうが『攝大乘論釋』に忠實であり、したがってこの場合は曇延疏が杏雨書屋本を参照し、その注釋内容を要略したのだと考えられる(兩文獻の語句の一致の度合いから考えて、曇延疏が獨自に『攝大乘論釋』を典據として利用した可能性はない)。

【例2.1.2】『起信論』「(復次生滅因縁者, 所謂衆生依心意意識轉故。……) 此意復有五種名」(T32, 577b) に對する注釋

『起信論』は「生滅因縁」を「心に依つて意と意識とが轉ずる故に」と規定し、そのうちの「意」が轉ずることを業識・轉識・現識・智識・相續識という「五意」によって説明するが、その「五意」の注釋を始めるに当たり、杏雨書屋本は「五意」の「意」と「心・意・意識」との関係について次のような解説を加えている(〈 〉内は行間に書き加えられた文)。

さてこの心・意・識(という三つの名稱)には廣義の意味(「通」)

と狹義の意味(「別」)とがある。

廣義の意味とは、もろもろの識がみなこの三つの意味を有しているということである。①たとえば意識においては、対象を識別することを識と名づけ、煩惱および業を集積することを心と名づけ、もろもろの煩惱の依りどころとなることを、説明して意と名づける。②阿陀那識にも三つ(の名稱)がある。識別してその我塵を把握することを識と名づけ、また(我見・我慢・我愛・無明という)四種類の煩惱を集積することを心と名づけ、四種類の煩惱の依りどころとなることを意と名づける。③本識(=第八識)の三つ(の名稱)とは、三界・六道の業の果報を集積して、六識・第七識などの心を生起し、變化してかの我塵・法塵などとして顯現する、これを心と名づける。またかの善・惡・不動という三性の種子を保持して亡失させず、それらの依りどころとなることを、意と名づける。さらにこの識の本質にまた非常にかすかな識別のはたらきがあることを、識と名づける。以上が廣義の意味(による解釋)である。〈『攝大乘論』に次のようにあるとおりでである。「『依りどころとなる』というのが意の意味である。他(の識)が生ずるための依りどころとなるからである。『集積する』というのが心の意味である。さまざまな(法によって熏習された種子を)集積し、變化して三界(の諸法)として顯現するということである。『識別する』というのが識の意味である。対象を把握するから、識と名づけるのである」⁸⁾。〉

8) 眞諦譯『攝大乘論釋』依止勝相品「以能取塵，故名識。能與他生依止，故名意。第二識是我相等或依止能分別，故名意」(T31, 158b), 「意以了別爲義」(T31, 158c), 「第一識，或名質多。質多名有何義。謂種種義及滋長義。……所滋長者，謂變異爲三界」(T31, 159b)。

狭義の意味というのは、①六識を識と名づける。もっぱら対象を識別し把握するからである。②第七識を心と名づける。もっぱら四種類の煩惱と(結びついて)染・淨のもろもろの識を生起するからである。③第八識を意と名づける。もっぱらかの六識・第七識などの心および我・法などの塵と無始の種子の依りどころ・支え・基盤となる場であるからである。以上が狭義の意味による(解釋)である。〈だから『攝大乘論』に次のようにある。「佛は意という名稱を説かれた。この名稱は第一識(=第八識)を表す。佛は心という名稱を説かれた。この名稱は第二識(=第七識)を表す。佛は識という名稱を説かれた。これは第三識(=六識)を表す」⁹⁾。〉

ところで今ここでは、ひろく廣義の意味によって(「意」の様相を)¹⁰⁾明らかにしているのであって、限定的な(狭義の意味)によっているのではないのである。なぜそれが分かるか。いまこの(業識・轉識・現識・智識・相續識という)五つ(の識を説く)に当たって、(本論はそれらを)一括りに「意」と名づけてはいるが¹¹⁾、(その「五意」の)意味を(一つずつ)検討してみると(第八識以外の)その他の識(に該当する内容)も含まれており、(したがって本論の言う「意」は)第八識のみ(を表しているの)ではないからである。

9) 眞諦譯『攝大乘論釋』依止勝相品「佛說心名、此名目第二識。佛說識名、此名目六識。佛說意名、此名目第一識」(T31, 159b)。

10) 杏雨書屋本「初略釋意義。第二『此意有五種名』已下、廣論意相」(羽333V, 271-272), 「下次第二廣明意義」(羽333V, 277)。

11) 『起信論』「以依阿梨耶識、説有無明。不覺而起、能見、能現、能取境界、起念相續、故説爲意」(T32, 577b)。

然此心意識有通有別。

通者，諸識皆有此三義。如意識中，對境了別名識，集起煩惱及業名心，能與諸使作依止處，說名意。陀那中亦三。能了別取其我塵名識，復能集起四惑名心，能與四使作依止處名意。本識三者，能集起三界六道業果，起六七等心，變異作彼我法塵等，名之曰心。復能令彼善、惡、不動三性種，攝持不失，與作依止，名意。又此識體復有微細了別，名識。此爲通也。〈如『大乘論』言「依止義是意義，能與他生爲依故。集起義是心義，謂種種茲長，變異爲三界。了別義是識義，以能取塵，故名識」。〉

言別者，六識名識，偏能了別取塵故。第七名心，偏能生起四惑染淨諸識故。第八名意，偏能與彼六七等心及我法等塵無始種子作依、持、建立處所義故。此據別也。〈故『論』云，「佛說意名，此名目第一識。佛說心名，此名目第二識。佛說識名，此目第三識」。〉

然今此內，多就通以明，不就局也。何以得知。今此五中，雖總名爲意，論義乃通餘識，不唯第八。(羽333V, 277-285)

杏雨書屋本はここでまず心・意・識には廣義の意味(「通」と狹義の意味(「別」と)があるとし、狹義の意味によれば心・意・識はそれぞれ第七識・第八識・六識を指すが、『起信論』の「心・意・意識」は廣義の意味によるものであって、八識それぞれが心・意・識の名稱と意味とを備えているのだと解釋している。そしていま注釋する「五意」も、「意」と總稱されてはいるが第八識のみを指すわけではないとして、これに續く注解において「五意」と八識とを次のように對應させて解釋している(羽333V, 285-295)。

業識——第七阿陀那識 (あるいは第八阿梨耶識)

轉識——第六意識

現識——前五識

智識——第六意識

相續識——第八阿梨耶識

ここで注目されるのは、この杏雨書屋本の解釋の根據となっている、八識それぞれが心・意・識の名稱と意味とを具備しているという説が、眞諦三藏の學説に由來するものであるらしいということである¹²⁾。

周知のように、意=第八阿梨耶識、心=第七阿陀那識、識=六識、と配當するのは眞諦譯『攝大乘論釋』の特徴的な思想の一つであり、上掲のように杏雨書屋本は廣義の意味(「通」)についても狹義の意味(「別」)についても教證として同論を擧げているから、杏雨書屋本の

12) 高崎直道 [1981] (pp.488-490) を参照。なお杏雨書屋本と同じ説が敦煌出土『攝大乘論抄』(擬題, 守屋コレクション本+S2554; 大正2806) および『攝大乘論章』(擬題, S2435; 大正2807) にもみられる。『攝大乘論抄』については拙稿 [2009・10] を参照。『攝大乘論抄』心意識義「二體者, 若通而言之, 八識皆有此義。若別而言之, 七識名心, 以執我滋長生死故。第八識意, 能與他生依止故。第三識心(一識), 正能取塵了別故」(守屋本, 261-264; T85, 1004b)。

『攝大乘論章』三識義「『成實』如是, 大乘如何。亦有二義。一就通分別, 二就別分別。言就通分別者, 三種識中, 名具三義。①故『衆名章』中, 本識名質多, 質多名心。『相章』之中, 本識名眼界。是其識義, 上下竝論。②陀那識三義者, 『衆名章』中名染汚意, 與六識爲意根故。復云, 『佛說心名, 此名目第二識』。此名陀那爲第二識, 以緣本識起我執, 故名爲心。是識義顯, 不待言辨。③就六識辨三義者, 『衆名章』中云, 『一能與彼生次第緣, 依先滅識爲意』。此以六識中前滅心爲意根, 後生心爲識。又以識生依止爲意。此取本識以爲意根。『緣生章』中名受用識, 能受用六塵故。以此文證, 明知六識有其識義。第七勝相中, 名爲『心學』。故知六識名爲心義。通義如是, 別義云何。本識名意, 是意根故。七識名心, 常緣我塵故。六識名識, 了六塵故。是故『衆名章』云, 『心名目第二識, 識名目六識, 意名目第一識』」(S2435, 255-265; T85, 1015c-16a)。

所説が眞諦譯『攝大乘論釋』に基づくことは間違いない(『攝大乘論釋』の引用がいずれも行間への書き込みのかたちで行われていることについては、次節第二項を参照)。『起信論』の「心・意・意識」は地論系の用語であることが指摘されているが¹³⁾、その地論系に由来する用語を杏雨書屋本は眞諦譯の教説を前提として解釋しているのである。

これに對し曇延疏は、『起信論』「依心意意識轉故」に對する注釋において心・意・識の名稱と意味とを次のように解釋している。

この心・識・意の名稱と意味とは、①さまざまな(法によって熏習された種子を)集積するから、これを心と名づける。②(他の識が)生ずるための依りどころとなるから、説明して意と名づける。③對象を把握し識別するから、これを識と名づける。

これら三つの名稱は、その表す内容に廣義の意味(「通」と狭義の意味(「別」とがある。廣義の意味からすれば(六識・第七識・第八識という)三つの識はみな(心・意・識という)三つの名稱を備えており、狭義の意味からすれば三つの名稱はそれぞれ別箇に三つの識(のどれか一つ)を表すのである。(この説の詳細は上に説明した心・意・識の)定義に副って理解することができる。ただ今ここで(本論が「心に依って意と意識とが轉ずる故に」と)明らかにしているのは、派生的なもの(「末」)をまとめて根本的なもの(「本」)の觀點に立つためなのである。六識・第七識などの識はいずれも本識(=第八識)から生ずる作用なのであるから、(以下の注釋においてはそれらを)すべて本識に集約した上で、この(心・意・識という)三つの名稱を解釋し、「(生滅)因縁」の意

13) 竹村牧男 [1985] (pp.272-280)・[1990] (pp.337-338; 340)を参照。

味¹⁴⁾を明らかにすべきである。

此心識意名義者, 種種茲長, 名之爲心。能生依止, 説名爲意。
取塵了別, 名之爲識。

此等三名, 目¹⁵⁾有通別。通則三識各具三名, 別則三名別目三
識。准¹⁶⁾義可知。

但今此所明, 爲欲攝末就本, 六七等識皆是本識上用, 故合皆
約本識, 釋此三名, 顯因縁義。(Z1.71.3, 275b)

曇延疏は最初にまず心・意・識それぞれの名稱と意味とを定義した後、杏雨書屋本と同じ廣義の意味(「通」と狭義の意味(「別」と)による解釋に言及するが、しかしその解釋にはよらず、六識・第七識はいずれも本識(=第八識)から派生するはたらきなのであるから、『起信論』の「心・意・意識」はすべて本識の視點から解釋すべきであると主張している。そして「五意」を注解する箇所では、實際に「五意」の一つ一つがすべて本識の觀點から解釋されている(Z1.71.3, 275cd)。

ここで注目されるのは、曇延疏のこの解釋が事實上、心・意・識に廣義の意味と狭義の意味とがあることを根據として『起信論』の「五意」を八識に配當して解釋する説への批判、つまり杏雨書屋本の解釋に對する批判になっていることである。この事實は兩文獻の先後關係を考えるうえでかなり決定的な論據とすることができるであろう。

また形式的な面だけに限って見ても、兩文獻とも心・意・識に廣義

14) 曇延疏「此文有二。初略釋因縁體。『此義云何』下, 廣釋因縁義」(Z1.71.3, 275b)。

15) 續藏本は「因」に作るが, 誤植とみなして改める。曇延疏の下文「初示名所目義」(Z1.71.3, 276c), 「此見第一名所因(→目)義訖」(同)を参照。

16) 續藏本は「唯」に作るが, 誤植とみなして改める。續藏頭注「『唯』疑『准』」。

の意味と狭義の意味とがあるという説を述べておきながら、曇延疏のほうは「准義可知」とだけ記して、くわしい説明をまったく省略してしまっている。心・意・識の狭義の意味のほうは、曇延疏が最初に説明した心・意・識の定義と同じことであるから、確かにそれに準じて理解することも可能だが、廣義の意味のほうは説明なしに理解することができるようなものではないだろう。このことからしても、やはりこれは明らかに曇延疏が杏雨書屋本の注釋内容をふまえつつそれを批判して、自身の解釋を展開したのだと考えられる（逆に杏雨書屋本のほうが曇延疏を参照して、曇延疏において否定されている説を採用し、曇延疏では端折られている内容まで正確に推究したうえで自身の注釋を作成した、という想定はほとんど成り立たない）。

以上、この一段は杏雨書屋本が曇延疏に先行することを證する確實な例證と言ってよいのではないかと思われる。

【例2.1.3】『起信論』「此識依見愛煩惱增長義故」(T32, 577b) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 330-332)	曇延疏 (Z1.71.3, 276c)
「此識依見愛煩惱增長義故」者，此明意識因也。是中「見」者，我見也。「愛」者，我愛也。「煩惱」者，我慢。因此惑爲根本，生餘，熏習本識，令此識長也。	「此識依見愛煩惱增長義故」者，此由執識內我見等三惑力故，所以得起，故言增長。

この例では、下線を引いて示したように杏雨書屋本は本論の文に「見愛煩惱」とあるのをそれぞれ「見」=我見、「愛」=我愛、「煩惱」=我慢と解釋している。ここで杏雨書屋本が我見・我愛・我慢（および無明）を根本の煩惱とするのは、眞諦譯『攝大乘論釋』の教説に基づくものである¹⁷⁾。

一方、曇延疏は同じ文を注釋して「我見等三惑力故」と述べるが、具體的に「三惑」が何を指し、その三種類の煩惱が本論の文「見愛煩惱」とどう對應するのかについては説明がない¹⁸⁾。この場合、杏雨書屋本の説明を参考にしてそれを「我見等三惑」とまとめることは容易であっても、曇延疏の簡略な説明を参照して、本論の「見」「愛」「煩惱」がそれぞれ三惑の我見・我愛・我慢に對應すると読み取るとは困難であるので、これは杏雨書屋本が曇延疏を参照して細かい説明を補ったのではなく、曇延疏が杏雨書屋本のくわしい説明を要約したのだと考えられる。

【例2.1.4】『起信論』「謂心念法異，依染淨差別而知相緣相同故」(T32, 577c) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 373-375)	曇延疏 (Z1, 71.3, 277d)
言「心念法異」者，謂能念之心與所念法，各相異也。此釋「相」義。	「謂心念 ¹⁹⁾ 法異」，爲示能念之心與所念法異。
「依染淨差別」者，示能分別心及所分別境，有此染淨差別相也。	「依染淨差別」者，此心能所，有此差別。此釋「相」義。
「而知相」者，謂能知相。	「而知相緣相同」者，明能緣所緣合也。此解「應」義。
「緣相」者，謂所緣相也。	
「同故」者，能所合也。此釋「應」義。	

この例では、まず本論の文「依染淨差別」を注釋して杏雨書屋本が「示能分別心及所分別境，有此染淨差別相也」と述べるのは明快

17) 『攝大乘論釋』依止勝相品「一身見，二我慢，三我愛，四無明」(T31, 158a)。

18) なお曇延疏は『起信論』「二者所起見愛熏習」(T32, 578b)を注釋して「見謂我見，愛謂我愛，我慢等」(Z1, 71.3, 279b)と述べるが、杏雨書屋本はこの箇所に対応する部分が脱落しているため、比較することができない。

19) 續藏本は「令」に作るが、誤植とみなして改める。

であるが、曇延疏が「此心能所，有此差別」と述べるのは簡潔すぎて意味が取りづらい。

また續く本論の文「而知相縁相同故」を、杏雨書屋本は「而知相」が能知相，「縁相」が所縁相，「同故」が能知相と所縁相との合一を表すというように細かく注釋しているが，曇延疏のほうは同じ文を「明能縁所縁合也」と簡略に注釋している。

この場合もやはり杏雨書屋本が曇延疏を参照してそれを詳細にしたと考えるよりは，曇延疏が杏雨書屋本を要約したと考えるのが自然であろう。

以上の例により，杏雨書屋本は曇延疏に先行して成立したと考えられる。

(2) 曇延疏が杏雨書屋本にはない説明を附加した例

本項では曇延疏が杏雨書屋本にはない説明を附加したと考えられる文例を検討し，前項の論旨を補強してみたい。注目される部分に下線を引いて示す。

【例2.2.1】『起信論』「心生滅者，依如來藏故有生滅心」(T32, 576b) 以下に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 32-35)	曇延疏 (Z1.71.3, 269d)
次釋心生滅門，就中大有四。 一約就覺不覺義，以釋心生滅門。 第二「復次生滅因縁者」 ²⁰⁾ 已下，約就心	次釋第二心生滅門，成上「立法」 ²³⁾ 内「 <u>有心生滅因縁相，能示摩訶衍自體相用故</u> 」 ²⁴⁾ 。 釋文内有二。 <u>初廣釋上「生滅因縁相」。</u>

<p>意識義, 以解心生滅門。 第三「復次生滅相者」²¹⁾已下, 約龜細兩相, 以釋心生滅義。 第四「復次有四種熏習義」²²⁾已下, 就染淨眞妄體用熏習義, 以解心生滅門。</p> <p>亦可初明生滅體, 第二明生滅因緣, 第三明生滅相, 第四可知。</p>	<p>「復次有四種法熏習」下, 廣釋上「自體相用故」。 初文有三。 初釋上「生滅」。 「復次生滅因緣者」下, 釋上「因緣」。 「復次分別生滅相者」下, 釋上「相」義。</p>
--	---

これは『起信論』「解釋分」の「心生滅門」に對する杏雨書屋本および曇延疏の注釋の冒頭部分であり, 「心生滅門」全體の科段構成に關する兩文獻の解釋が示されている。まず杏雨書屋本の分科をまとめると次のようになる。

- 1 約就覺不覺義,
 以釋心生滅門——明生滅體——(「心生滅者」已下)
- 2 約就心意識義,
 以解心生滅門——明生滅因緣——「復次生滅因緣者」已下
- 3 約龜細兩相,
 以釋心生滅義——明生滅相——「復次生滅相者」已下
- 4 就染淨眞妄體用熏習義,
 以解心生滅門——可知——「復次有四種熏習義」已下

20) 『起信論』「復次生滅因緣者, 所謂衆生依心意意識轉故」(T32, 577b)。

21) 『起信論』「復次分別生滅相者, 有二種」(T32, 577c)。

22) 『起信論』「復次有四種法熏習義, 故染法淨法起不斷絶」(T32, 578a)。

23) 曇延疏「就依名釋內, 有二。初釋立法, ……第二釋立義」(Z1, 71.3, 266d)。

24) 『起信論』「是心眞如相, 即示摩訶衍體故。是心生滅因緣相, 能示摩訶衍自體相用故」(T32, 575c)。

杏雨書屋本は「亦可」以前と以後とで二通りの解釋を擧げており、前者は「覺・不覺の義という觀點から心生滅門を解釋する」「心・意・識の義という觀點から心生滅門を解釋する」というように、「心生滅門」中の各部分の主題に依據して四段に分科するものである。

後者は「生滅の體を明らかにする」「生滅の因縁を明らかにする」「生滅の相を明らかにする」というように、「心生滅門」の本文自體が構成的な意圖を持って「心生滅とは～～」「また次に生滅因縁とは～～」「また次に生滅相とは～～」と書き出されているのに即して四段に分科するものである。後者の第四は「可知」としか述べられていないが、この二通りの解釋は分科の觀點が異なるだけで實質的には差異はないと考えられるので、後者の第四も前者と同じく「四種熏習義」の部分を目指すと考えてよいであろう。

一方、曇延疏の分科は次のようである。

1 廣釋上「生滅因縁相」

- 1.1 釋上「生滅」———（「心生滅者」下）
- 1.2 釋上「因縁」———「復次生滅因縁者」下
- 1.3 釋上「相」義———「復次分別生滅相者」下

2 廣釋上「自體相用故」——「復次有四種法薰習」下

曇延疏の解釋は、「廣く上の『生滅因縁相』を解釋する」「廣く上の『自體相用故』を解釋する」というように、「解釋分」の「心生滅門」の論述構成を「解釋分」の前に述べられた「立義分」の文「是心生滅因縁相，能示摩訶衍自體相用故」(T32, 575c)と對應させて理解している點に大きな特色がある。

「立義分」で提示したテーゼを「解釋分」で詳説するという構成そのものは『起信論』自身が意圖したものであり、さきに確認した杏雨

書屋本の「亦可」以後の解釋にもそれが反映されていたが、この構成を（おそらく『起信論』自身の本来の意圖を超えて）さらに厳格に適用して、「立義分」の「是心生滅因縁相」の「生滅」が「解釋分」の「心生滅者」以下、「因縁」が「復次生滅因縁者」以下、「相」が「復次分別生滅相者」以下に對應し、「立義分」の「能示摩訶衍自體相用故」が「解釋分」の「復次有四種法熏習義」以下に對應する²⁵⁾というように「立義分」の語句の一つ一つを「解釋分」の論述に順に配當していったことは、おそらく曇延の創見ではなかったかと思われる。

以上の杏雨書屋本と曇延疏との解釋を比較すると、杏雨書屋本のほうは「心生滅門」内の論述構成に従って並列的に分科しているだけであるのに對し、曇延疏のほうは「立義分」と「解釋分」とを厳格に對應させ、それによって「心生滅門」のなかを大きく「生滅因縁相」を解釋する部分と、「自體相用故」を解釋する部分との二つに分けるなど、独自の見解が加えられている。したがって曇延疏の科段のほうが杏雨書屋本よりも發展しており、後の成立であると考えられる²⁶⁾。

25) 「能示摩訶衍自體相用故」と「復次有四種法熏習義」とが對應する理由を曇延疏は次のように説明する。「何以持言『大乘自體相用』者、若依大乘、明染淨熏習不斷、小乘則無。是故『心生滅因縁相、能示摩訶衍自體相用故』也」(Z1, 71, 3, 267bc)、「云何『能示』。染淨二法、道依藏識、即示藏識爲摩訶衍體。染淨二法、依藏識現、故識外無相、即示染淨摩訶衍相。藏識用(續藏頭注「『用』疑『因』」)時有厭求業用、至果起應化益物等、此示摩訶衍用義」(Z1, 71, 3, 278b)。

26) 先行研究によっても指摘されているとおり、このように「立義分」の一々の語句と「解釋分」の論述とを對應させて『起信論』の内部構造を理解するのは曇延疏にみられる特徴的解釋の一つであり、特に「解釋分」の「心眞如門」「心生滅門」の論述構成と「立義分」との對應づけは元曉疏や法藏疏といった後代の注釋書に繼承されている。神秘主義研究班 [2001] 所掲の曇延疏および「三大疏」の「立義分」科文を参照。ただし「立義分」の「能示摩訶衍自體相用故」を「心生滅門」の「復次有四種法熏習義」以下に配當する解釋は、元曉等には採用されなかった。柏木弘雄 [1981] (p.191; 432)、吉

【例2.2.2】『起信論』「如凡夫人，覺知前念起惡，故能止後念，令其不起。雖復名覺，即是不覺故」(T32, 576b) に對する注釋

『起信論』の阿梨耶識には覺と不覺の二義があり，覺は本覺と始覺とに區別される。始覺はさらに不覺・相似覺・隨分覺・究竟覺といういわゆる「始覺の四位」に區分され，それぞれ「能觀の人」である修行階位の四段階と「所觀の境」である生・住・異・滅の四相とに關連づけて説明される²⁷⁾。「始覺の四位」の對應關係をあらかじめまとめておくと次のとおりである。

凡夫人	—————	滅相	——	不覺
二乘觀智，初發意菩薩等	—————	異相	——	相似覺
法身菩薩等	—————	住相	——	隨分覺
菩薩地盡	—————	生相	——	究竟覺

さて，この「始覺の四位」のうち不覺の位を説く『起信論』の文を杏雨書屋本は次のように注釋する。

最初の(不覺の説明の)うち，「覺と名づけはするが」というのは，(凡夫人は前念において惡心を起こしたことを)覺知し，後念において惡心を起こさないようにすることができる(から覺と名づける)のである。

「つまり不覺である」とは，(凡夫人は)前念において惡心を起こ

津宜英 [1991] (p.495; pp.513-514), 荒牧典俊 [2000] (p.82) を参照。

27) 『起信論』「如凡夫人，覺知前念起惡，故能止後念，……即是不覺故。如二乘觀智，初發意菩薩等，覺於念異，念無異相，……名相似覺。如法身菩薩等，覺於念住，念無住相，……名隨分覺。如菩薩地盡，……覺心初起，心無初相，……名究竟覺」(T32, 576b)。杏雨書屋本「初就凡夫，覺知滅相，未可名覺。第二明二乘始行菩薩，覺知異相，名相似覺。第三明初地已去法身菩薩，覺知住相，名隨分覺。第四明十地已去菩薩，覺知生相，名究竟覺。此四位中，分文各四。一能觀人，二所觀境，三觀成離障，四明覺分齊」(羽333V, 77-80)。

した時、その時点ではそれが悪心であると自ら覺知することができない(から不覺と名づける)のである。

初内云「雖復名覺」者、能覺後念不令起惡也。

「即是不覺」者、前念正起惡時、爾時不自覺知惡也。(羽333V, 80-81)

この杏雨書屋本の解釋は上にまとめた「始覺の四位」と四相との對應關係に基づくものであり、「前念の惡を覺知して後念の惡を起こさないようにすることができる」というのは惡心の止滅(=滅相)を覺知することができるということを意味し、「惡心を起こしたその時点ではそれを覺知することができない」というのは惡心の「初起」(=生相)を覺知することはできないということを意味する。

一方、曇延疏は同じ文を次のように注釋している。

「覺と名づけはするが」とは、ただ惡念を覺知するのみということである。また(凡夫人は前念において惡心を起こしたことを)覺知し、後念において過失を起こさないようにすることができるから、覺という名稱が與えられるのである。

「つまり不覺である」とは、(心の)本性という根源を覺知することはできないということである。(凡夫人は)前念において惡心を起こした時に、(それが惡心であると)自ら覺知することができず、(またその惡心の)熏習によって惡業が成立してしまつたら、覺知してももう取り返しがつかないので、不覺という呼稱が與えられるのである。……

「雖復名覺」者、但覺惡念。又能覺後念不令起過、故受覺名。

「即是不覺」者、不覺本性之原也。前念正起惡時、不能自覺、已薰成業、雖覺無及、故受不覺之稱。……(Z1.71.3, 270c)

下線を引いて示した部分は上掲の杏雨書屋本の注釋とまったく同じ内容であり，四相との對應關係に基づいて不覺の位が解釋されているが，曇延疏はその前に「ただ惡念を覺知するのみで心の本性を覺知することはできないから不覺である」という別の觀點からの解釋も提示している。

この曇延疏のみにみられる解釋は，「始覺の四位」の説明に入る直前の『起信論』の文「又以覺心源，故名究竟覺，不覺心源，故非究竟覺」(T32, 576b)に對する自らの注釋を承けたものである。比較のためこの本論の文に對する兩疏の注釋を對照すると次のようになる。

杏雨書屋本(羽333V, 74-75)	曇延疏(Z1.71.3, 270c)
言「心元」者，覺心初起之根元也。	「又覺心原故」者，覺心體性之根原也。
……	……
「不覺心元故」者，謂觀住異滅三相也。	「又不覺心原故」者，謂不觀本性，六七識生滅之根原也。

杏雨書屋本は究竟覺の定義である「心源を覺す」を「心の初起(=生相)という根源を覺知すること」，非究竟覺の定義である「心源を覺せず」を「住・異・滅の三相を觀ずること(しかできないこと)」と解釋するが，これは上にまとめたように『起信論』本文が究竟覺と生相(=「心の初起」とを關連づけて説明していることに基づくものであり，ここでは「心源」が生相として理解されている。

それに對し曇延疏は究竟覺の定義である「心源を覺す」を「心の體性という根源を覺知すること」，非究竟覺の定義である「心源を覺せず」を「(心の)本性，すなわち六七識の生滅の根源を觀ずることができないこと」と解釋しているが，これは『起信論』本文が究竟覺の位の説明のなかで「得見心性(心性を見ることができ)」等と説くことを根據とするものであり，ここでは「心源」が文字通り心の

根源・心の本性(=「本覺清淨性」)を指すものとして理解されている²⁸⁾。上述の不覺の位の解釋において曇延疏が「心の本性を覺知することはできないから不覺である」と述べるのは、非究竟覺の定義「心源を覺せず」を「心の本性(=「心源」)を觀ずることができないこと」と解釋するこの部分の論述を承けていることが明らかである。

この究竟覺・非究竟覺の定義に關する兩様の解釋はどちらも『起信論』の說示そのものから導き出されたものであり、兩者のあいだに優劣や先後の區別をつけることはできない²⁹⁾。しかしいま問題としている杏雨書屋本と曇延疏との先後關係という點に限っていえば、さきに確認したように杏雨書屋本は「始覺の四位」と四相との對應關係だけに基づいて不覺の位を解釋していたのに對し、曇延疏は杏雨書屋本とまったく同じ内容の四相との對應關係に基づく解釋に加えて、究竟覺・非究竟覺の定義に基づく解釋をも提示しており、明らかに曇延疏のほうが發展していると言うことができる。

したがって、この例によってもやはり曇延疏のほうが杏雨書屋本よりも後の成立であると考えられる。

【例2.2.3】『起信論』「復次言意識者、)即此相續識。依諸凡夫取著轉深、計我我所、種種妄執、隨事攀緣、分別六塵、名爲意識。亦名分離識、又復說名分別事識。(此識依見愛煩惱增長義故)」(T32, 577b)に對する注釋

28) 『起信論』「以遠離微細念、故得見心性、心即常住、名究竟覺」(T32, 576b)。曇延疏「『得見心性』者、證見本覺清淨性也」(Z1.71.3, 271b)。杏雨書屋本「『得見心性』者、得見本覺清淨心性也」(羽333V, 97)も參照。

29) 法藏疏「前中言『覺心源』者、染心之源、謂性淨也。又龜相之源、謂生相也」(T44, 257a)。宇井伯壽・高崎直道(譯注)[1994](p.124)も參照。

杏雨書屋本 (羽333V, 323-330)	曇延疏 (Z1.71.3, 276c)
<p>「即此相續識」者，示此識無別體，即以相續爲體也。</p> <p>「於諸凡夫」者，次明第二。於中有二。初明意識立名不同。第二「此識」已下，明依起所由。</p> <p>言「依諸凡夫」者，簡非聖人意識也。</p> <p>「取著轉深」者，以無對治，故取著境界，轉復深也。</p> <p>「計我我所」者，初時計境謂我，後則於身計我，於塵爲所也。</p> <p>「種種妄執」者，執謂「塵各有自性」。<u>復執此性因自在不平等因及無因等生也。</u></p> <p>「隨事攀緣」者，示此不得實義，隨妄想虛僞而攀緣也。</p> <p>「分別六塵」者，示不依五識各定緣一境，此識獨能遍取諸塵也。</p> <p>「名爲意識」者，顯此識非有自體，是意所生識也。</p> <p>「亦名分離識」者，以此識能分離遍知諸境也。</p> <p>「又名分別事識」者，因分別虛僞事名也。</p> <p>……</p>	<p>釋文有三。初示名所因³⁰義。「名爲意識」下，第二明義所得名。「此識依見愛」下，第三示其因相。</p> <p>「即此相續識」者，恐人謬取，故指出其體。示此意識無有自體，唯以前「相續識」³¹爲此體。</p> <p>有三義。</p> <p>①一者意識義，謂「依諸凡夫取著轉深」乃至「種種妄執」。</p> <p>執者，於身計我，於塵計所。</p> <p>②二者分離義，「隨事攀³²緣」也。</p> <p>③三者分別事義，謂「分別六塵」。有自性相，取著違順，不同五識各緣一境，此識能遍緣諸塵。</p> <p>此見第一名所因義訖。</p> <p>次釋約上三義，得於三名。</p> <p>①「名爲意識」者，示此心有依止了別義故。依上「意識³³義」得名。</p> <p>②「亦名分離識」者，示此識有分離遍知諸境義。此依上第二「分離義」得名。</p> <p>③「又復說名分別事識」者，示能分別虛僞塵事。此依上第三「分別事義³⁴」立名。</p> <p>次釋第三因相。</p> <p>…… (以下の注釋は前項の【例2.1.3】に既出)</p>

ここでは、前項の【例2.1.2】で取り上げた心・意・意識のうちの意識が、また分離識・分別事識とも呼ばれることが説明されている。杏雨書屋本は『起信論』のこの一節を大きく二つに区分し、注釋している。

1 明意識立名不同——「依諸凡夫取著轉深，計我我所，種種妄執，隨事攀緣，分別六塵，名爲意識。亦名分離識，又復說名分別事識」

2 明依起所由——「此識依見愛煩惱增長義故」

一方、曇延疏は次のように三つに区分したうえで注釋している。

1 示名所因義——「(即此相續識。)依諸凡夫取著轉深，計我我所，種種妄執，隨事攀緣，分別六塵」

2 明義所得名——「名爲意識。亦名分離識，又復說名分別事識」

3 示其因相——「此識依見愛煩惱增長義故」

兩疏の分節を比較すると、杏雨書屋本は『起信論』の文「依諸凡夫取著轉深」から「又復說名分別事識」までを一括りにし、意識にさまざまな名稱があることを明らかにする部分（「明意識立名不同」と理解しているの)に對し、曇延疏のほうは同じ文を二つに分け、「依諸凡夫取著轉深」から「分別六塵」までが「名所因義（名が因る所の義）」を示し、「名爲意識」以下が「義所得名（義が得る所の名）」を明らかにするというように、前半と後半とを對應させて理解している

30) 續藏本は「目」に作るが、誤植とみなして改める。曇延疏「此見第一名所因義訖」(Z1, 71.3, 276c)。

31) 『起信論』「五者名爲相續識」(T32, 577b)。

32) 續藏本は「擧」に作るが、誤植とみなして改める。

33) 續藏本は「初」に作るが、誤植とみなして改める。

34) 續藏本は「識」に作るが、誤植とみなして改める。

點に大きな違いが認められる。

またさらにくわしく見ると，上掲の對照表において丸數字と下線によって示したように，曇延疏は『起信論』の後半の文に出る意識・分離識・分別事識という意識の三つの名稱（「三名」）に合わせて，前半の文にそれぞれ意識義・分離義・分別事義という意識の三つの意味（「三義」）が説かれていると解釋し，「三義」と「三名」とを次のように對應させている。

「依諸凡夫取著轉深」乃至「種種妄執」——「名爲意識」

「隨事攀緣」——「亦名分離識」

「分別六塵」——「又復說名分別事識」

曇延疏のこの解釋は杏雨書屋本にはまったく存在しないものであるが，しかし一方で，上に對照したように「分別六塵」「亦名分離識」「又復說名分別事識」などの語句に對する兩疏の注釋内容は基本的には一致している。したがってこれは杏雨書屋本が曇延疏を參照しながらも「三義」と「三名」との對應關係を省いたか，あるいは逆に曇延疏が杏雨書屋本を參照し，その上に「三義」と「三名」との對應づけを加上したかのいずれかであるが，この場合，後者であると考えるのが自然であろう³⁵⁾。

35) 曇延疏は『起信論』「此意復有五種名」(T32, 577b, 前項の【例2.1.2】を參照) 以下に對する注釋(Z1.71.3, 275c-276a)において意の「五名」と意の「五義」とを對應させているが，これも杏雨書屋本(羽333V, 285-301)にはみられない解釋であり，曇延疏が加上したものと考えてよい。曇延疏「此之五名，由依前五義以立」(Z1.71.3, 275c)。なお本文上述の意識の「三義」と「三名」との對應づけは慧遠疏(T44, 187b)・元曉疏(T44, 214bc)・法藏疏(T44, 266ab)のいずれにも採用されていないが(法藏疏はむしろ杏雨書屋本を承けている。次節の【例3.3.3】を參照)，この意の「五義」と「五名」との對應づけのほうは慧遠疏(T44, 186c)・元曉疏(T44, 213c)・法藏疏(T44, 264c)すべてに同じ解釋がみられる。

なお上掲の対照表において下線を引いて示したように、『起信論』の句「種種妄執」に對する注釋のなかで杏雨書屋本は「復執此性因自在不平等因及無因等生也（また『これらの自性は自在不平等因および無因など〔の因〕によって生じた』と〔いう見解に〕執着する）」と述べているが、これは眞諦譯『攝大乘論釋』依止勝相品の次の記述をふまえるものと思われる。

復次若人已了別諸法因，於十二緣生則得聰慧。何以故。由果從因生，不從自在天等不平等因生，亦不無因生。是故立因果二智。
(T31, 156b)

【例2.2.4】『起信論』「一者執相應染，依二乘解脫及信相應地遠離故」(T32, 577c) 以下に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 358-370)	曇延疏 (Z1.71.3, 277bc)
<p>第一「執相應染」者，謂皮煩惱。此是意識執外境界相，有能所□*****也。……</p> <p>* * 「不斷相應染」者，此是肉煩惱，即阿陀那識，未得對治已前，恒起不慶，與我相等境界相應，起無明等四惑也。……</p> <p>「三者分別智相應染」，此是心煩惱，分別世間出世間論法。……</p> <p>「四者現色不相應染」，此是皮氣，謂外塵習氣，染汚本識，恒與正思惟起，不覺其失，名不相應也。……</p> <p>「五能見心不相應染」，此是肉氣，此我見等惑，有識無境，故說能見心也。……</p>	<p>一「執相應染」者，謂皮³⁶⁾煩惱。此是意識緣外境界，有能所相應生，即是四住煩惱等心也。……</p> <p>二「不斷相應染」者，此是肉³⁷⁾煩惱，壞正理，立非理，增減因果相。即示前「相續不斷識」³⁸⁾「相續相」³⁹⁾也。……</p> <p>三「分別智相應染」者，此是心惑，分別世出世，故名之爲智。即是前「智識」⁴⁰⁾「智相」⁴¹⁾。……</p> <p>四「現色不相應染」者，此是皮⁴²⁾氣，謂取外塵習氣，染汚本識，恒與正思惟相應，不覺其失，名不相應。即是前「能現識」⁴³⁾「境界相」⁴⁴⁾。……</p> <p>五「能現心不相應染」者，此是肉⁴⁵⁾惑氣，此見等惑，有識無境，故名能見。即是前「轉識」⁴⁶⁾「能見相」⁴⁷⁾。……</p>

「六根本業不相應染」，此是心氣，謂最後一刹那無明氣也。……	六「根本業不相應染」者，此是心惑氣，謂最後一刹那無明氣。即是前之「業識」 ⁴⁸⁾ 「無明業相」 ⁴⁹⁾ 也。……
-------------------------------	--

上に對照したのは『起信論』のいわゆる「六染」に對する杏雨書屋本および曇延疏の注釋である。兩文獻の注釋内容は、「六染」の第二「不斷相應染」に對する注釋を除いて⁵⁰⁾基本的にほぼ同文であるが、下線を引いて示したように、曇延疏はさらに「六染」を前出の「五意」(業識・轉識・現識・智識・相續識)および『起信論』のいわゆる「三細」(無明業相・能見相・境界相)・「六麤」(智相・相續相・執取相・計名字相・起業相・業繫苦相)と對應させて次のように解釋している。

- 36) 續藏本は「彼」に作るが、誤植とみなして改める。
- 37) 脱字とみなして補う。
- 38) 『起信論』「五者名爲相續識，以念相應不斷故」(T32, 577b)。
- 39) 『起信論』「二者相續相，依於智故，生其苦樂覺，心起念相應不斷故」(T32, 577a)。
- 40) 『起信論』「四者名爲智識，謂分別染淨法故」(T32, 577b)。
- 41) 『起信論』「一者智相，依於境界，心起分別愛與不愛故」(T32, 577a)。
- 42) 續藏本は「彼」に作るが、誤植とみなして改める。
- 43) 『起信論』「三者名爲現識，所謂能現一切境界」(T32, 577b)。
- 44) 『起信論』「三者境界相，以依能見，故境界妄現，離見則無境界」(T32, 577a)。
- 45) 續藏本は「内」に作るが、誤植とみなして改める。
- 46) 『起信論』「二者名爲轉識，依於動心，能見相故」(T32, 577b)。
- 47) 『起信論』「二者能見相，以依動故能見，不動則無見」(T32, 577a)。
- 48) 『起信論』「一者名爲業識，謂無明力，不覺心動故」(T32, 577b)。
- 49) 『起信論』「一者無明業相，以依不覺故心動，說名爲業」(T32, 577a)。
- 50) 不斷相應染に對する杏雨書屋本の注釋の典據は、眞諦譯『攝大乘論釋』依止勝相品「論曰，二有染汚意，與四煩惱恒相應。釋曰，此欲釋阿陀那識。何者四煩惱。論曰，一身見，二我慢，三我愛，四無明」(T31, 158a)，「第二識是我相等或依止能分別，故名意」(T31, 158b)等。曇延疏の典據は同「若以此名，分別內法，或增或減，壞正理，立非理，名肉煩惱」(T31, 180b)。

執相應染——(意識)
 不斷相應染——相續不斷識・相續相
 分別智相應染——智識・智相
 現色不相應染——能現識・境界相
 能現心不相應染——轉識・能見相
 根本業不相應染——業識・無明業相

さきの【例2.2.3】と同様、兩文獻の注釋は基本的には一致しているので、杏雨書屋本が曇延疏を参照しつつ「六染」と「五意」および「三細六麤」との對應關係を省いたか、逆に曇延疏が杏雨書屋本を参照し、「六染」と「五意」「三細六麤」との對應づけを加上したかのいずれかであることは間違いないが、この場合もやはり後者であるとするのが自然であろう⁵¹⁾。

以上、いずれの例においても曇延疏の注釋内容は杏雨書屋本よりも發展していると考えられる。したがって、これらの例によってもやはり杏雨書屋本は曇延疏に先行すると結論される。

51) 曇延疏は以下の注釋において「五意」と「三細六麤」とを對應させているが、これも杏雨書屋本にはみられない解釋であり、曇延疏の加上であると考えてよい。

・『起信論』「一者無明業相」(T32, 577a) 以下に對する注釋 (杏雨書屋本 羽333V, 228-239; 曇延疏Z1.71.3, 274a-c)

・『起信論』「以依阿梨耶識, 說有無明。不覺而起, 能見, 能現, 能取境界, 起念相續」(T32, 577b) に對する注釋 (杏雨書屋本 羽333V, 273-276; 曇延疏Z1.71.3, 275c) なお本文上述の「六染」と「五意」「三細六麤」との對應づけも含め、これらはすべて慧遠疏・元曉疏・法藏疏にも同様の解釋がみられる (ただし配當の仕方は一部異なる)。

三 杏雨書屋本の歴史的 위치

ここまでの考察により、杏雨書屋本が曇延疏に先行する『起信論』注釋書であることは間違いないものと思われる。では杏雨書屋本は何時誰によって撰述されたのであろうか。

まず杏雨書屋本の成立年代については、前節の【例2.1.2】で確認したように眞諦譯『攝大乘論釋』の引用がみられるので、同論が譯出された陳文帝天嘉五年(564)⁵²⁾を上限と定めることができる。また前節の考證により杏雨書屋本成立の下限は曇延疏が撰述された年ということになるが、残念ながら曇延疏がいつ撰述されたのかを正確に知ることはできない。したがってここでは曇延の没年である隋文帝開皇八年(588)を下限として設定しておく。

一方、杏雨書屋本の撰述者については、前節の【例2.1.1~3】および【例2.2.3】において指摘したように、杏雨書屋本の注釋のなかに眞諦の學説に基づく部分があり、また曇延疏と比較して杏雨書屋本のほうが眞諦譯に忠實であるという傾向を看取することができるので、眞諦譯の諸文獻や眞諦の學説に習熟した、眞諦の學系に近い人物によって撰述されたのではないかという推測が成り立つ。

以上の推測をもとに、本節では杏雨書屋本における眞諦譯の依用状況やいわゆる「三大疏」との影響關係などを檢證し、杏雨書屋本の成立背景と『起信論』注釋史上における杏雨書屋本の位置づけとを明らかにしてみたい。以下、(1) 杏雨書屋本における眞諦譯の依用、(2) 現存寫本の性格、(3) 杏雨書屋本と「三大疏」との關係、の三項に分かって論ずる。

52) 『攝大乘論釋』の譯出年時の考證については宇井伯壽 [1930] を参照。

(1) 杏雨書屋本における眞諦譯の依用

本項では、まず杏雨書屋本における眞諦譯（および眞諦撰述）諸文獻の依用の例を曇延疏と比較しながら検討し、杏雨書屋本が眞諦に近い文獻であることを論證してみたい。以下、文例を列擧し、注目される部分に下線を引いて示す。

【例3.1.1】『起信論』「(所謂不生不滅與生滅和合, 非一非異,) 名爲阿梨耶識」(T32, 576b) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 41-44)	曇延疏 (Z1.71.3, 269d-270a)
「名爲阿梨耶識」者, 以義證名也。依此無始客塵熏習本覺, 此之本覺不守自性, 隨他熏習, 有緣起功能。即此和合生滅功能者, 名爲和合識也。 <u>若依三藏法師『九識章』內, 名無沒識。以能攝持無始善惡三性種子, 爲因不亡, 得果必然, 無有失沒, 名無沒也。</u>	「名爲阿梨耶識」者, 以有依隱 ⁵³⁾ 和合義, 故即立此藏, 名爲阿梨耶也。

下線を引いて示したように、杏雨書屋本はここで阿梨耶識を無沒識と呼ぶ「三藏法師『九識章』」の説に言及するが、これは眞諦撰『九識章』(佚)からの引用(取意)であると考えて間違いない。『九識章』に関しては大竹晉氏の最新の研究があり、眞諦の直説であることが論證されている⁵⁴⁾。したがってこの引用も、杏雨書屋本が眞諦に近い

53) 『佛性論』辯相分・總攝品「阿梨耶者, 依隱爲義」(T31, 803a)。曇延疏「第二心生滅相者, 明此本識是三性識種子。而此種子若未生時, 與彼本識互相依隱, 不顯自性。至於生時, 功能方現。是故有生滅相, 能示大乘相」(Z1.71.3, 267b)。

54) 大竹晉 [2012] を参照。なお『起信論』「以不達一法界故」(T32, 577c) に對する杏雨書屋本の注釋に「以未得聞熏習等益其勢力, 故不能返照自體也」(羽333V, 353) とあるが、ここにみえる「返照自體」という概念もおそらく『九識章』に基づくものであろう。大竹晉 [2012] の【文2】を参照。

ことの例證とすることができる⁵⁵⁾。

なおこの『九識章』の説は、前節の【例2.1.2】で検討した心・意・識の廣義の意味(「通」)のうち、本識の「意」の説明と一致する。

本識三者、……復能令彼善、惡、不動三性種、攝持不失、與作依止、名意。(羽333V, 280-281)

【例3.1.2】『起信論』「智淨相者、謂依法力熏習、如實修行、滿足方便、故破和合識相、滅相續心相、顯現法身、智淳淨故」(T32, 576c)に對する注釋

杏雨書屋本(羽333V, 129-139)	曇延疏(Z1.71.3, 271d-272a)
<p>前中有二。初明智藉因成。第二「破和合」已下、明智成得果。</p> <p>初言「謂依法力熏習」者、依聞熏習力也。</p> <p>「如實修行」者、若此聞熏習、在信位時、雖有熏習、由未有力。乃至解位、方始有力、得如實解。以有解故、至十行位、能如實修行也。</p> <p>「滿足方便」者、謂十迴向、修方便行滿也。</p> <p>下明得果。得果內有二。初明斷德果。次「顯現」已下、明智德果。</p> <p>「破和合識相」者、初地是轉依之始、阿梨耶識自此始壞也。</p>	<p>「謂依法力熏習」者、謂依聞熏習力也。此則種⁵⁶⁾性成就。</p> <p>「如實修行」者、依前種性、始起修行。始從解行、修⁵⁷⁾至十地、所修行也。隨順眞如、修行六度、故言「如實」也。</p> <p>「滿足方便」者、謂十地終心、因行窮滿足。此明能對治道也。</p> <p>「破和合識相」者、此之藏識、無始已來、依他染法、和合共生。從得治道、方漸破</p>

55) なお慧遠疏・法藏疏の對應箇所も「無失沒識(無沒識)」に言及するが、杏雨書屋本の影響といえるかどうかはよく分からない。慧遠疏「『名阿梨耶識』者、是梵語也。此翻名爲無失沒識。雖在生死、性不失沒、故名無沒」(T44, 182c)。法藏疏「梁朝眞諦三藏、訓名翻爲無沒識、今時樊法師、就義翻爲藏識。但藏是攝藏義、無沒是不失義、義一名異也」(T44, 255c)。

<p>「滅相續心相」者，此阿梨耶識，與不淨品和合，成六七識及諸道種子，能令三有相續。和合既壞，種子不成。種子不成，故相續心滅也。</p> <p>「顯現法身」者，壞和合相，不信、我執、怖畏、自愛四人習氣，從此始滅，法身四德，自此漸顯，乃至佛地，顯之究竟也。</p> <p>「智純淨故」者，爲明能治之口。若在地前，所有智慧，以未證眞如，故由有無明垢障。今至初地已上，相續心滅，證淨法身，無明垢盡，智德純淨也。</p>	<p>壞也。</p> <p>此有四位，……</p> <p>「滅相續心相」者，此阿梨耶識，與不淨品和合，成六七識及諸道種子，能令三有相續。和合既壞，種義不成。種子不成，故相續心滅也。</p> <p>此則明所滅之法。</p> <p>「顯現法身」者，無明我執，從此並滅，法身四德，自此漸顯，乃至佛地，顯之究竟也。</p> <p>「智淳淨故」者，昔在因位，障未盡故，相亦未淨。今至極果，垢累盡故，智得淳淨。</p>
--	---

まず杏雨書屋本は『起信論』のこの一節を次のように分節している。

- 1 明智藉因成——「謂依法力熏習，如實修行，滿足方便」
- 2 明智成得果
 - 2.1 明斷德果——「破和合識相，滅相續心相」
 - 2.2 明智德果——「顯現法身，智淳淨故」

杏雨書屋本は全體を大きく因を明らかにする部分と果を明らかにする部分とに分け，後者をさらに「斷徳の果」を明らかにする部分と「智徳の果」を明らかにする部分とに細分しているが，この斷徳・智徳は，眞諦譯『攝大乘論釋』に説かれる斷徳・智徳・恩徳という佛の三徳を典據とするものである⁵⁸⁾。

56) 續藏本は「私」に作るが，誤植とみなして改める。

57) あるいは「終」の誤りか。

58) 眞諦譯『攝大乘論釋』學果寂滅勝相品「一切相不顯現，即是斷徳。以一切相滅，故清淨眞如顯現，即是智徳。如理如量智圓滿，故謂具一切智及一切種智，至得一切相自在，即是恩徳」(T31, 248a)。なおこの三徳が眞諦譯特有の概念であることについて、

一方,曇延疏は『起信論』のこの一節を次のように分節している。

- 1 種性成就——「謂依法力熏習」
- 2 明能對治道——「如實修行, 滿足方便」
- 3 明所滅之法——「破和合識相, 滅相續心相」
- (4果) ——「顯現法身, 智淳淨故」

曇延疏は杏雨書屋本とは異なる独自の觀點から分節を施しており, 斷德・智德という概念を採用していないが, ここで注目されるのは, 『起信論』の最後の句「智淳淨故」に對する注釋において, 杏雨書屋本が上述の「斷德の果」「智德の果」という区分に基づいて「智德純淨也」と解釋するのに對し, 曇延疏は「德」の字を「得」に置き換えたうえで次のように解釋していることである。

「智が淳淨なるが故に」とは, むかし因位にあったときは, 障礙がまだ盡きていなかったので, (智慧の) ありさまもまだ淳淨ではなかった。いま究極の果に到達して, 惑累が盡きたので, 智慧が淳淨となることができたのである。

「智淳淨故」者, 昔在因位, 障未盡故, 相亦未淨。今至極果, 垢累盡故, 智得淳淨。(Z1.71.3, 272a)

おそらく曇延疏は, 杏雨書屋本にみられる斷德・智德という概念を採用しなかったことに合わせて, 杏雨書屋本の「智德純淨也」を「智得淳淨」と読み替え, 「因位においては未だ淳淨ではないが極果に至れば淳淨を得る」という論理にすり替えたのだと考えられる。

また次に, 杏雨書屋本は『起信論』の句「顯現法身」を次のように注釋している。

「法身を顯現する」とは, (初地において) 和合識の相を破すこと

長尾雅人 [1982・87] (IX, 2A, n.3; X, 25, n.1) を参照。

によって⁵⁹⁾、不信・我執・怖畏・自愛という四人(=一闡提・外道・聲聞・獨覺)の習氣が、そこから初めて滅せられてゆき、(淨・我・樂・常という)法身の四徳が⁶⁰⁾、そこから次第に顯れてきて、佛地に至って、それ(=法身の四徳)を顯現することが究まるのである。

「顯現法身」者、壞和合相、不信、我執、怖畏、自愛四人習氣、從此始滅、法身四徳、自此漸顯、乃至佛地、顯之究竟也。

(羽333V, 135-137)

これは眞諦譯『攝大乘論釋』依心學勝相品の次のような説に基づくものである⁶¹⁾。

……此定縁眞如實有易得、有無量功德、故能破一闡提習氣、即是方便生死、障於大淨。由破此障、故得大淨果。……由自在故、能行施等十度、圓滿菩提資糧福徳行、故能破外道我見習氣、即是因縁生死、障於大我。由破此障、故得大我果。……由此二義、是故菩薩能離聲聞怖畏習氣、即是有有生死、障於大樂。由破此障、故得大樂果。……此定多行他利益事、能破獨覺自愛習氣、即是無有生死、障於大常。由破此障、故得大常果。(T31, 234c-235a)

一方、曇延疏は同じ句を次のように注釋している。

「法身を顯現する」とは、無明の我執が、そこからすべて滅せられてゆき、法身の四徳が、そこから次第に顯れてきて、佛地に

59) 杏雨書屋本の上文に「『破和合識相』者、初地是轉依之始、阿梨耶識自此始壞也」(羽333V, 133-134)とある。

60) 眞諦譯『攝大乘論釋』依心學勝相品「常樂我淨是法身四徳」(T31, 174a)。

61) 『攝大乘論釋』のこの教説はそもそも『寶性論』に基づくものであるが、漢譯『究竟一乘寶性論』一切衆生有如來藏品の該當箇所(T31, 829a-830a)には「我執」「自愛」の語が出ず、またこれらの障礙を「習氣」とも稱していないので、杏雨書屋本は明らかに『寶性論』ではなく『攝大乘論釋』に據っている。高崎直道 [1987] (pp.51-56)も参照。

至って、それ(=法身の四徳)を顯現することが究まるのである。

「顯現法身」者、無明我執、從此竝滅、法身四徳、自此漸顯、乃至佛地、顯之究竟也。(Z1,71,3, 272a)

この注釋が杏雨書屋本を下敷きに行っていることは明らかであるが、曇延疏は(おそらく「無明我執、從此竝滅、法身四徳、自此漸顯」と綺麗な對句にするために)杏雨書屋本の「不信、我執、怖畏、自愛四人習氣」を「無明我執」の四字に要略してしまっており、これが本來『攝大乘論釋』の教説に基づくものであるということが分からなくなってしまっている。

またさらに言えば、杏雨書屋本は下に示すように『起信論』のこの一節全體を修行階位の各段階に當てはめて解釋しているの⁶²⁾、いま本論の文「顯現法身」を注釋して「不信、我執、怖畏、自愛四人習氣、從此始滅、法身四徳、自此漸顯」と言うのは初地(=轉依)以後の修行段階を指しているということがすっきり理解できる。

「謂依法力熏習」—————聞熏習
 「如實修行」—————信位・解位・十行位
 「満足方便」—————十迴向
 「破和合識相」「滅相續心相」———初地=轉依
 「顯現法身」「智淳淨故」—————初地已上、乃至佛地

これに對し曇延疏は、上に示したように『起信論』のこの一節を「種性成就」「能對治道」「所滅之法」(および果)という新たな觀點から分類している。そして「能對治道」(=修行道)を明らかにする

62) なおこの聞熏習に始まる修行階位も眞諦譯『攝大乘論釋』に基づくものである。『攝大乘論釋』依止勝相品「此聞熏習及四法爲四徳種子、四徳圓時、本識都盡」(T31, 174a)、入因果修差別勝相品「願樂行人、自有四種、謂十信、十解、十行、十迴向」(T31, 229b)等を参照。

のは『起信論』「如實修行，満足方便」の二句であると解釋し，次のように修行段階を當てはめているので，いま本論の文「顯現法身」を注釋して「無明我執，從此竝滅，法身四德，自此漸顯」と言うものの，「從此（自此）」というのがどの段階のことを指しているのかがよく分からなくなってしまう。

（「謂依法力熏習」——聞薰習）

「如實修行」——始從解行，修至十地

「満足方便」——十地終心

以上，杏雨書屋本は眞諦譯にストレートに依據して『起信論』を注釋しており，眞諦に近いとすることができる。一方，曇延疏のほうは杏雨書屋本を要略したり，また独自の觀點から分節を施すなどして，結果的に眞諦譯から遠ざかっていることが明らかである⁶³⁾。

【例3.1.3】『起信論』「若證法身得少分知，乃至菩薩究竟地不能知盡，唯佛窮了」（T32, 577c）に對する注釋

63) なお法藏疏（T44, 259c-260a）は『起信論』のこの一節を次のように區分しており，杏雨書屋本と一致する。

1 因——「謂依法力熏習，如實修行，満足方便」

2 果

2.1 斷果——「破和合識相，滅相續心相」

2.2 智果——「顯現法身，智淳淨故」

しかしまた法藏疏は『起信論』の文「謂依法力熏習，如實修行，満足方便」を次のように修行階位に配當しており，これは曇延疏のほうに近い。

「依法力熏習」——地前

「如實修行」——登地已上

「満足方便」——十地行終

この例は法藏が杏雨書屋本と曇延疏とを共に参照していたことを示唆するであろう。本節第三項を参照。

杏雨書屋本 (羽333V, 338-342)	曇延疏 (Z1.71.3, 276d)
「若證法身得少分知」者，然法身有二種。一正說法身，二正證法身。但十解已去，菩薩證正說法身時，已知此識分別性一分。「乃至菩薩盡地不能盡知」者，始從初地已去，證得正證法身，證依他、眞實二分未究竟也。「唯佛窮了」者，至佛地，此識生一切法功能都盡，了達法身。	「若證法身得少分知」者，謂初地菩薩，證見自心未究竟，故名少分也。「乃至菩薩究竟地」者，謂第十地。「不能知盡」者，細障未盡，知未圓滿。「唯佛窮了」者，以至此位，生滅相盡，圓證法界，故名窮了。

杏雨書屋本は『起信論』のこの一節を正說法身・正證法身という二種の法身によって解釋している。これは眞諦譯『佛性論』辯相分、無變異品の次の説に基づくものであるが、曇延疏はこの二種法身の説をまったく省いてしまっている。

諸佛法身有二種。一正得，二正説。言正得法身者，最清淨法界，是無分別智境，諸佛當體，是自所得法。二正說法身者，爲得此法身，清淨法界正流，從如所化衆生識生，名爲正說法身。(T31, 808a)

この例においても，やはり杏雨書屋本のほうが眞諦譯の文獻を忠實に依用していると言うことができる。

以上，杏雨書屋本の注釋内容のなかに眞諦撰『九識章』や眞諦譯『攝大乘論釋』『佛性論』に基づく部分があることを確認することができ⁶⁴⁾，また曇延疏との比較においても明らかにより眞諦に近いので，

64) 寫本が一部脱落しているため積極的な論證材料とすることはできないが，ほかに次の例も指摘することができる。

まず杏雨書屋本 (羽333V, 5-22) は『起信論』の文「當知眞如自性，非有相，非無相，非非有相，非非無相，非有無俱相」(T32, 576ab) を，増益謗・損減謗・戲論謗・相違謗という「四謗」を對治するための教説として解釋しているが(一部推定)，この「四

杏雨書屋本は眞諦譯・撰の諸文獻に習熟した、眞諦に近い関係にある人物によって撰述された可能性が高いのではないかと考えられる。

ただ具体的に誰が杏雨書屋本を撰述したのかは、現段階では不明と言うよりほかない。『起信論』の注釋を著したと伝えられる眞諦周邊の人物としては、まず眞諦本人が擧げられるが⁶⁵⁾、【例3.1.1】で指摘したように杏雨書屋本は眞諦『九識章』を「三藏法師『九識章』」と呼んで引用（取意）しているので、眞諦本人の注釋ではありえないであろう⁶⁶⁾。また眞諦の直弟子であり、『攝大乘論釋』等の翻譯や眞諦撰述書の成立にも深く關與した慧愷（智愷，518-568）が『起信論』

謗は眞諦譯『攝大乘論釋』依慧學勝相品「言說有四種，即是四謗。若說有，即增益謗。若說無，即損減謗。若說亦有亦無，即相違謗。若說非有非無，即戲論謗」（T31, 244a）に基づくものである。

非有相————— 增益謗
 非無相————— 損減謗
 非非有相，非非無相— 戲論謗
 非有無俱相————— 相違謗

一方、曇延疏の對應箇所（Z1.71.3, 269bc）は全體的に杏雨書屋本を依用した形跡が認められるものの大分簡略化されており、「四謗」の對治との對應づけも省略されてしまっている。したがって、これもやはり杏雨書屋本のほうが曇延疏よりも眞諦に近いことを示す例證の一つと考えることができる。

なお元曉疏の對應箇所（T44, 207c-208a）も杏雨書屋本と同様、增益・損減・相違・戲論の四謗に言及するが、注釋内容そのものは杏雨書屋本とかなり異なっているので、ここに杏雨書屋本の影響が認められるかどうかは疑問である。また法藏疏の對應箇所（T44, 253c-254a）は明らかに曇延疏をふまえている。

- 65) 費長房『歷代三寶紀』卷十一「起信論疏二卷（太清四年（550）出）」（T49, 99a）。智愷「大乘起信論序」「玄文二十卷」（T32, 575a）。大竹晉 [2003] (p.78), 吉津宜英 [2003] を参照。
- 66) 眞諦の學說を「三藏法師」と呼んで引く例は、たとえば以下の著述にもみられる。吉藏『仁王般若經疏』卷上一（T33, 318a），同『法華義疏』卷七（T34, 544a），智顛說『妙法蓮華經文句』卷五下（T34, 68b），[道基]『攝大乘義章』卷第四（T85, 1041c）。

の注釋を著したという傳承もあるが⁶⁷⁾，同定するには資料が不足している。しかしいずれにしても杏雨書屋本の存在は，從來，歴史事實といえるのかどうか疑問視されていたこれらの傳承に對し再考を促すものであるといえよう。

(2) 現存寫本の性格

前項では杏雨書屋本における眞諦譯の依用状況を曇延疏と比較しながら検討し，杏雨書屋本の撰述者が眞諦に近い人物であることを推論したが，杏雨書屋本の成立背景をさらに明らかにするためには，本稿第一節において指摘した現存寫本の性格をめぐる問題點に注目する必要がある。前述のように現存の寫本には撰述者自身によるものと思われる修訂の跡がみられるが，いま特に注意されるのは，それらの修訂の跡のうち幾つかのものは曇延疏に知られていなかった可能性があるということである。もしそうであれば，現存の寫本は曇延疏が参照した杏雨書屋本そのものではないということになり，したがって杏雨書屋本には細部において内容の異なる複数の異本が存在していたということになるであろう。

以下，文例を列擧し，この問題を検討してみたい。{ }内は抹消された文字，〈 〉内は行間に書き加えられた文字を表す。

【例3.2.1】『起信論』「如凡夫人，覺知前念起惡」(T32, 576b) 以下に對する注釋

67) 義天『新編諸宗教藏總錄』卷三「大乘起信論。……疏一卷，智愷述。……注二卷，智愷述」(T55, 1175a)。眞諦の譯業および著述において慧愷が果たした役割について，船山徹 [2012] を参照。

杏雨書屋本 (羽333V, 79-80)	曇延疏 (Z1, 71.3, 270c)
此四位中, 分文各四。一能觀人, 二所觀境, <u>三觀(所)成</u> 離障, 四明覺分齊。	於四位内, 文皆有四。一能觀人, 二所觀境, <u>三觀所離障</u> , 四結覺分齊。

下線を引いた部分で, 杏雨書屋本は最初「觀所離障」と書いて後からそれを「觀成離障」と修正し, そして後文 (羽333V, 86) ではその修正に従って初めから「觀成離障」と書いている。一方, 曇延疏のほうは杏雨書屋本の修正前と同じ「觀所離障」であり, 後文 (Z1.71.3, 270d; 271a) においても一貫して「觀所離障」と書いている。

この場合には, 曇延が杏雨書屋本の修正を知っていながらあえてそれを採用しなかったと想定することも可能だが, しかし上述のように杏雨書屋本は後文においては本文そのものを初めから「觀成離障」と書いているので, もし曇延がこの修正を知っていたとすれば自身の注釋に取り入れたのではないだろうか。あるいは曇延が参照した寫本にはこの修正が存在していなかったのかもしれない。

【例3.2.2】『起信論』「不出不入」(T32, 576c) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 183-184)	曇延疏 (Z1, 71.3, 273a)
「不出」者, 此自心現境{界}, <如>若滅時, 不出心外, <去無所至>也。如鏡像滅* * * * *。	「不出」者, 此自心現境界若滅時, 不出心外。如鏡像滅時, 不出鏡外也。
「不入」者, 後若更現, 亦不從外入, <來無所從>也。如鏡像現時, 亦不外入, <無所來>也。	「不入」者, 後若現時, 且不從外來, 故言不入。如鏡像現時, 不從外入也。

最初の下線を引いた部分で, 杏雨書屋本は「此自心現境界, 若滅時」を「此自心現境, 如若滅時」に修正しているが, 曇延疏のほうは修正前の文と一致している。

また杏雨書屋本は續いて三箇所、行間に文字を書き加えているが、これも曇延疏には影響がみられない。杏雨書屋本の挿入句は『維摩經』や『涅槃經』の教説をふまえると考えられるが⁶⁸⁾、この場合ももし曇延がこの修訂を知っていたとすれば、自身の注釋に取り入れていたのではないだろうか。

【例3.2.3】『起信論』「遍照衆生之心」(T32, 576c) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 203-204)	曇延疏 (Z1.71.3, 273c)
「遍照衆生之心」者、以佛(日)〈二身〉慧光、遍照〈有緣〉衆生(二種身)〈機欲心〉也。其二身者、一本性法身、即是本覺性也。二隨意生身、隨心幻起身也。	「遍照衆生之心」也 ⁶⁹⁾ 、以佛日慧光、照諸衆生二種之心。一本性淨心、二隨緣用心也。

この注釋は眞諦譯『佛性論』辯相分、總攝品の次のような説に基づくものである。

故『經』中説、「一闡提人、墮邪定聚有二種身。一本性法身、二隨意身。佛日慧光、照此二身」。法身者、即眞如理。隨意身者、即從如理起。(T31, 800c)

まず杏雨書屋本のほうを検討すると、下線を引いた部分は次のように二段階に書き改められていると考えられる。

以佛日慧光、遍照衆生二種身也。

↓

以佛二身慧光、遍照有緣衆生機欲心也。

68) 鳩摩羅什譯『維摩詰所説經』文殊師利問疾品「來者無所從來、去者無所至、所可見者更不可見」(T14, 544b)。北本『大般涅槃經』梵行品「菩薩摩訶薩觀第一義時、是眼生時無所從來、及其滅時去無所至、本無今有、已有還無、推其實性、無眼無主」(T12, 461c; 南本T12, 704a)。

69) 「者」の誤植か。

上に引いた『佛性論』の下線部分とより良く一致するのは、杏雨書屋本の修正前の文章のほうである。おそらく、杏雨書屋本は初めは『佛性論』に忠實に「以佛且慧光，遍照衆生二種身也」と書いたが、注釋對象の『起信論』の文が「遍照衆生之心」であるので、それに合わせてまず「遍照衆生二種身」を「遍照有縁衆生機欲心」に修正し、次に後文に出る本性法身と隨意生身という「二身」との關連性を保つために「佛且慧光」を「佛二身慧光」と修訂したのであろう。

一方、曇延疏の下線部分は明らかに杏雨書屋本の修正前の文章を下敷きにしている。ただ杏雨書屋本の「遍照衆生二種身」が「照諸衆生二種之心」と改變されているが、これもやはり注釋對象の『起信論』の文が「遍照衆生之心」であるから、それに合わせて「身」を「心」に変更したのであろう。この場合、もし曇延疏が杏雨書屋本の修訂を知っていたとすれば、杏雨書屋本がすでに同じ意圖からする修正を施しているのに、あえて修訂前の文を利用し改變する必要はなかったのではないだろうか。曇延疏は杏雨書屋本のこの修訂を知らなかったのではないかと考えられる。

ここまでは杏雨書屋本にみられる行間の書き込みや修正が曇延疏に知られていないと考えられる例を検討したが、これとは逆に杏雨書屋本の書き込みが曇延疏に知られていると考えられる例もある。次の二例である。

【例3.2.4】『起信論』「(三者境界相，以依能見故境界妄現,) 離見則無境界」(T32, 577a) 以下に對する注釋

杏雨書屋本は『起信論』「離見則無境界」に對する注釋において次のように行間に「空花」の譬喩を書き加えている。

「無境界」者，離心變異外，更無別境也。〈其由⁷⁰⁾似何。如似熱氣熏眼，遂見空花，緣此起於分別。然此花者，但是眼依。〉
(羽333V, 238-239)

一方，曇延疏は『起信論』「三者境界相」以下に對する注釋の冒頭部分でやはり「空花」の譬喩を述べている。

次釋內有二。初正解依心現妄境。「以有境⁷¹⁾界緣」已下，明此妄境能生分別心也。譬如翳目能現空花，花若生已，還爲翳目所見也。(Z1.71.3, 274b)

この例は兩文獻の説が語句レベルで一致するというわけではないので、同じ譬喩を両者が別々に取り上げた可能性もあるが、あるいは曇延疏は杏雨書屋本の書き込みを知っていたのかもしれない。

【例3.2.5】『起信論』「(復次生滅因緣者，所謂衆生依心意意識轉故。……) 此意復有五種名」(T32, 577b) に對する注釋

前節の【例2.1.2】で指摘したように、杏雨書屋本は心・意・識に廣義の意味(「通」と狭義の意味(「別」とがあるという自説の教證として行間に書き加えるかたちで眞諦譯『攝大乘論釋』を引用していたが、同じ箇所でも検討した曇延疏の心・意・識の定義は、杏雨書屋本が廣義の意味に對する教證として引く『攝大乘論釋』の文に據っているのではないかと考えられる。兩者を對照すると次のようになる。

70) 「猶」に通ず。

71) 續藏本は「坑」に作るが、誤植とみなして改める。

杏雨書屋本 (羽333V, 282)	曇延疏 (Z1, 71.3, 275b)
依止義是意義, 能與他生爲依故。	能生依止, 說名爲意。
集起義是心義, 謂種種茲長, 變異爲三界。	種種茲長, 名之爲心。
了別義是識義, 以能取塵, 故名識。	取塵了別, 名之爲識。

この定義はそもそも『攝大乘論釋』に基づくものであるから、曇延疏が獨自に『攝大乘論釋』を参照した可能性も考えられるが、杏雨書屋本の引用そのままの文章は『攝大乘論釋』にはないので⁷²⁾、曇延疏が参照したのはあくまでも杏雨書屋本であったのではないかと思われる。もしそうであれば、少なくとも杏雨書屋本のこの書き込みは曇延疏に知られていたということになる。

以上、現存の寫本にみられる修訂の跡のうち一部のものは曇延疏に知られていた可能性があるが、他の幾つかのものは曇延疏には知られていなかったのではないかと考えられる。したがって、おそらく曇延が入手し参照した杏雨書屋本は現存の寫本と完全に同じ内容のものではなかったのであろう (なお現存寫本にみられる行間の加筆のうち、少なくとも一つは法藏疏にも知られている。次項の【例 3.3.2】を参照)。

さきに本稿第一節において、現存の寫本に著者自身によるものと思われる推敲の跡があり、また一方で編者の介在を疑わせる書寫の省略も存在することを指摘したが、いま現存寫本の修訂の跡がすべて曇延疏に知られているわけではないらしいということを考え合わせると、杏雨書屋本には、著者による推敲を反映しつつもそれぞれ修訂や編集の度合いの異なる複数 (少なくとも二種類以上) の異本が存

72) 上注 9 を参照。

在していたのではないかと考えられる。

おそらく杏雨書屋本はもともと講義の場で成立した文献であり、師(著者)の講義を弟子(編者)達がまとめ上げる過程において複数の異本が形成されていたのではないだろうか⁷³⁾。そしてそのうちの一本が曇延に傳わり、別の一本が敦煌寫本として傳存したと考えることが、現段階では最も蓋然性が高い推測であると思われる。

なお杏雨書屋本の成立背景を以上のように考えることができるとすれば、前項で検討したとおり杏雨書屋本の撰述者は眞諦の學系に近い人物であると推定されるから、杏雨書屋本のもととなった講義も南朝の眞諦周邊で行われた可能性が高いのではないかと考えられる。ただこのことを論證するためには、まず寫本學的な見地から、現存の寫本が確かに南朝の遺品であると言えるのかどうかを明らかにする必要がある。現時点ではまだそこまで調査が行き届いていないので、杏雨書屋本の成立地を確定することは今後の課題としておきたい。

(3) 杏雨書屋本と「三大疏」との関係

ここまで主に曇延疏との比較を通して新出の杏雨書屋本の成立年代等を考察し、杏雨書屋本が従来現存最古の『起信論』注釋書と

73) このような講義の場で成立した文献の實例として、やや時代は下るが、敦煌で活動した曇曠(?-763-786以後・788以前?)の著述、『金剛般若經旨贊』の修正過程の草稿本(S721V)が敦煌寫本中に傳存することや、曇曠の影響を受けた法成(?-833-859?)の『瑜伽師地論』の講義を弟子達が筆録した講義録(『瑜伽論手記』『瑜伽論分門記』)が複数傳存していることなどが挙げられる。上山大峻 [1990] (pp.78-81; 221-229)を参照。なお法成の弟子達が聽講の際に使用したことを示す題記を持つ『瑜伽師地論』の寫本も多数傳存しているが、これらの題記には明らかに偽造と認められるものも存在することが指摘されている。榮新江・余欣 [2005]を参照。

みなされてきた曇延疏に先行する文獻であることを明らかにしてきた。本稿の初めに述べたように、中國(および朝鮮)で撰述された『起信論』に對する初期の注釋書として曇延疏以外に慧遠疏・元曉疏・法藏疏の三疏(いわゆる「三大疏」)が現存するが、ではこの「三大疏」と杏雨書屋本との關係はどうなるであろうか。最後に本項において、「三大疏」と杏雨書屋本とのあいだに影響關係がみられるかどうかを検證し、『起信論』注釋史上の杏雨書屋本の位置を明らかにしてみたい。

初めに曇延疏および「三大疏」の相互關係をめぐる従來の研究結果を確認すると、まず指摘されているのは曇延疏→元曉疏→法藏疏という影響關係が顯著に認められることである⁷⁴⁾。特に法藏疏については、全體にわたって元曉疏を主に參照しているが、部分的に曇延疏を直接參照している部分もあることが指摘されている⁷⁵⁾。

次に慧遠疏については、慧遠疏が曇延疏を參照しているらしいと考えられる箇所⁷⁶⁾、また慧遠疏が元曉疏および法藏疏に影響を與えて

74) 望月信亨 [1922], 吉津宜英 [1976] [1991] 等を參照。上注26・35・51も參照。

75) 吉津宜英 [1976] (p.168, n.12)・[1991] (p.494) を參照。ほかに次の例もある。

- ・『起信論』「當知眞如自性, 非有相, 非無相, 非非有相, 非非無相, 非有無俱相」(T32, 576ab) に對する注釋(上注64を參照)
- ・『起信論』「等虛空界, 無所不遍, 法界一相」(T32, 576b) に對する注釋(曇延疏 Z1.71.3, 270ab [杏雨書屋本 羽333V, 52-55も同じ]; 法藏疏T44, 256b)
- ・『起信論』「又一切染法所不能染, 智體不動, 具足無漏, 熏衆生故」(T32, 576c) に對する注釋(曇延疏Z1.71.3, 273b [杏雨書屋本 羽333V, 190-197も同じ]; 法藏疏T44, 261bc)
- ・『起信論』「是故三界虛偽, 唯心所作」(T32, 577b) に對する注釋(曇延疏Z1.71.3, 276a [杏雨書屋本 羽333V, 301-303も同じ]; 法藏疏T44, 265bc)

76) 吉津宜英 [1972] [1973] [1976] [1991], 柏木弘雄 [1981] (p.34) を參照。ほかに次の例もあるが、曇延疏と慧遠疏との關係を積極的に論證するには至らない。

いるのではないかと考えられる箇所⁷⁷⁾があることが指摘されているが、必ずしも十分には証明されていないようである。慧遠疏は一般的に元曉疏・法藏疏とあわせて「三大疏」と稱されてはいるが、曇延疏も含め他の注釋書との関係は現段階では不明と言うべきであろう⁷⁸⁾。

以上をまとめると、元曉疏は曇延疏を、法藏疏は元曉疏と曇延疏を参照しており、慧遠疏の位置づけは不明、ということになる。

さて杏雨書屋本と「三大疏」との関係であるが、結論的に言うと慧遠疏と元曉疏の兩疏については、杏雨書屋本の現存部分と比較する限り、兩疏が杏雨書屋本を参照したことを示す確かな痕跡を見出すことはできない⁷⁹⁾。

一方法藏疏については、同疏が杏雨書屋本を参照した形跡をいくつか見出すことができる。以下に三例を挙げ、一致する部分に下線を引いて示す。

・『起信論』「一切心識之相，皆是無明」(T32, 576c)に對する注釋(曇延疏Z1.71.3, 272a [杏雨書屋本 羽333V, 141-143も參照]；慧遠疏T44, 185a)

・『起信論』「如是衆生自性清淨心，因無明風動，……智性不壞故」(T32, 576c)に對する注釋(曇延疏Z1.71.3, 272bc [杏雨書屋本 羽333V, 154-163も參照]；慧遠疏T44, 185a)

77) 今津洪嶽 [1918] (p.31), 吉津宜英 [1972] (pp.87-88)・[1976] (pp.153-156)・[1991] (pp.501-502), 柏木弘雄 [1981] (pp.34-35)を參照。

78) ただし慧遠疏にみられる『妙法師』説の引用や「有人」の解釋への批判は、慧遠疏に先行する『起信論』注釋書の存在を示唆する(吉津宜英 [1972]を參照)。曇延疏(杏雨書屋本)とは別系統の、慧遠疏に連なる『起信論』注釋の流れが北朝に存在していた可能性を考慮すべきかもしれない。

79) 上注55・64のような例もあるが、杏雨書屋本との関係を積極的に論證するには至らない。

【例3.3.1】『起信論』「復次覺體相者，有四種大義，與虛空等，猶如淨鏡」(T32, 576c) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 168-173)	法藏疏 (T44, 261a)
數、名、義、此三種如文應知。四種喻者，顯示分別。 <u>一空鏡者</u> ，謂離一切物體，及無顯物體功能，況於覺性無有分別，本空淨故。 <u>二不空鏡</u> ，由與質像相應，及有顯像功能，況於覺體乃是證智所依，有內熏之力故。 <u>三者淨鏡</u> ，以離垢穢，況覺體清淨，出離染障故。 <u>四受用鏡</u> ，置之高幢，須者受用，況於本覺既出於障外，能現後智。置於行者心幢之上，隨心所念，各得利益。	前中，以空及鏡皆有四義，故取之爲喻 ⁸⁰⁾ 。 <u>一空鏡</u> ，謂離一切外物之體。 <u>二不空鏡</u> ，謂鏡體不無，能現萬象。 <u>三淨鏡</u> ，謂磨治離垢。 <u>四受用鏡</u> ，置之高臺，須者受用。

【例3.3.2】『起信論』「同相者，譬如種種瓦器，皆同微塵性相」(T32, 577a) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 252-254)	法藏疏 (T44, 263c)
〈言「同相」者，染淨二法同以眞如爲體，眞如以此二法爲相故。〉 ⁸¹⁾ …… 初言「種種瓦器」者，譬染淨二法。 「皆同微塵性」者，器雖種種，皆以微塵爲體。 「相」者，此微塵以種種器爲相也。	初言「同相」者，染淨二法同以眞如爲體，眞如以此二法爲相，故云「同性相」。 「種種瓦器」，譬染淨法也。 「皆同塵性」者，器以塵爲性也。 塵以器爲相，故云「微塵性相」也。

80) 法藏『大乘起信論義記別記』「九約喻分別者，虛空有四義。一物所不能壞，二容受諸色法，三色滅淨空顯，四空能現色。鏡亦有四義。一實質不入中，二能現諸影像，三磨營(甲本作「瑩」)去塵垢，四照用諸物。法中義准之」(T44, 292c)。

81) 行間の加筆。前項を参照。

【例3.3.3】『起信論』「依諸凡夫，取著轉深，計我我所」(T32, 577b) に對する注釋

杏雨書屋本 (羽333V, 324-326)	法藏疏 (T44, 266b)
言「依諸凡夫」者，簡非聖人意識也。 「取著轉深」者，以無對治，故取著境界，轉復深也。 「計我我所」者，初時計境謂我，後則於身計我，於塵爲所也。	「依諸凡夫」者，簡非聖人意識也。…… 「取著轉深」者，以無對治，故追著妄境，轉極僞現，故云「深」也。 惑體中，非直心外計境爲僞，亦復於身計我，於塵計所，……此顯計我之相。

この三例は、いずれも曇延疏には杏雨書屋本に對應する注釋がないか、あるいは文言が一部異なるものであり（【例3.3.3】に對應する曇延疏は前節の【例2.2.3】に既出）、明らかに法藏疏は杏雨書屋本を參照していると考えてよい⁸²⁾。上述のように法藏疏は主として元曉疏に依りつつ、元曉疏に影響を與えた曇延疏をも參照しているが、それに加えてさらに曇延疏に決定的な影響を與えた杏雨書屋本をも直接に參照していたのだと考えられる⁸³⁾。

以上、慧遠疏・元曉疏との關係は不明であるものの、曇延疏だけでなく法藏疏にも影響を與えていることから考えて、杏雨書屋本は少なくとも法藏の時代までは中原に流通し、當時において一定の影響力を持った『起信論』注釋書の一つであったとすることができるであろう⁸⁴⁾。

82) 上注64も參照。

83) なお法藏疏の撰述年時に關しては今津洪嶽 [1918] (pp.43-47)、吉津宜英 [1991] (pp.133-144) を參照。

84) なお曇曠『大乘起信論廣釋』（大正2814）は主として法藏疏に依據しつつ、曇延疏および元曉疏をも參照していることが指摘されているが（吉津宜英 [1976] p.152を參照）、杏雨書屋本を參照した形跡は見出すことができない。『大乘起信論廣釋』の撰述經緯等については上山大峻 [1990] (pp.20-23; 37-39) を參照。

結語

本稿の考察結果をまとめると次のようになる。

- ① 杏雨書屋本と曇延疏とを比較対照すると、曇延疏が杏雨書屋本の注釋内容を要略した例、また曇延疏が杏雨書屋本にはない説明を附加した例を複数見出すことができる。したがって杏雨書屋本は曇延疏に先行する。
- ② 杏雨書屋本は眞諦譯『攝大乘論釋』を引用し、また曇延疏に先行する。したがって杏雨書屋本が撰述されたのは『攝大乘論釋』譯出(564年)以後、曇延の没年(588)以前である。
- ③ 杏雨書屋本の注釋内容には眞諦撰『九識章』や眞諦譯『攝大乘論釋』『佛性論』に基づく部分が複数存在し、また曇延疏との比較においてもより眞諦に近い。したがって杏雨書屋本は眞諦譯・撰の諸文獻に習熟した、眞諦の學系に近い人物によって撰述された可能性が高い。
- ④ 現存の寫本には著者自身によるものと思われる修訂の跡があり、また一方で編者の介在を疑わせる書寫の省略も存在する。さらにそれらの修訂のうち、一部のものは曇延疏に知られていた可能性があるが、他の幾つかのものは曇延疏には知られていなかったと考えられる。したがって、杏雨書屋本はおそらく著者(=師)と編者(=弟子)とが共同で形作る講義録のような性質の文獻であり、著者による修訂を反映しつつもそれぞれ編集の度合いの異なる複数の異本が存在していたのではないかと考えられる。
- ⑤ 慧遠疏・元曉疏と杏雨書屋本との関係は不明だが、法藏疏は

杏雨書屋本を参照している。したがって杏雨書屋本は少なくとも法藏の時代までは中原に流通していたと考えられる。

以上の考察に大過がなければ、杏雨書屋本は曇延疏に先行する現存最古の『起信論』注釋書であり⁸⁵⁾、眞諦の學系において『起信論』の注釋が撰述されていた可能性を示唆する、きわめて貴重な資料であると言える。

またさらに曇延疏との関連で特に注目されるのは、従来、曇延疏の最も顕著な思想的特色とみなされ、『起信論』の成立問題や北朝における眞諦譯諸經論の受容過程などの問題とからめて様々に考察されてきた眞諦譯『攝大乘論釋』の依用が⁸⁶⁾、実際には杏雨書屋本に由来するものであったという事実である⁸⁷⁾。『起信論』と『攝大乘論釋』の講究を中心とする隋唐初佛教の淵源を探る上でも、杏雨書屋本の資料的價値はきわめて高いと言えることができよう。

85) ただしこれはあくまでも現在確認されている文献の範囲内での「現存最古」ということであって、杏雨書屋本が史上最初の『起信論』注釋書であると主張することは、おそらくできないだろうと思われる。上注65・78を参照。

86) 望月信亨 [1922]、柏木弘雄 [1981]、高崎直道 [1997]、荒牧典俊 [2000]、吉津宜英 [2001] を参照。

87) なお『大乘起信論義疏』以外に曇延の撰述と考えられる文献として敦煌寫本Φ180が現存するが、そこにおいても眞諦譯・撰の諸文献が活用されている。拙稿 [2010] [2012] を参照。

参考文献

- 荒牧典俊 [2000] 「北朝後半期佛教思想史序説」(同〔編著〕『北朝隋唐中國佛教思想史』法藏館)
- 池田將則 [2009・10] 「敦煌本『攝大乘論抄』の原本(守屋コレクション本)と後續部分(スタイン2554)とについて——翻刻と研究——(前篇・後篇)」(龍谷大學佛教史研究會『佛教史研究』第45・46號)
- 池田將則 [2010] 「敦煌出土 北朝後半期『教理集成文獻』(俄Φ180)について——撰述者は曇延か——」(金剛大學校佛教文化研究所〔編〕『地論思想の形成と変容』國書刊行會)
- 池田將則 [2012] 「教理集成文獻(F-180) 解題・録文」(青木隆・方廣鋸・池田將則・石井公成・山口弘江『藏外地論宗文獻集成』圖書出版CIR, ソウル)
- 今津洪嶽 [1918] 「大乘起信論解題」(『佛教大系 大乘起信論 華嚴金師子章 華嚴法界義鏡』佛教大系刊行會)
- 上山大峻 [1990] 『敦煌佛教の研究 八一十世紀敦煌の佛教學』(法藏館)
- 宇井伯壽 [1930] 「眞諦三藏傳の研究」(同『印度哲學研究』第六, 甲子社書房。再版, 岩波書店, 1965年)
- 宇井伯壽・高崎直道(譯注) [1994] 『大乘起信論』(岩波文庫)
- 大竹晉 [2003] 「『大乘起信論』の唯識説と『入楞伽經』」(筑波大學哲學・思想學會『哲學・思想論叢』第21號)
- 大竹晉 [2012] 「眞諦『九識章』をめぐる」(船山徹〔編〕『眞諦三藏研究論集』京都大學人文科學研究所)
- 柏木弘雄 [1981] 『大乘起信論の研究——大乘起信論の成立に関する資料論的研究——』(春秋社)

- 杏雨書屋(編) [2009-] 『敦煌秘笈』(公益財團法人 武田科學振興財團)
- 神秘主義研究班 [2001] 「『大乘起信論義記』研究(三)」(『關西大學 東西學術研究所紀要』第34輯)
- 高崎直道 [1981] 「眞諦三藏の思想」(勝又俊教博士古稀記念論文集刊行會〔編〕『大乘佛教から密教へ』春秋社。高崎直道『大乘起信論・楞伽經』高崎直道著作集第8卷, 春秋社, 2009年)
- 高崎直道 [1986] 「『大乘起信論』における〈念〉について」(『東方學』第73輯。高崎直道『大乘起信論・楞伽經』高崎直道著作集第8卷, 春秋社, 2009年)
- 高崎直道 [1987] 『寶性論』(インド古典叢書, 講談社)
- 高崎直道 [1997] 「『大乘起信』の意味と論體——『起信論・曇延疏』解讀(一)」(早稻田大學東洋哲學會『東洋の思想と宗教』第14號。高崎直道『大乘起信論・楞伽經』高崎直道著作集第8卷, 春秋社, 2009年)
- 竹村牧男 [1985] 『大乘起信論讀釋』(山喜房佛書林。改訂版, 1993年)
- 竹村牧男 [1990] 「地論宗と『大乘起信論』」(平川彰〔編〕『如來藏と大乘起信論』春秋社)
- 丹治昭義 [2004] 「曇延撰『大乘起信論義疏』の基本的思想體系」(井上克人〔研究代表者〕『『大乘起信論』と法藏教學の實證的研究』科學研究費補助金研究成果報告書)
- 長尾雅人 [1982・87] 『攝大乘論 和譯と注解』上・下(インド古典叢書, 講談社)
- 藤枝晃 [1985] 「『德化李氏凡將閣珍藏』印について」(京都國立博物館『學叢』第7號)
- 船山徹 [2012] 「眞諦の活動と著作の基本的特徴」(同〔編〕『眞諦三藏

研究論集』京都大學人文科學研究所)

望月信亨 [1922] 『大乘起信論之研究』(金尾文淵堂)

吉津宜英 [1972] 「慧遠の『起信論疏』をめぐる諸問題(上)」(『駒澤大學佛教學部論集』第3號)

吉津宜英 [1973] 「淨影寺慧遠の『起信論疏』について——曇延疏との比較の視点から——」(『印度學佛教學研究』第21卷第1號)

吉津宜英 [1976] 「慧遠『大乘起信論義疏』の研究」(『駒澤大學佛教學部紀要』第34號)

吉津宜英 [1991] 『華嚴一乘思想の研究』(大東出版社)

吉津宜英 [2001] 「吉藏の大乘起信論引用について」(『印度學佛教學研究』第50卷第1號)

吉津宜英 [2003] 「眞諦三藏譯出經律論研究誌」(『駒澤大學佛教學部研究紀要』第61號)

榮新江・余欣 [2005] 「敦煌寫本眞偽辨別示例——法成の講じた『瑜伽師地論』の學生による筆記を中心として——」(石塚晴通教授退職記念會〔編〕『日本學・敦煌學・漢文訓讀の新展開』汲古書院)

王重民(編) [1962] 『敦煌遺書總目索引』(商務印書館, 北京)

張娜麗 [2006] 「羽田亨博士收集『西域出土文獻寫眞』について」(『お茶の水史學』第50號)

附 杏雨書屋所藏『大乘起信論疏』
(擬題, 羽333V) 翻刻

凡例

- 一, 杏雨書屋(編) [2009-] 影片冊 5所收の寫眞版を底本とする。
- 二, 原文の科段に沿って分節し, [] 内に科段番號と見出しを附す。
見出しは原則として科段の文言をそのまま使用し, ゴシック體で示す。
- 三, 對照の便のため, 各分節の冒頭の見出しの後に『大乘起信論』(T32) および曇延『大乘起信論義疏』(Z1, 71, 3) の對應箇所 の頁數・段を挿入し, 「(論123a; 疏123a)」のように示す。
- 四, 底本の行數を各行の行頭に挿入し, [] で括ったアラビア數字で示す。
- 五, 料紙の破れめは「……」で表し, 字數を推定した場合は「*」で示す。
- 六, 判讀不能もしくは未詳の文字は□で表す。
- 七, 一部缺損のある文字を殘畫から推定した場合は注記する。ただし文字のごく一部が缺けているだけで特に問題なく判讀できる場合は一々注記しない。
- 八, 原文の異體字や俗字・略字等は基本的に現今通行の正字に改める。
- 九, 以下の假借字は適宜改める。
胃→謂, 惠→慧, 象→像, 辟→譬, 弁→辨, 忘→妄, 耶→邪, 或→惑

十、底本には文字・文章の修訂の跡が多数みられるが、翻刻はすべて訂正後の文を採用し、修訂の有無を一々注記しない。ただし底本の行間に書き加えられた文字のうち、特に長文に渡るものや内容上特に注意すべきと考えられるものについては〈 〉で括弧して區別する。

十一、翻刻者の理解によって句讀を施す。句の區切りを示す場合は「、」を用い、並列關係を示す場合は「、」を用いる。

十二、書名は『 』で括り、注釋對象である『大乘起信論』の文は「 」で括る。そのほか文章理解に資するため適宜「 」を用いる。

十三、脚注に引く『攝大乘論釋』は眞諦譯(大正1595)を指す。

科段

1 釋心眞如門

1.1 明離言說相 (缺)

1.2 明依言說相

1.2.1 辨空 (前缺)

1.2.2 辨不空

1.2.2.1 舉章門, 牒前起後

1.2.2.1.1 舉章門

1.2.2.1.2 牒前起後

1.2.2.2 正解不空之義

1.2.2.3 明此眞如遠離外相, 唯是內證相應

2 釋心生滅門

2.1 約就覺不覺義, 以釋心生滅門

2.1.1 牒章略釋

2.1.1.1 牒

2.1.1.2 釋

2.1.2 舉數立章，問答廣釋

2.1.2.1 初牒以舉數，以辨其能

2.1.2.2 問答列名立章

2.1.2.3 依章別解

2.1.2.3.1 釋覺義

2.1.2.3.1.1 明覺體清淨，離相平等

2.1.2.3.1.1.1 舉章立宗略釋

2.1.2.3.1.1.1.1 舉章出體

2.1.2.3.1.1.1.1.1 牒章

2.1.2.3.1.1.1.1.2 出體

2.1.2.3.1.1.1.2 明此覺體離相平等

2.1.2.3.1.1.1.3 攝體屬□是能證者體

2.1.2.3.1.1.2 問答廣論

2.1.2.3.1.1.2.1 問

2.1.2.3.1.1.2.2 答

2.1.2.3.1.1.2.2.1 對始覺，以明本覺

2.1.2.3.1.1.2.2.2 寄對本覺，以明始覺

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1 對本覺，略明始覺

2.1.2.3.1.1.2.2.2.2 約始終二覺，廣明覺義

2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1 辨始終二覺差別之相

2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.1 就利鈍淺深，明究竟非究竟義

2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2 □就位約人，廣明究竟非究竟義

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.1 問

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2 答

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1 就凡夫覺知滅相, 未
可名覺

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.1 能觀人

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.2 所觀境

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.3 觀成離障

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.4 明覺分齊

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.2 明二乘始行菩薩覺
知異相, 名相似覺

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.2.1 能觀人

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.2.2 所觀境

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.2.3 觀成離障

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.2.4 明覺分齊

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3 明初地已去法身菩薩
覺知住相, 名隨分覺

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.1 能觀人

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.2 所觀境

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.3 觀成離障

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.4 明覺分齊

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.4 明十地已去菩薩覺
知生相, 名究竟覺

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.4.1 能觀人

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.4.2 所觀境

2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.4.3 觀成離障

- 2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.4.4 明覺分齊
- 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.2 引經證成
- 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.3 重明究竟覺義
 - 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.3.1 偏就生相一種，以明覺義
 - 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.3.1.1 舉勝□劣，明聖人有覺
 - 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.3.1.2 舉劣顯勝，明凡夫無覺
 - 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.3.2 通就四相，以明覺義
 - 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.3.2.1 明四相是無，以成無念
 - 2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.3.2.2 明泯相顯實
- 2.1.2.3.1.2 約相顯實，以明本覺
 - 2.1.2.3.1.2.1 以體從緣，生二種相，總舉其數
 - 2.1.2.3.1.2.2 假徵數下別名，列二章門
 - 2.1.2.3.1.2.3 依章解釋
 - 2.1.2.3.1.2.3.1 解智淨
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.1 牒章
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2 解釋
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.1 略解立宗
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.1 明智藉因成
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.2 明智成得果
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.2.1 明斷德果
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.2.2 明智德果
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2 問答廣辨
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.1 問
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2 答
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.1 法

- 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.1.1 明妄不孤立, 依真故有
- 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.1.2 明真妄義別, 滅不滅異
- 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2 喻
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.1 大海波浪, 因風故動
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.2 明風止動滅, 水性不滅
- 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.3 合
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.3.1 合上大海波浪喻
 - 2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.3.2 合上風水不同喻
- 2.1.2.3.1.2.3.2 釋不思議業相
 - 2.1.2.3.1.2.3.2.1 牒章
 - 2.1.2.3.1.2.3.2.2 辨釋
 - 2.1.2.3.1.2.3.2.2.1 依體起用, 略明業相
 - 2.1.2.3.1.2.3.2.2.2 明業相差別不同
- 2.1.2.3.1.3 約義顯實, 以明本覺體
 - 2.1.2.3.1.3.1 約體辨義, 總舉大數, 嘆以顯勝
 - 2.1.2.3.1.3.2 假徵別名
 - 2.1.2.3.1.3.3 列名解釋
 - 2.1.2.3.1.3.3.1 如實空鏡
 - 2.1.2.3.1.3.3.1.1 牒數
 - 2.1.2.3.1.3.3.1.2 列名
 - 2.1.2.3.1.3.3.1.3 顯喻
 - 2.1.2.3.1.3.3.1.4 釋義
 - 2.1.2.3.1.3.3.2 因熏習鏡
 - 2.1.2.3.1.3.3.2.1 牒數
 - 2.1.2.3.1.3.3.2.2 列名

- 2.1.2.3.1.3.3.2.3 顯喻
- 2.1.2.3.1.3.3.2.4 釋義
 - 2.1.2.3.1.3.3.2.4.1 明鏡能現像
 - 2.1.2.3.1.3.3.2.4.2 明鏡體離垢
- 2.1.2.3.1.3.3.3 法出離鏡
 - 2.1.2.3.1.3.3.3.1 牒數
 - 2.1.2.3.1.3.3.3.2 列名
 - 2.1.2.3.1.3.3.3.3 顯喻
 - 2.1.2.3.1.3.3.3.4 釋義
- 2.1.2.3.1.3.3.4 緣熏習鏡
 - 2.1.2.3.1.3.3.4.1 牒數
 - 2.1.2.3.1.3.3.4.2 列名
 - 2.1.2.3.1.3.3.4.3 顯喻
 - 2.1.2.3.1.3.3.4.4 釋義
- 2.1.2.3.2 明不覺
 - 2.1.2.3.2.1 牒章門
 - 2.1.2.3.2.2 解釋
 - 2.1.2.3.2.2.1 明不覺體
 - 2.1.2.3.2.2.1.1 明不覺有所由
 - 2.1.2.3.2.2.1.1.1 法
 - 2.1.2.3.2.2.1.1.2 喻
 - 2.1.2.3.2.2.1.1.3 合
 - 2.1.2.3.2.2.1.2 明依不覺，悟入眞覺
 - 2.1.2.3.2.2.2 明不覺相
 - 2.1.2.3.2.2.2.1 明不覺能生三相，總舉其數，相應不離

- 2.1.2.3.2.2.2.2 假徵列名辨釋
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.1 釋初相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.1.1 明覺心不動, 起成業相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.1.1.1 順解
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.1.1.2 返釋
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.1.2 明依業得果
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.2 能見相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.2.1 順解
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.2.2 返釋
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3 明第三境界相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.1 略明境界相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.1.1 順解
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.1.2 返釋
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2 明依此境界, 能生六相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.1 約境界, 總舉其數
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2 列名別解
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.1 智相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.2 相續相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.3 執取相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.4 計名字相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.5 起業相
 - 2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.6 業繫苦相
 - 2.1.2.3.2.2.2.3 總結無明不覺能生染相
- 2.1.2.4 合明二義, 成二種相
 - 2.1.2.4.1 牒前二義, 約之舉數

- 2.1.2.4.2 徵問列名立章
 - 2.1.2.4.3 依章別解
 - 2.1.2.4.3.1 解同相
 - 2.1.2.4.3.1.1 牒章
 - 2.1.2.4.3.1.2 辨釋
 - 2.1.2.4.3.1.2.1 立喻顯法
 - 2.1.2.4.3.1.2.2 舉法同喻
 - 2.1.2.4.3.1.2.3 引經證成
 - 2.1.2.4.3.1.2.4 解所引經義
 - 2.1.2.4.3.1.2.4.1 約實以解
 - 2.1.2.4.3.1.2.4.2 就緣以釋
 - 2.1.2.4.3.2 明別相
 - 2.1.2.4.3.2.1 立宗
 - 2.1.2.4.3.2.2 譬況
 - 2.1.2.4.3.2.3 合喻
- 2.2 約就心意識義，以解心生滅門
 - 2.2.1 舉心意識是生滅因緣，略以立宗
 - 2.2.2 次第解釋三義
 - 2.2.2.1 解意義
 - 2.2.2.1.1 問
 - 2.2.2.1.2 答
 - 2.2.2.1.2.1 略釋意義
 - 2.2.2.1.2.1.1 明意起所由
 - 2.2.2.1.2.1.2 辨意功能
 - 2.2.2.1.2.2 廣論意相

- 2.2.2.1.2.2.1 舉意大數
- 2.2.2.1.2.2.2 列名辨釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.1 業識
 - 2.2.2.1.2.2.2.1.1 列
 - 2.2.2.1.2.2.2.1.2 解釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.2 轉識
 - 2.2.2.1.2.2.2.2.1 列
 - 2.2.2.1.2.2.2.2.2 解釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.3 現識
 - 2.2.2.1.2.2.2.3.1 列
 - 2.2.2.1.2.2.2.3.2 解釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.4 智識
 - 2.2.2.1.2.2.2.4.1 列
 - 2.2.2.1.2.2.2.4.2 解釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.5 相續識
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.1 釋名義
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.1.1 列
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.1.2 解釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.1 明自相續, 即是略釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.2 令他相續, 即是廣釋
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.2.1 明業果相續
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.2.2 諸念相續
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.2 引經證成
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.3 釋所引經義
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.3.1 問

- 2.2.2.1.2.2.2.5.3.2 答
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.1 汎釋諸法皆從心生
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2 指事勸知
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2.1 法
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2.2 喻
 - 2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2.3 合
- 2.2.2.2 解其識義
 - 2.2.2.2.1 明識體
 - 2.2.2.2.1 明其識用
 - 2.2.2.2.1.1 明意識立名不同
 - 2.2.2.2.1.2 明依起所由
 - 2.2.2.3 解其心義
 - 2.2.2.3.1 明心位分齊，嘆識甚深
 - 2.2.2.3.1.1 明二乘凡夫未能覺了
 - 2.2.2.3.1.2 明菩薩與佛，方能證知
 - 2.2.2.3.1.3 問答釋凡夫不知菩薩及佛得了所由
 - 2.2.2.3.1.3.1 問
 - 2.2.2.3.1.3.2 答
 - 2.2.2.3.1.3.2.1 以三義答上問意
 - 2.2.2.3.1.3.2.1.1 以三義明凡小不知
 - 2.2.2.3.1.3.2.1.2 就佛以結唯佛能知
 - 2.2.2.3.1.3.2.2 重以釋成
 - 2.2.2.3.1.3.2.2.1 成上心性無變
 - 2.2.2.3.1.3.2.2.2 成上無□□
 - 2.2.2.3.2 正釋心義

- 2.2.2.3.2.1 舉染心, 約位明治斷分齊
 - 2.2.2.3.2.1.1 約染心, 總舉□數
 - 2.2.2.3.2.1.2 □問 * * * □
 - 2.2.2.3.2.1.2.1 執相應染
 - 2.2.2.3.2.1.2.2 不斷相應染
 - 2.2.2.3.2.1.2.3 分別智相應染
 - 2.2.2.3.2.1.2.4 現色不相應染
 - 2.2.2.3.2.1.2.5 能見心不相應染
 - 2.2.2.3.2.1.2.6 根本業不相應染
- 2.2.2.3.2.2 重舉無明, 約位明治斷得證分齊
- 2.2.2.3.2.3 辨染淨麁細即異之義
 - 2.2.2.3.2.3.1 釋相應
 - 2.2.2.3.2.3.2 釋不相應
- 2.2.2.4 明此染心及與無明功能差別
 - 2.2.2.4.1 辨染心及與無明所障不同, 立宗
 - 2.2.2.4.2 問答解釋 (後缺)
- 2.3 約麁細兩相, 以釋心生滅義 (缺)
- 2.4 就染淨眞妄體用熏習義, 以解心生滅門 (缺)

本文

[1 釋心眞如門] (論576a; 疏268b-269a)

[1.1 明離言說相 (缺)]⁸⁸⁾

[1.2 明依言說相] (論576ab; 疏269a-c)

[1.2.1 辨空 (前缺)]

…… (前缺) [1] * * * * * □及□ * * * * *
 * * * [2] * * * * * 有⁸⁹⁾無以明離相，二就一異以明，□⁹⁰⁾三□⁹¹⁾ * * *
 * * * □□□□ * * [3] * 無者，凡一切諸見皆假妄念而生，□以眞⁹²⁾□
 □⁹³⁾於妄念故，所以無此有無等相⁹⁴⁾，* * [4] * 妄⁹⁵⁾念亦計有無等四句
 若也⁹⁶⁾。眞如亦有有無等四，此眞如有無不同，□□ * * [5] * □□，非
 謂如體不是有無也。

今妄念有無等，凡有四計。

一者，計「一切心□ * * [6] □有自體，不從因緣合和⁹⁷⁾而生」。此即
 無⁹⁸⁾中執有，□⁹⁹⁾增益謗¹⁰⁰⁾，故將非□對治¹⁰¹⁾ * * [7] * □¹⁰²⁾不同此有，

88) 「1.1 明離言說相」「1.2 明依言說相」の見出しは、曇延疏「釋心眞如內，復二。初明離言說相。『複次眞如依言說』下，第二門依言說相」(Z1.71.3, 268c頭注)を參考に附加した。

89) 有 殘畫から推定。

90) □ 「第」か。

91) □ 「有」か。

92) 眞 殘畫から推定。

93) □□ 「如離」か。

94) 相 殘畫から推定。

95) 妄 殘畫から推定。

96) 若也 「也。若」の誤寫か。

97) 合和 「和」は殘畫から推定。「和合」の誤寫か。

98) 無 この字の横に書き込みがあるように見えるが，判讀不能。

99) □ 「是」か。

故言「非有相」。

第二¹⁰³⁾計者, 「若眞如非有相者, 便應是無」, 即謂眞如□*^[8]*□無, 即計一切皆是空無。此* * *□¹⁰⁴⁾謗。爲治此¹⁰⁵⁾見, 故言非無。言非無者, 爲辨眞如之無, * * *^[9]* * *, 故言「非無相」。

第三計者, 言「我向計有無是眞如, 論者不許」。遂以非有非無* *^[10]*□, 故此非有非無應是眞如。〈此爲戲論謗。此人尋聲起計, 不知□二, 爲□彼見, 即攬二□* * *□□是而可存, 名爲戲論謗。如世□路之人, 雖有言戲, 而無一實, 名爲戲論也。〉雖言執此由不會有□^[11]*□¹⁰⁶⁾々々者, 眞如有者, 乃是諸德□相, 集滅善有, 不空名有。論其無者, * * *^[12]*諸德, 不守自性, 離相故無。〈不同□¹⁰⁷⁾自性有、斷滅無, 故說非有非無。〉^[13]此是中道空□* *^[14]*, 雖以非有非無爲治, 由¹⁰⁸⁾自未悟, 聞言非有, 即謂眞如是斷滅無, 聞言非無, 即謂□*^[15]□, 即計非有非無者, 應是眞如也。對治曰, 「我言眞如非有者, 非汝所謂自性□*^[16]*□□於無□謂是非有, 還復是其有, 乃是如性緣集有, 故言『非非有』。我言眞如非無者, 非¹⁰⁹⁾^[17]謂斷滅無, 不欲取其有, 非謂是非無, 還復是其無, 乃是如性離相無, 故言『非非無』」。

100) 增益謗 『攝大乘論釋』依慧學勝相品「言說有四種, 即是四謗。若說有, 即增益謗。若說無, 即損減謗。若說亦有亦無, 即相違謗。若說非有非無, 即戲論謗」(T31, 244a)。

101) 治 殘畫から推定。

102) □ 「如」か。

103) 第二 殘畫から推定。

104) *□ 「損減」か。

105) 此 殘畫から推定。

106) □ 「理」か。

107) □ 「俗」か。

108) 由 「猶」に通ず。

109) 非 殘畫から推定。

第 *_[18] * *¹¹⁰⁾ * * □非非有，似有有義，非非無也，似有無義。若然，此眞如應亦有亦無也。即攬□¹¹¹⁾ * * * * * □作相違，此人由¹¹²⁾ 自不悟中道有無，而執自性有、斷滅無二解相_[20] * * * * * □¹¹³⁾ 傍¹¹⁴⁾。對治曰，「我言眞如非是非有，非謂是於無。眞如非是無非¹¹⁵⁾，_[21] * * * * * □不定是於無，云何得有亦有亦無義也。故言『非有無_[22] * *¹¹⁶⁾』」。

* * * * * □皆可知。此中且約眞如大空一法，以明離相。若_[23] * * * * *

* * * * * □總結。內有二。初順釋以□。「若離」已下，反解成前。

□¹¹⁷⁾ □_[24] * * * * * □，故言「依一切衆生念念分別皆不相應，故說爲□¹¹⁸⁾」。

_[25] * * * * * □妄心之外，唯有眞如及眞如功德，不可謂空也。

[1.2.2 辨不空] (論576b; 疏269cd)

[1.2.2.1 舉章門，牒前起後]

[1.2.2.1.1 舉章門]

110) * * * 「四計者」などが想定できるか。

111) □ 「有」か。

112) 由 「猶」に通ず。

113) * □ 「相違」か。

114) 傍 「謗」の假借か。

115) 無非 「非無」の誤寫か。

116) * * 「俱相」などが想定できるか。

117) □ 「以」か。

118) □ 「空」か。

[1.2.2.1.2 牒前起後]

[1.2.2.2 解不空之義]

[1.2.2.3 明此眞如遠離外相, 唯是內證相應]

^[26]次辨不空, 就中有三。初舉章門, 牒前起後。第二「即是□^[27]□^[119]」, 正解不空之義。第三「亦無有相」已下, 明此眞如遠離外相, 唯是內證相應。

初中先舉^[28]章門, 次牒前起後。

「以顯自體空無妄」者, 以無妄想自性, 故即顯法體本來自空也。

^[29]下解釋中, 「即是眞心」者, 謂自性清淨心也。

「常恒不變」者, 於未來佛不染, 於過現佛不^[30]淨也。

「淨法滿足」者, 此眞如之外, 更無一法自體具有, 無所少也。

「故名不空」者, 以義定名。

^[31]「亦無有相可取」者, 示離有無相也。

「以離念境」者, 示一切妄心皆不相應。

「唯證相應故」者, 示^[32]證時離覺觀, 復無能所心也。

[2 釋心生滅門] (論576b; 疏269d-270a)

[2.1 約就覺不覺義, 以釋心生滅門]

[2.1.1 牒章略釋]

[2.1.1.1 牒]

[2.1.1.2 釋]

次^[120]釋心生滅門, 就中大文有四。一約就覺不覺義, 以釋^[33]心生滅門。第二「復次生滅因緣者」已下, 約就心意識義, 以解心生滅門。

119) □□ 「眞心」か。

120) 次 この字の上に朱の鉤印あり。

第三「復次生滅相者」已下，^[34]約麤細兩相，以釋心生滅義。第四「復次有四種熏習義」已下，就染淨真妄體用熏習^[35]義，以解心生滅門。亦可初明生滅體，第二明生滅因緣，第三明生滅相，第四可知。

前中復二。^[36]初牒章略釋。第二「此識有二種」已下，舉數立章，問答廣釋。

前中初牒次釋。

言「依如來藏^[37]故¹²¹⁾有生滅心」者，以依覺故而有不覺，依不覺故有生滅心也。

「所謂不生不滅與生滅和合」者，謂^[38]前如來藏與生滅心雖復不一，以無異體故而常和合，不相雜也。論其生滅，由於熏習。^[39]「不生滅」者，心性自爾，無有遷變故也。

「非一」者，生滅義與不生滅功能義別，不可一也。

「非異」者，義^[40]雖不同，而熏習無有別體可異識性也。如風依水。風以動爲義，水以濕爲義，動與濕^[41]義不可令一，窮其異體，無可相異。藏與生滅亦復如是。

「名爲阿梨耶識」者，以義證^[42]名也。依此無始客塵熏習本覺，此之本覺不守自性，隨他熏習，有緣起功能。^[43]即此和合生滅功能者，名爲和合識也。若依三藏法師『九識章』內，名無沒識。以^[44]能攝持無始善惡三性種子，爲因不亡，得果必然，無有失沒，名無沒也。

[2.1.2 舉數立章，問答廣釋] (論576b; 疏270a)

[2.1.2.1 初牒以舉數，以辨其能]

[2.1.2.2 問答列名立章]

^[45]自下第二廣釋其相。於中有四。初牒以舉數，以辨其能。第二「云

121) 藏故 殘畫から推定。

何」已下，問答列名立章。^[46]第三「所言覺義者」已下，依章別解。第四「復次覺與不覺有二種相」已下，合明二義，成二種相。

[2.1.2.3 依章別解] (論576b; 疏270ab)

[2.1.2.3.1 釋覺義]

[2.1.2.3.1.1 明覺體清淨，離相平等]

[2.1.2.3.1.1.1 舉章立宗略釋]

[2.1.2.3.1.1.1.1 舉章出體]

[2.1.2.3.1.1.1.1.1 牒章]

[2.1.2.3.1.1.1.1.2 出體]

[2.1.2.3.1.1.1.2 明此覺體離相平等]

[2.1.2.3.1.1.1.3 攝體屬□是能證者體]

第^[47]三別解中，先釋覺義，次明不覺。

〈今此宗意，明心生滅門。論「覺義」者乃真如門攝，何故□^[122]明者，爲辨生滅是其妄法，妄無自體，用真爲性，爲成妄體，故約真如本覺，以明生滅門也。〉

初中有三。初明覺體清淨，離相平等。第二「復次本^[48]覺隨染分別，生二種相」已下，約相顯實，以明本覺。第三「復次本覺有四種大義」已下，約^[49]義顯實，以明本覺體。

初段內有二。初舉章立宗略釋。第二「何以故」已下，問答廣論。

初^[50]內有三。初舉章出體。第二「離念相者」已下，明此覺體離相平等。第三「即是如來」已下，攝體屬□^[123]_[51]是能證者體。

初中先牒章，次出體。

122) □ 「今」か。

123) □ 「心」か。

「謂心體離念」者，示本覺體無念也。

下明第二。

言^[52]「離念相」者，顯此心體相貌也。

「等虛空界」者，與虛空界性同也。虛空界有兩義，一周遍^[53]義，二無差別義。本覺亦爾。以二義同，故取之爲喻。

「無所不遍」者，此即第一周遍也。^[54]示此本覺性，通爲一切衆生體。因此義故，說一切衆生悉有佛性。

「法界一相」者，即是^[55]第二無差別義。此無差別，若在三界具縛衆生相續中，名之爲如。

「即是如來平^[56]等法身」者，此如若在出三界外初地已上菩薩所證者，即名法身，更無別法。

「說名^[57]本覺」者，此法身若在聲聞緣覺菩薩相續中，名爲佛性。佛性者，即是本覺性也

^[58]□皆就位明眞如義差別。若談其體，即是無□于數也。

[2.1.2.3.1.1.2 問答廣論] (論576b; 疏270bc)

[2.1.2.3.1.1.2.1 問]

[2.1.2.3.1.1.2.2 答]

[2.1.2.3.1.1.2.2.1 對始覺，以明本覺]

自下第二問答廣辨覺義。^[59]就中先問次答。

問者言「何以此法身復名本覺故」。下答中有二。初對始覺，以明本覺。^[60]第二「始覺義者」已下，寄對本覺，以明始覺。良由本始二覺，對彼不覺，並是^[61]覺故，所以須相對以明¹²⁴⁾。

初言「本覺義」者，是始覺本也。

124) 良由本始…相對以明 この21字は墨の線で囲まれている。

「對始覺義說」者，由本覺是^[62]始覺本，始覺是本覺末故。故得相對，以受名也。以本對始，不可爲一，以何義故，同名覺^[63]也。舉論對曰「以始覺者即同本覺」者，本由不覺，故非異謂異。既得覺已，則無有異。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2 寄對本覺，以明始覺] (論576b; 疏270bc)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1 對本覺，略明始覺]

^[64]自下明始覺義。於中有二。初對本覺，略明始覺。第二「又覺心原故」已下，約始終二覺，廣明覺義。^[65]¹²⁵⁾

^[66]此中間者言「若以始覺同本覺者，義則可爾。未審云何有此始^[67]覺與本覺同也」。舉論對曰「始覺義者」乃至「說有始覺」，此言示現。

此中「依本覺^[68]故而有不覺」者，釋有始覺之所由。此義云何。□不以唯有本覺故而有不覺，由□^[69]本覺不能了達，故名不覺。是故說言「依本覺故，說有不覺」。

「依不覺故說有始覺」者，以^[70]依不覺而生妄心，以此妄心能知名義。遇善知識，爲說本覺，方始覺知。始覺之義¹²⁶⁾，^[71]因此始有也。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2 約始終二覺，廣明覺義] (論576b; 疏270c)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1 辨始終二覺差別之相]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.1 就利鈍淺深，明究竟非究竟義]

自下約就始終二覺，廣明覺義也。始者，自覺方便也。終者，修自覺^[72]究竟成就義也。

就中有三。〈初辨始終二覺差別之相。第二「是故修多羅」已下，引

125) [65] この行，訂正して抹消されている。

126) 義 殘畫から推定。

經證成。第三「又心起者無有初□¹²⁷⁾」已下，重明究竟覺義。〉

〈前中有二。〉初就利鈍淺深，明究竟非究竟義。第二「此義云何」已下，□_[73]就位約人，廣明究竟非究竟義。

今言「又」者，前對本覺，以明覺相。今直就始覺_[74]之中，四相淺深，以明覺義，故稱「又」也。

言「心元」者，覺心初起¹²⁸⁾之根元也。

「名究竟覺」者¹²⁹⁾，_[75]覺功成就，同於本覺也。

「不覺心元故」者，謂觀住異滅三相也。

「非究竟」者，以未同¹³⁰⁾_[76]本覺，故修自覺加行，未足自心也。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2 □就位約人，廣明究竟非究竟義] (論576b; 疏270cd)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.1 問]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2 答]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1 就凡夫覺知滅相，未可名覺]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.1 能觀人]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.2 所觀境]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.3 觀成離障]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.1.4 明覺分齊]

次明第二問答廣論者，先問次答。

「此義云□¹³¹⁾」_[77]者，此非究竟及究竟二義，異相云何也。

下答。答中有四。初就凡夫，覺知滅相，未可名¹³²⁾_[78]覺。第二明二

127) □ 「相」か。

128) 覺心初起 下文「『覺心初起』，惡心初起時，即覺知也」(羽333V, 93-94)。

129) 者 殘畫から推定。

130) 同 殘畫から推定。

131) □ 「何」か。

乘始行菩薩, 覺知異相, 名相似覺。第三明初地已去法身菩薩, 覺知住相, 名隨分¹³³⁾覺。第四明十地已去菩薩, 覺知生相, 名究竟覺。

此四位中, 分文各四。一能觀人, 二所觀^[80]境, 三觀成離障, 四明覺分齊。

初內云「雖復名覺」者, 能覺後念不令起惡也。

「即^[81]是不覺」者, 前念正起惡時, 爾時不自覺知惡也。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.2 明二乘始行菩薩覺知異相, 名相似覺]

(論576b; 疏270d)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.2.1 能觀人]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.2.2 所觀境]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.2.3 觀成離障]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.2.4 明覺分齊]

就第二中, 言「覺於念異」者, 於^[82]現起惡念, 初生及住, 不覺其患。至於異時, 方始覺也。

「念無異相」者, 研尋□¹³⁴⁾^[83]體, 妄不見其異。既無異體, 異相亦無也。

「以捨僂分別執著相故」者, 捨分別性中, 執^[84]著我塵法塵相也。

「名相似覺」者, 念至於異, 爲業事成, 雖覺念異, 將何所□¹³⁵⁾, ^[85]故名相似。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.3 明初地已去法身菩薩覺知住相, 名隨分覺]

132) 名 殘畫から推定。

133) 分 殘畫から推定。

134) □ 「異」か。

135) □ 「爲」か。

(論576b; 疏271a)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.1 能觀人]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.2 所觀境]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.3 觀成離障]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.3.4 明覺分齊]

次辨第三。於中有四。一就觀人。第二「覺於念住」者，明所觀境。第三「以離分^[86]別」已下，明觀成離障。第四「名隨分」下，明覺分齊。上下唯此取之。

言「法身菩薩」者，初^[87]地已去菩薩，證得法身遍滿義，乃至九地，悉同證得，俱名法身菩薩也。

「覺於念住」者，現^[88]在惡念初起之時，未覺其患，乃於住時，方乃覺也。

「住無住相」者，驗此住相，似^[89]住顯現，無別住性主此相也。以無住體主此相故，故使此住無住相也。又此住相無有自性。若^[136]^[90]使住相有自性者，住應常住。然死生變爲住，異遷於住，明住無性也。餘□^[137]^[91]亦爾。

「以離分別麤念相」者，遠離六七識麤分念也。

「名隨分覺」者，未能令^[138]覺，至於^[92]住分，方乃覺也。既覺知已，爲業不成，解住無住，即同本覺。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.4 明十地已去菩薩覺知生相，名究竟覺]

(論576b; 疏271ab)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.1.2.2.4.1 能觀人]

136) 若 殘畫から推定。

137) □ 「三」か。

138) 令 「全」の誤寫か。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.4.2 所觀境]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.4.3 觀成離障]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.1.2.2.4.4 明覺分齊]

次第四中,「菩薩盡地」者,^[93]謂第十地也。

「一念相應」者,謂金剛心由^[139]與惑俱,名相應也。

「覺心初起」,惡心初起時,即^[94]覺知也。亦可是彼客塵無明,初與真合,令心妄動,此是「初」也。

「初^[140]無初相」,窮其初體,唯^[95]是無念。念尚非有,焉有初也。

言「微細念」者,謂阿梨耶識,以無始來諸念熏習,由^[141]^[96]自未盡。以未盡故,令阿梨耶識有微細生滅。阿梨耶識至於此時方盡,微細念^[97]相自此消滅也。

「得見心性」者,得見本覺清淨心性也。

「心即常住」者,本依妄想熏習,無^[98]常不住,如水依風而有動相。妄想氣盡,心則常住,如風止水靜也。

「名究竟覺」者,^[99]修習自覺,功成至此,於後更無能所覺異也。

此以始終二覺,顯本覺義竟。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.2.2 引經證成] (論576b; 疏271b)

次明第二^[100]引經證成。

言「是故」者,由上廣曉二門,明此四相無可得義故,是以經中作如是言。

「若有衆生能^[101]觀無念」者,觀前後諸念無自相也。

「則爲向佛智」者,諸佛智慧,思想念盡,無復分別。^[102]若知無念,順

139) 由「猶」に通ず。

140) 初 あるいは「心」の誤寫か。

141) 由「猶」に通ず。

佛智也。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.3 重明究竟覺義] (論576bc; 疏271bc)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.3.1 偏就生相一種, 以明覺義]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.3.1.1 舉勝口劣, 明聖人有覺]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.3.1.2 舉劣顯勝, 明凡夫無覺]

次明第三重明究竟覺義。於中有二。初偏就生相一種, 以明覺^[103]義。第二「若得無念者」已下, 通就四相, 以明覺義。

前中有二。初舉勝口劣, 明聖人有覺。^[104]第二「是故」已下, 舉劣顯勝, 明凡夫無覺。

言「又心起」者, 重釋「初相」。

「無有初相」者, 初^[105]若更有初此初者, 此初不名初也。既此初者, 得名爲初, 則以無初爲本。以無初爲^[106]本, 故初無自相也。

「而言知初相」者, 審前知初之所由也。

「即謂無念」者, 無念即是^[107]初之始也。

「是故一切衆生不名爲覺」者, 良以衆生無明迷, 故不達其初, 及以餘相義故。是以^[108]有念衆生不得名究竟覺也。

「以從本已來, 念念相續, 未離念故」者, 以未遇^[109]善知識, 爲說眞覺, 恒隨惡覺, 流轉不住, 莫之知返也。

「故說無始無明」者, 此有^[110]二義。一示無明無有始也。二一切染法無有始於無明者也。

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.3.2 通就四相, 以明覺義] (論576c; 疏271c)

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.3.2.1 明四相是無, 以成無念]

[2.1.2.3.1.1.2.2.2.3.2.2 明泯相顯實]

次具就四相，明究竟覺。^[111]就中有兩。初明四相是無，以成無念。第二「以四相俱時而有」已下，泯¹⁴²⁾相^[112]顯實，明一本覺。

言「若得無念」者，示無念有始，故言「得」也。此「得無念」者，知無自相，^[113]名爲無念。非謂離念之法名爲無念也。

「則知心相生住異滅」者，以此四相似^[114]有顯現，各無自性。

「以無念等故」者，此等四相雖無自性等，以離念本覺爲^[115]通體也。

「而實無有始覺之異」者，既達本覺通爲諸念體，豈有始覺異^[116]本覺也。

下明泯¹⁴³⁾相顯實。

「以四相¹⁴⁴⁾俱時而有」，若據本望之，四相則俱時而有。此云^[117]何知。若其生時無住，生則頓生，無漸生義，以無礙故。又若生時無異，生^[118]恒如本，亦無生義。又若生時無滅，則初生芽¹⁴⁵⁾相，至於菓熟，猶應如本。^[119]既無此義，當知四相俱時而有。若隨妄心所取，則見有先後之異。由此^[120]妄心以不覺爲體，故使不能如實知義也。譬如夢裏心念，若據根本^[121]夢心望之，夢中所有諸事，俱時而現。若隨夢裏六識望之，則見有先後之異。由^[122]此相似，舉之顯示也。

「皆無自立」者，此四相各無自性，虛然□立也。

「本來平^[123]等同一覺」者，雖復流轉，與染爲體，終竟不能離本覺也。

此第一覺體自性^[124]清淨義竟。

[2.1.2.3.1.2 約相顯實，以明本覺] (論576c; 疏271cd)

142) 泯 原文は「珉」に作るが，假借とみなして改める。

143) 泯 原文は「珉」に作るが，假借とみなして改める。

144) 相 注釋對象の『大乘起信論』により補う。

145) 芽 原文は「牙」に作るが，假借とみなして改める。

[2.1.2.3.1.2.1 以體從緣，生二種相，總舉其數]

[2.1.2.3.1.2.2 假徵數下別名，列二章門]

次¹⁴⁶⁾釋第二約相顯實，以明覺義。亦可隨染分別，明其覺相。

[125]就中有三。初以體從緣，生二種相，總舉其數。第二「云何」下，假徵數下別名，[126]列二章門。第三「智淨」已下，依章解釋。

今言「隨染分別」者，道理此二是淨，今□_[127]對異緣，是作用不定，不攝法異，名之爲染，非是染淨之染也。

[2.1.2.3.1.2.3 依章解釋] (論576c; 疏271d-272a)

[2.1.2.3.1.2.3.1 解智淨]

[2.1.2.3.1.2.3.1.1 牒章]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2 解釋]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.1 略解立宗]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.1 明智藉因成]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.2 明智成得果]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.2.1 明斷德果]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.1.2.2 明智德果]

別解內，_[128]先解「智淨」，次釋「不思議業相」。

初中有二。初牒章，次解釋。

釋中有二。初略解立宗。第二「此義云何」下，問答廣_[129]辨。

前中有二。初明智藉因成。第二「破和合」已下，明智成得果。

初言「謂依法_[130]力熏習」者，依聞熏習力也。

「如實修行」者，若此聞熏習，在信位時，雖有熏_[131]習，由¹⁴⁷⁾未有力。

146) 次 この字の上に朱の鉤印あり。

147) 由 「猶」に通ず。

乃至解位，方始有力，得如實解。以有解故，至十行位，能如實_[132]修行也。

「満足方便」者，謂十迴向，修方便行滿也。

下明得果。得果內有二。初明斷_[133]德果。次「顯現」已下，明智德果¹⁴⁸⁾。

「破和合識相」者，初地是轉依之始，阿梨耶識_[134]自此始壞也。

「滅相續心相」者，此阿梨耶識，與不淨品和合，成六七識及諸道_[135]種子，能令三有相續。和合既壞，種子不成。種子不成，故相續心滅也。

「顯現_[136]法身」者，壞和合相，不信、我執、怖畏、自愛四人習氣，從此始滅。法身四德¹⁴⁹⁾，_[137]自此漸顯¹⁵⁰⁾，乃至佛地，顯之究竟也。

「智純淨故」者，爲明能治之□。若在地前，所有智慧，以未_[138]證眞如，故由¹⁵¹⁾有¹⁵²⁾無明垢障。今至初地已上，相續心滅，證淨法身，無明垢盡，_[139]智德純淨也。

148) 初明斷德…明智德果 『攝大乘論釋』學果寂滅勝相品「一切相不顯現，即是斷德。以一切相滅，故清淨眞如顯現，即是智德。如理如量智圓滿，故謂具一切智及一切種智，至得一切相自在，即是恩德」(T31, 248a)。

149) 法身四德 『攝大乘論釋』依止勝相品「常樂我淨是法身四德」(T31, 174a)。

150) 不信我執…自此漸顯 『攝大乘論釋』依心學勝相品「……此定緣眞如實有易得，有無量功德，故能破一闡提習氣，即是方便生死，障於大淨。由破此障，故得大淨果。……由自在故，能行施等十度，圓滿菩提資糧福德行，故能破外道我見習氣，即是因緣生死，障於大我。由破此障，故得大我果。……由此二義，是故菩薩能離聲聞怖畏習氣，即是有有生死，障於大樂。由破此障，故得大樂果。……此定多行他利益事，能破獨覺自愛習氣，即是無有生死，障於大常。由破此障，故得大常果」(T31, 234c-235a)。

151) 由「猶」に通ず。

152) 有 原文は「爲」に作るが，誤寫とみなして改める。

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2 問答廣辨] (論576c; 疏272ab)

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.1 問]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2 答]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.1 法]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.1.1 明妄不孤立，依真故有]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.1.2 明真妄義別，滅不滅異]

次明第二廣論者，就中有二。初問次答。

問言「此法身顯現，智純^[140]淨云何」也。答內有三。初法，次喻，後合。

前中有二。初明妄不孤立，依真故有。第二^[141]「非可壞」已下，明真妄義別，滅不滅異。

「以一切心識之相皆是無明」者，以依不覺^[142]故而有無明。以有無明爲染法因，故生於妄心。是以一切心識之性皆是^[143]無明也。是中「心」者，第七心也。「識」者六識也。

「無明之相不離覺性」者，以無明熏真如，^[144]生於心識。心識生滅之相是無明功能，心識覺照之體以本覺爲性，故^[145]不離覺性也。

「非可壞」者，心識之性即是本覺，故不可壞也。

「非不可壞」者，心^[146]識之相唯是無明。是無明者，治道起時，即自壞滅也。

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.2 喻] (論576c; 疏272b)

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.2.1 大海波浪，因風故動]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.2.2 明風止動滅，水性不滅]

次明第二喻說。於中^[147]還二。初大海波浪，因風故動，喻上第一「真妄相依」。第二「而水非動性」已下，^[148]明風止動滅，水性不滅，

喻上第二「滅不滅」義。

「如大海水」者，取海廣大及清淨¹⁵³⁾_[149]爲喻也。

「因風波動」者，示此水性非以自力生波，因風方能起波。復示風性不_[150]能自顯動相，依水方能現也。

「水相風相不相離」者，水以波爲相，風以動爲相。動_[151]之與波，未曾相離也。

「而水非動性」者，水但與波爲體，故非動性。風自與動爲¹⁵⁴⁾_[152]性，亦非波體也。

「若風止滅，動相則滅」者，驗風唯與動爲性。

「濕性不壞」者，復_[153]顯不與波爲性也。若與波爲性者，若風止時，水性應滅。而水不壞，故不與水_[154]爲性也。

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.3 合] (論576c; 疏272bc)

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.3.1 合上大海波浪喻]

[2.1.2.3.1.2.3.1.2.2.2.3.2 合上風水不同喻]

次第三合喻。就中還二。初合上「大海波浪喻」。第二「而心非動性」已下，合上「風_[155]水不同喻」。

「如是衆生」者，明此本覺廣大，衆生皆有，如海大義也。

「自性清淨心」者¹⁵⁵⁾_[156]，示此本覺在具縛衆生中，照性不改，如海水清淨也。

「因無明風動」者，示此心性非_[157]自流轉，因無明染法而熏習，故諸識浪生，如水依風也。此無明染法，復不能_[158]自爲生滅，依於本覺而有生滅，如風依水也。

153) 淨 殘畫から推定。

154) 爲 殘畫から推定。

155) 者 殘畫から推定。

「心與無明俱無形相」者，^[159]生滅與心識，各無形相，如動與波也。

「不相捨離」者，本覺以心識爲相，無明以生滅爲相，^[160]生滅與心識，未曾相離。如波相動相不相離也。

「而心非動性」者，示自性清淨心^[161]不與生滅爲性，如水不與動爲性也。

「若無明滅，相續則滅」者，驗此無明^[162]爲生滅體也。如風止動滅也。

「智性不壞」者，復示無明不與心識爲性。由此心識不^[163]以無明爲性，故生滅自盡，智性常存。如動相自滅，濕性不壞。

[2.1.2.3.1.2.3.2 釋不思議業相] (論576c; 疏272cd)

[2.1.2.3.1.2.3.2.1 牒章]

[2.1.2.3.1.2.3.2.2 辨釋]

[2.1.2.3.1.2.3.2.2.1 依體起用，略明業相]

[2.1.2.3.1.2.3.2.2.2 明業相差別不同]

次明不思議業^[164]相。於中有二。初牒章。第二辨釋。

釋中有二。初依體起用，略明業相。第二「所謂」已下，^[165]明業相差別不同¹⁵⁶⁾。

[2.1.2.3.1.3 約義顯實，以明本覺體] (論576c; 疏272d)

[2.1.2.3.1.3.1 約體辨義，總舉大數，嘆以顯勝]

[2.1.2.3.1.3.2 假徵別名]

自¹⁵⁷⁾下次明約義顯實，以明本覺義。就中有三。初約體辨義，總^[166]

156) 同 以下，隨文解釋があるべきところだが，存在しない。

157) 自 この字の上に朱の鉤印あり。

舉大數，嘆以顯勝。第二「云何」已下，假徵別名。第三「一者」已下，列名解釋。

解釋中，一一^[167]中皆有其四。一者牒數，第二列名，第三顯喻，第四釋義^[158]。^[168]數、名可知。第三喻別者，四種鏡也。義別者，「四種大義」也。

數、名、義，此^[159]^[169]三種如文應知。四種喻者，顯示分別。一空鏡者，謂離一切物體，及無顯物體功能，況^[170]於覺性無有分別，本空淨故。二不空鏡，由與質像相應，及有顯像功能，況於覺體^[171]乃是證智所依，有內熏之力故。三者淨鏡，以離垢穢，況覺體清淨，出離^[172]染障故。四受用鏡，置之高幢，須者受用，況於本覺既出於障外，能現後智。置於^[173]行者心幢之上，隨心所念，各得利益。

[2.1.2.3.1.3.3 列名解釋] (論576c; 疏272d-273a)

[2.1.2.3.1.3.3.1 如實空鏡]

[2.1.2.3.1.3.3.1.1 牒數]

[2.1.2.3.1.3.3.1.2 列名]

[2.1.2.3.1.3.3.1.3 顯喻]

[2.1.2.3.1.3.3.1.4 釋義]

釋初大義。

先舉其數。

次列其名。「如實^[174]空」者，此心真如實是空也。

三喻者，謂「鏡」也。

第四義者，謂「遠離一切心境界相」，^[175]明此本覺雖復自性清淨，然

158) 義 以下，「亦可初是數別，次是名別，第三^[168]喻別，第四義別」の18字が抹消されている。

159) 義此 殘畫から推定。

於六七心境界本來不相應也。猶如空鏡，雖復^[176]性淨，然亦不與兔角龜毛而相應也。

「無法可現」者，此性淨本覺，所以不現心^[177]境界者，我塵法塵本來非有，故不現也。如龜毛兔角，亦非淨鏡所現也。

「非覺照^[178]義」者，此本覺於此二種塵相，實無覺照功能也。如鏡於龜毛等，亦無照功也。

初四義□^[160]。

[2.1.2.3.1.3.3.2 因熏習鏡] (論576c; 疏273ab)

[2.1.2.3.1.3.3.2.1 牒數]

[2.1.2.3.1.3.3.2.2 列名]

[2.1.2.3.1.3.3.2.3 顯喻]

[2.1.2.3.1.3.3.2.4 釋義]

[2.1.2.3.1.3.3.2.4.1 明鏡能現像]

[2.1.2.3.1.3.3.2.4.2 明鏡體離垢]

^[179]次明第二四義，如『論』可知。

「因熏習」者，因於無明染法，無始熏習也。

喻者，謂不空鏡也。

第^[180]四釋義中有二。

初明鏡能現像，況其覺心能現淨德境界。

第二「又」已下，明鏡體離垢，^[181] * * □□之功，況此覺心離染，恒有內熏之力。

「謂如實不空」者，此心眞如清淨，實不^[182] * * 。

「* * * * □^[161]界，悉於中現」者，從心所起一切境界，悉於性淨本

160) □ 「竟」か。

覺中現也。如一切質^[183] * * * * □還於中現也。

「不出」者，此自心現境，如若滅時，不出心外，〈去無所至¹⁶²⁾也。如鏡像滅^[184] * * * * 。

「不¹⁶³⁾入」者，後若更現，亦不從外入，〈來無所從〉也。如鏡像現時，亦不外入，〈無所來〉也。

「不失」者，此影^[185] * * * * □¹⁶⁴⁾可謂得，及其滅時，復不出於外，何得稱失也。如鏡像滅時，一切世人不^[186]謂失也¹⁶⁵⁾。

「不壞」者，此心影滅時，無有自體可就之名壞。非如色等物體，至於滅時，猶有^[187]餘體，說爲爛壞也。如鏡像滅時，一切世人不言「我面破壞」也。

「常住一心」者，此心境界，^[188]若有出入，可有不住心時。既無出無入，故即是□¹⁶⁶⁾住一心義也。亦如鏡像，唯得於鏡中^[189]住也。

「以一切法即真實性故」者，以自心現法，即以真實本覺爲體，故無義更得餘處^[190]住也。如一切鏡像，皆以鏡爲體，故無有道理得離鏡住也。

「又一切法所不能染」者，以本性^[191]清淨，故能現一切染相。染相現時，乃更顯於本淨，即此染法所不能染也。如鏡性淨，^[192]能現穢物。穢物現時，反顯鏡淨，豈此穢物能染鏡也。

161) □「境」か。

162) 去無所至 鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』文殊師利問疾品「來者無所從來，去者無所至，所可見者更不可見」(T14, 544b)。北本『大般涅槃經』梵行品「菩薩摩訶薩觀第一義時，是眼生時無所從來，及其滅時去無所至，本無今有，已有還無，推其實性，無眼無主」(T12, 461c; 南本T12, 704a)。

163) 不 殘畫から推定。

164) □「不」か。

165) 謂失也 殘畫から推定。

166) □「常」の略字か。

「智體不動」者，智以本覺爲^[193]體。此明現境隨妄心轉變，然其能現照性，未曾移也。亦如鏡像顯質轉變，^[194]然鏡淨性未曾改也。

「具足無漏」者，此本覺性，具恒沙等無漏法門，無所少也。亦如鏡^[195]性，於一切像功能無所少也。

「熏衆生」者，此本覺爲衆生體，非爲虛爾，爲與衆生作內熏習^[196]法，令厭生死苦，樂求涅槃樂也。如鏡備有顯像之功，亦非虛爾，欲令衆生取之照^[197]面，明自己美惡也。

[2.1.2.3.1.3.3.3 法出離鏡] (論576c; 疏273b)

[2.1.2.3.1.3.3.3.1 牒數]

[2.1.2.3.1.3.3.3.2 列名]

[2.1.2.3.1.3.3.3.3 顯喻]

[2.1.2.3.1.3.3.3.4 釋義]

第三四義者，可准取之。

是中「鏡」者，離垢淨鏡也。

「謂不空法」者，謂眞如^[198]功德法也。

「出」者，「出煩惱礙、智礙」也。

「離」者，即是離和合識相也。

「淳淨明」者，無煩惱障故「淳」，無智^[199]障染故「淨」，和合相盡故「明」也。

[2.1.2.3.1.3.3.4 緣熏習鏡] (論576c; 疏273bc)

[2.1.2.3.1.3.3.4.1 牒數]

[2.1.2.3.1.3.3.4.2 列名]

[2.1.2.3.1.3.3.4.3 顯喻]

[2.1.2.3.1.3.3.4.4 釋義]

第四四義者, 一數別相, 「四者」故。

名別相者, 「緣熏習」故。

「緣熏習」^[200]者, 此出離法身, 流出應化二身。此應化二身, 復流出無分別後智。此無分別後智, 復流出^[201]大悲。此大悲復流出十二部經, 安立¹⁶⁷⁾衆生¹⁶⁸⁾。言教內, 與衆生作外緣熏習也。

三喻別相^[202], 謂「鏡」也。

今言「鏡」者, 謂受用鏡。

四義別相。

「謂依法身出離」者, 示應化二身, 依離垢法身。

^[203]「遍照衆生之心」者, 以佛二身慧光, 遍照有緣衆生機¹⁶⁹⁾欲心也。其二身者, 一本性法身, 即是本覺^[204]性也。二隨意生身, 隨心幻起身也¹⁷⁰⁾。

「令修善根」者, 作熏習種子, 令生出世善也。

「隨念示^[205]現故」者, 隨彼衆生所有心念, 皆能示現等類身也。

釋覺義竟。

167) 安立 原文は「立安」に作るが、誤寫とみなして改める。

168) 此無分別…安立衆生 『攝大乘論釋』入因果修差別勝相品「無分別智是眞如所流, 此智於諸智中最勝。因此智流出無分別後智所生大悲, 此大悲於一切定中最勝。因此大悲, 如來欲安立正法, 救濟衆生, 說大乘十二部經」(T31, 222b)。

169) 機 原文は「幾」に作るが、假借とみなして改める。吉藏『法華義疏』卷一「內知機欲, 外有無方之語, 備此二能, 方爲物說法」(T34, 462b)。智儼『華嚴五十要問答』後卷「此等不同, 爲有情機欲各別, 隨一義說」(T45, 534b)。

170) 以佛二身…幻起身也 『佛性論』辯相分、總攝品「故『經』中說, 『一闡提人、墮邪定聚有二種身。一本性法身, 二隨意身。佛日慧光, 照此二身』。法身者, 即眞如理。隨意身者, 即從如理起」(T31, 800c)。

[2.1.2.3.2 明不覺] (論576c-577a; 疏273cd)

[2.1.2.3.2.1 牒章門]

[2.1.2.3.2.2 解釋]

[2.1.2.3.2.2.1 明不覺體]

[2.1.2.3.2.2.1.1 明不覺有所由]

[2.1.2.3.2.2.1.1.1 法]

[2.1.2.3.2.2.1.1.2 喻]

[2.1.2.3.2.2.1.1.3 合]

次¹⁷¹⁾明不覺。就中有二。初牒^[206]章門，第二解釋。

釋內有二。初明不覺體。第二「復次依不覺故生三種相」已下，明不覺相。

初中^[207]有二。初明不覺有所由。第二「以有不覺」已下，明依不覺，悟入眞覺。

前內有三。初法，次喻，後^[208]合。

法說有二義。一者無明能生妄念。二者本覺爲妄念體。此二和合，不覺起念，故名^[209]爲本也。

一無明能生妄念者，如『論』曰「謂不如實知眞如法一，故不覺心起而有其念」也。

二本覺爲^[210]妄心體者，謂「念無自相」等故。

第二喻者，以迷爲喻。

迷有二義。

一依自心迷惑種子。如『論』曰「迷」故。

二依邪方生起^[211]迷惑。如『論』曰「若離於方，則無有迷」故。此義云何。由依惑心生邪方，故邪方起已，還生惑^[212]心。

171) 次 この字の上に朱の鉤印あり。

三合喻者, 「衆生亦爾」者, 合依自心生迷種子。

「若離覺性, 則無不覺」者, 合依正方起^[213]邪方解。此有何義。以依本覺說有不覺, 以有不覺即返覺義。如依正方起於邪方, 邪方^[214]一起, 即返正方也。

[2.1.2.3.2.2.1.2 明依不覺, 悟入真覺] (論577a; 疏273d-274a)

若依餘法, 生其不覺, 迷於覺義, 理則可爾。而言「依於本覺, 有^[215]於不覺, 即此不覺還迷本覺」者, 是義不然。所以然者, 且問此本覺, 凡相違之法, ^[216]則不得相依。覺與不覺, 其義相返, 那忽依覺得有不覺也。若得有者, 一切相^[217]違之法, 亦應得相依而有。

論者釋言, 此則不然。此不覺者, 即是本覺無分別義, ^[218]名爲不覺。不分別染淨, 故通爲染淨依處。始時似違, 後則相順, 非如世間相^[219]違之法, 始終相違。所以若此者, 下舉『論』答, 此即第二明依不覺, 悟入真覺。故言「以有不^[220]覺妄想心故」也。

此有何義。

若直爾依覺, 有於不覺, 畢竟不能順於本覺。由於不覺, ^[221]生於妄心, 此心則有順本覺義也。

「能知名義」者, 爲此妄心, 有能知名義之功也。

「爲說^[222]真覺」者, 先覺本覺聖人, 爲欣未覺衆生, 令知真覺。彼不覺衆生, 有於妄心, 能知名義, ^[223]因此名故, 有根本真覺。以知本覺, 故起隨順行。乃至久遠熏習, 還同本覺。同本覺^[224]已, 究竟自覺。本時不覺義, 今爲無分別智境, 本時覺義, 今成自覺無分別智也。

^[225]「若離不覺之心, 則無真覺, 自相可說」者, 此言返釋。若無能知名義之心, 豈有無分^[226]別智, 真實覺義而可說也。

[2.1.2.3.2.2.2 明不覺相] (論577a; 疏274a)

[2.1.2.3.2.2.2.1 明不覺能生三相，總舉其數，相應不離]

就¹⁷²⁾明不覺相內，分文有三。初明不覺能生三相，總^[227]舉其數，〈相應不離。言「不離」者，示此三數，同數不覺之義，故不相離也。〉第二「云何」已下，假徵列名辨釋。第三「當知無明」已下，總結無明不覺能生染相。

[2.1.2.3.2.2.2.2 假徵列名辨釋] (論577a; 疏274ab)

[2.1.2.3.2.2.2.2.1 釋初相]

[2.1.2.3.2.2.2.2.1.1 明覺心不動，起成業相]

[2.1.2.3.2.2.2.2.1.1.1 順解]

[2.1.2.3.2.2.2.2.1.1.2 返釋]

[2.1.2.3.2.2.2.2.1.2 明依業得果]

^[228]就別解中，先釋初相。就中有二。初明不覺心動，起成業相。第二「動則有苦果」已下，明依業¹⁷³⁾^[229]得果。

前中有二。初即順解，次復返釋。驗有餘二，相內各此二文。

言「依不覺故心動」者，以此^[230]不覺爲無明染法依止，熏於本覺。此本覺既受熏，故依熏變動也。

「說名爲業¹⁷⁴⁾」^[231]者，因此動故，苦果相續，故受業名也。

此中應有伏難，以何義故，知不覺故動。若^[232]由知不覺故動者，此則是因覺故動，何名「因不覺故動」也。若復不知不覺故動^[233]者，以何道理，知其動者由不覺也。爲答此難，如『論』曰「覺則不動」，故此有義。既見覺^[234]故不動，當知動時由於不覺也。

172) 就 この字の上に朱の鉤印あり。

173) 業 殘畫から推定。

174) 業 殘畫から推定。

「動則有苦果」者, 若得不動, 則離生死, 當知動^[235]故苦果必然也。
 「果不離因故」者, 因果道理, 無相離義也。

[2.1.2.3.2.2.2.2.2 能見相] (論577a; 疏274b)

[2.1.2.3.2.2.2.2.2.1 順解]

[2.1.2.3.2.2.2.2.2.2 返釋]

「二者能見相」, 妄念之心爲^[236]能見也。

何因能見。「以依動故能見」。

何以得知。因動故能見, 對曰「不動則無見」故。^[237]此云何知。以不動則無見, 故當知見者則由於動也。

[2.1.2.3.2.2.2.2.3 明第三境界相] (論577a; 疏274bc)

[2.1.2.3.2.2.2.2.3.1 略明境界相]

[2.1.2.3.2.2.2.2.3.1.1 順解]

[2.1.2.3.2.2.2.2.3.1.2 返釋]

〈下明第三境界相。就中有二。初略明境界相。第二「以有境界緣故」已下, 明依此境界, 能生六相。〉

「三者境界相」, 妄心境界也。

何因^[238]有此境界。如『論』曰「以依能見故境界妄現」。

此云何知。「離見則無境界」故。「無境界」者, 離^[239]心變異外, 更無別境也。〈其由¹⁷⁵⁾似何。如似熱氣熏眼, 遂見空花, 緣此起於分別。然此花者, 但是眼依。〉

[2.1.2.3.2.2.2.2.3.2 明依此境界, 能生六相] (論577a; 疏274c)

175) 由「猶」に通ず。

[2.1.2.3.2.2.2.3.2.1 約境界，總舉其數]

下次第二廣明境界相。就中有二。初約境界，總舉其^[240]數。第二列名別解。

今言「以有境界緣」者，以有妄境界，爲心所緣也。

「復生六種相」者，謂妄想^[241]差別相也。

「云何爲六」者，一一責其相貌。

[2.1.2.3.2.2.2.3.2.2 列名別解] (論577a; 疏274c)

[2.1.2.3.2.2.2.3.2.2.1 智相]

「一者智相」，妄想分別色等諸塵，美惡好醜，此是世間所^[242]□^[176]智也。此云何知。如『論』曰「依於境界，心起分別愛與不愛故」。

[2.1.2.3.2.2.2.3.2.2.2 相續相] (論577a; 疏274c)

「二者相續相」，以妄想數^[177]起，相□^[178]^[243]無間也。下釋其義，「依於智故」乃至「相應不斷故」。

[2.1.2.3.2.2.2.3.2.2.3 執取相] (論577a; 疏274c)

「三者執取相」，不知境界從心變異，執^[244]取外相貌也。下釋義云，「依於相續」乃至「心起著故」。此言應知。

[2.1.2.3.2.2.2.3.2.2.4 計名字相] (論577a; 疏274cd)

「四者計名字相」，計名與義，^[245]各有自性及差別也。下釋云，「依於妄執名字，分別假名言相故」。

176) □ 「謂」の略字か。下文「此是世間所謂智也」(羽333V, 292)。

177) 數 「始」の誤寫か。

178) □ 「續」か。

[2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.5 起業相] (論577a; 疏274d)

「五起業相」, 依名執義, 生^[246]業種子。下釋云, 「依於名字」乃至「造種種業故」。

[2.1.2.3.2.2.2.2.3.2.2.6 業繫苦相] (論577a; 疏274d)

「六者業繫苦相」者, 此業種子, 繫縛^[247]本識, 受諸苦報也。下釋云, 「依業受苦, 不自在故」。此言示現。

[2.1.2.3.2.2.2.3 總結無明不覺能生染相] (論577a; 疏274d)

次明第三總結無明能^[248]生染法。

「當知無明生一切染法」者, 若見唯心, 無外境界, 則不起染著。當知一切染法生, ^[249]皆由無明也。

云何知有此無明。下答曰「以一切染法, 皆是不覺相故」也。

上來第三別解竟。

[2.1.2.4 合明二義, 成二種相] (論577a; 疏274d)

[2.1.2.4.1 牒前二義, 約之舉數]

[2.1.2.4.2 徵問列名立章]

自^[250]下¹⁷⁹⁾第四明此二義, 合成二相。就內有三。初牒前二義, 約之舉數。第二「云何」已下, 徵問列名立章。第^[251]三「同相者」已下, 依章別解。

[2.1.2.4.3 依章別解] (論577a; 疏274d-275a)

[2.1.2.4.3.1 解同相]

179) 下 この字の上に朱の鉤印あり。

[2.1.2.4.3.1.1 牒章]

[2.1.2.4.3.1.2 辨釋]

[2.1.2.4.3.1.2.1 立喩顯法]

別解內，先解同相，次明別相。

同中有二。初牒章，次辨釋。

[252] 〈言「同相」者，染淨二法同以眞如爲體，眞如以此二法爲相故。〉

就釋中有四。初立喩顯法。第二舉法同喩。第三引經證成。第四「菩提之相」已下，釋所引經[253]義。

初言「種種瓦器」者，譬染淨二法。

「皆同微塵性」者，器雖種種，皆以微塵爲體。

「相」者，[254]此微塵以種種器爲相也。

[2.1.2.4.3.1.2.2 舉法同喩] (論577a; 疏275a)

次合。

「如是無漏無明」者，合「種種器」也。

「皆同眞如性」，合「微[255]塵爲種種器體」也。

「相」者，眞如相，合「種種器」也。

[2.1.2.4.3.1.2.3 引經證成] (論577a; 疏275a)

次明引證[256]者，言「是故」者，以此眞如能與漏無漏爲體故。

所以「修多羅中依於此義」者，依眞如義。

[257] 「說一切衆生本來常住」者，以衆生用如爲體，此體常住，離生滅也。

「入於涅槃」者，示此眞[258]如爲自性住涅槃，無始相應也。

[2.1.2.4.3.1.2.4 解所引經義] (論577ab; 疏275a)

[2.1.2.4.3.1.2.4.1 約實以解]

[2.1.2.4.3.1.2.4.2 就緣以釋]

〈自下解所引經義。就中有二。初約實以解。第二「而有見色相」已下，就緣以釋。〉

「菩提之性」者，示一切聖人四念處等，皆依真方得成也。

「非可^[259]修相」者，此真如唯能成助道法，體非修相如¹⁸⁰⁾成也。

「非可作相」者，示無始法然，非爲功所致也。

^[260]「畢竟無得」者，有我衆生，非彼所得，無我衆生，復非能得。

「亦無色相可見」者，示非眼識^[261]境界也。

「而有色相」者，示現幻心化相。

「唯是隨染業幻¹⁸¹⁾所作」者，此幻化色，隨彼染業衆生，^[262]自分別所作。

「非是智色不空之性」者，此有染衆生所見之色，非是無分別智現顯色法門。

^[263]「以智性無可見故」者，此色法門是無分別智相，唯證相應示現，離諸見故。

[2.1.2.4.3.2 明別相] (論577b; 疏275ab)

[2.1.2.4.3.2.1 立宗]

[2.1.2.4.3.2.2 譬況]

[2.1.2.4.3.2.3 合喩]

次釋別^[264]相。此文有三。初立宗，二譬況，三合喩。

180) 如「而」に通ず。

181) 幻 原文は「幼」に作るが，誤寫とみなして改める。

「隨染幻差別性」者，此眞如隨妄想自性，幻¹⁸²⁾起差別。_[265]非就眞如體，明其異也。

「染幻差別故」者，示非就眞如，明差別也。

[2.2 約就心意識義，以解心生滅門] (論577b; 疏275b)

[2.2.1 學心意識是生滅因緣，略以立宗]

[266]自¹⁸³⁾下大文第二，就心意識，辨心生滅因緣義。就中有二。初學心意識是生滅因緣，略以立[267]宗。第二「此義云何」已下，次第解釋三義。

就中有四。初解意義。第二「復次言意識_[268]者」已下，解其識義。第三「無明熏習所起識者」已下，解其心義。第四「又染心義者」_[269]已下，明此染心及與無明功能差別。

今言「復次生滅因緣」者，前明生滅體，此明生_[270]滅因緣，故言「復次」也。

「所謂衆生」者，示生死者非數量所及，總言衆生也。

「依心意意識轉_[271]¹⁸⁴⁾故」者，示衆生無自體，唯識轉變所作也。

〈此□文者，應在前釋也。〉¹⁸⁵⁾

[2.2.2 次第解釋三義] (論577b; 疏275bc)

[2.2.2.1 解意義]

[2.2.2.1.1 問]

[2.2.2.1.2 答]

182) 幻 原文は「幼」に作るが，誤寫とみなして改める。

183) 自 この字の上に朱の鈎印あり。

184) [271] この行の欄外上部に一字あるも判讀不能。校正の指示か。

185) 此□文者應在前釋也 欄外上部の一字と關連する校正の指示か。

[2.2.2.1.2.1 略釋意義]

[2.2.2.1.2.1.1 明意起所由]

[2.2.2.1.2.1.2 辨意功能]

次第二別解。先釋意中，初問次答。

〈問云，此心意識作衆生義云何。〉答內有二。初^[272]略釋意義。第二「此意有五種名」已下，廣論意相。

前中有二。初明意起所由。第二「能見」已^[273]下，辨意功能。

「依阿梨耶識說有無明」者，此識爲種種不淨品法熏習，遂令有此不能覺^[274]了眞如義也。

「不覺而起」者，若覺則無有動，當知起時由於不覺也。

「能見」者，能見一切^[275]境界也。

「能現」者，能現五種塵也。

「能取境界」者，分別取染淨相也。

「起念相續」者，能引^[276]諸念種子生起。復能住持使三世相續，不斷絕也。

「故說名意」者，爲此等法作依止，故與^[277]意名也。

[2.2.2.1.2.2 廣論意相] (論577b; 疏275c)

[2.2.2.1.2.2.1 舉意大數]

下次第二廣明意義。就中有二。初舉意大數。第二「云何」已下，列名辨釋。

〈就此五中，各有其二。第一列，第二解釋。〉

然此心意¹⁸⁶⁾^[278]識有通有別¹⁸⁷⁾。

186) 意 殘畫から推定。

187) 此心意識有通有別 敦煌出土『攝大乘論章』(擬題) 三識義「『成實』如是，大乘如何。亦有二義。一就通分別，二就別分別。言就通分別者，三種識中，名具三義。故

通者，諸識皆有此三義。如意識中，對境了別名識，集起煩惱及業名^[279]心，能與諸使作依止處，說名意。陀那中亦三。能了別取其我塵名識，復能集起四惑^[280]名心，能與四使作依止處名意。本識三者，能集起三界六道業果，起六七等心，變^[281]異作彼我法塵等，名之曰心。復能令彼善、惡、不動三性種，攝持不失，與作依止，名意^[188]。^[282]又此識體復有微細了別，名識。此爲通也。〈如『大乘論』言「依止義是意義，能與他生爲依故。集起義是心義，謂種種茲長，變異爲三界。了別義是識義，以能取塵，故名識」^[189]。〉

言別者，六識名識，偏能了別取^[283]塵故。第七名心，偏能生起四惑染淨諸識故。第八名意，偏能與彼六七等心及我法^[284]等塵無始種子作依、持、建立處所義故。此據別也。〈故『論』云，「佛說意名，此名目第一識。佛說心名^[190]，此名目第二識。佛說識名，此目第三識」^[191]。〉

『衆名章』中，本識名質多，質多名心。『相章』之中，本識名境界。是其識義，上下竝論。陀那識三義者，『衆名章』中名染污意，與六識爲意根故。復云，『佛說心名，此名目第二識』。此名陀那爲第二識，以緣本識起我執，故名爲心。是識義顯，不待言辨。就六識辨三義者，『衆名章』中云，『一能與彼生次第緣，依先滅識爲意』。此以六識中前滅心爲意根，後生心爲識。又以識生依止爲意。此取本識以爲意根。『緣生章』中名受用識，能受用六塵故。以此文證，明知六識有其識義。第七勝相中，名爲『心學』。故知六識名爲心義。通義如是，別義云何。本識名意，是意根故。七識名心，常緣我塵故。六識名識，了六塵故。是故『衆名章』云，『心名目第二識，識名目六識，意名目第一識』(S2435, 255-265; T85, 1015c-16a)。

188) 能令彼善…依止名意 「意」は殘畫から推定。上文「若依三藏法師『九識章』内，名無沒識。以能攝持無始善惡三性種子，爲因不亡，得果必然，無有失沒，名無沒也」(羽333V, 43-44)。

189) 依止義是…塵故名識 『攝大乘論釋』依止勝相品「以能取塵，故名識。能與他生依止，故名意。第二識是我相等或依止能分別，故名意」(T31, 158b), 「意以了別爲義」(T31, 158c), 「第一識，或名質多。質多名有何義。謂種種義及滋長義。……所滋長者，謂變異爲三界」(T31, 159b)。

190) 名 殘畫から推定。

191) 佛說意名…目第三識 『攝大乘論釋』依止勝相品「佛說心名，此名目第二識。佛說識

然今此內，多就通以明，不就局^[285]也。何以得知。今此五中，雖總名爲意，論義乃通餘識，不唯第八。

[2.2.2.1.2.2.2 列名辨釋] (論577b; 疏275c)

[2.2.2.1.2.2.2.1 業識]

[2.2.2.1.2.2.2.1.1 列]

[2.2.2.1.2.2.2.1.2 解釋]

今言「業識」者，此明阿^[286]陀那識。所以復名業識者，以此識不覺而動，動則有苦果故也。〈亦可是阿梨耶識。〉下釋「謂無明力不覺心動^[287]故」。「無明力」者，謂無明等熏習力，故變異本識，「不覺心動」也。

[2.2.2.1.2.2.2.2 轉識] (論577b; 疏275cd)

[2.2.2.1.2.2.2.2.1 列]

[2.2.2.1.2.2.2.2.2 解釋]

二名「轉識」者，此明意識。復^[288]以何義名爲轉識。示此本識依前動，更復轉變，依根而見也。釋云「依於動心能見^[289]相故」。

[2.2.2.1.2.2.2.3 現識] (論577b; 疏275d)

[2.2.2.1.2.2.2.3.1 列]

[2.2.2.1.2.2.2.3.2 解釋]

三名「現識」者，即是五識。此以何義復名現識。以此識緣現在五塵，不見別法。自分^[290]別一分，成境界相，還自見也。下釋「謂能現一切境界」乃至「常在前故」。

名，此名目六識。佛說意名，此名目第一識」(T31, 159b)。

[2.2.2.1.2.2.2.4 智識] (論577b; 疏275d)

[2.2.2.1.2.2.2.4.1 列]

[2.2.2.1.2.2.2.4.2 解釋]

四 「名爲智識」, 此亦是^[291]意識。此以何義復與智名。然此意有二分^[192]。一分名相, 「能現一切境界」相也。一分名見。就此見分, 名^[292]爲智識, 此是世間所謂智也。下釋 「以能分別染淨法故」。

[2.2.2.1.2.2.2.5 相續識] (論577b; 疏275d-276a)

[2.2.2.1.2.2.2.5.1 釋名義]

[2.2.2.1.2.2.2.5.1.1 列]

[2.2.2.1.2.2.2.5.1.2 解釋]

[2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.1 明自相續, 即是略釋]

[2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.2 令他相續, 即是廣解]

[2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.2.1 明業果相續]

[2.2.2.1.2.2.2.5.1.2.2.2 諸念相續]

^[193]_[293]釋第五內有三。初釋名義。第二 「是故」已下, 引經證成。第三 「此義云何」已下, 釋所引經義。

初^[295]言 「相續識」者, 即是阿梨耶識。

以何義故, 名爲相續。下釋其義, 就中有二。初明自相續, ^[296]即是略釋。第二 「復能住持」已下, 令他相續, 即是廣解。

言 「以念相應」者, 無始已來剎那習氣, 與此^[194]_[297]識相應也。

「不斷故」者, 然習氣後時有盡, 本識相續, 至治際也。〈故『大乘論』

192) 此意有二分 『攝大乘論釋』應知勝相品 「若能通達世等六識, 一分成相, 一分成見, 名入『唯二』」(T31, 184b)。

193) [293] この行, 訂正して抹消されている。

194) 此 殘畫より推定。

云, 「色心有時斷絕。此於心中□心種子, 無斷絕故」¹⁹⁵⁾。〉

下明令他相續。就中有^[298]二。初明業果相續。第二「能令」已下, 即是諸念相續。

初言「住持過去無量世等善惡之業令^[299]不失」者, 示此是諸業種子也。

「復能成熟現在未來苦樂報等」者, 顯此識是善惡果^[300]報體也。

下明念相續者, 「能令現在已逕之事忽然而念」者, 由此識是念種子也。

「未來^[301]之事不覺妄慮」者, 亦與未來法作種子也。

[2.2.2.1.2.2.2.5.2 引經證成] (論577b; 疏276ab)

自下第二引經證成。

言「三界虛僞」者, 非有似有, ^[302]故曰「虛」也。隱其虛體, 作現實狀, 故名「僞」也。

「唯心所作」者, 此虛僞之狀, 雖有種種差^[303]別, 更無別法。使爾竅其因緣, 唯心所作也。

「離心則無六塵境界」者, 示此諸塵雖似有^[304]顯現, 無別塵體也。

[2.2.2.1.2.2.2.5.3 釋所引經義] (論577b; 疏276ab)

[2.2.2.1.2.2.2.5.3.1 問]

[2.2.2.1.2.2.2.5.3.2 答]

[2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.1 汎釋諸法皆從心生]

「此義云何」者, 釋所引經。

195) 色心有時…無斷絕故 『攝大乘論釋』依止勝相品「彌沙塞部亦以別名說此識, 謂窮生死陰。何以故。或色及心有時見相續斷, 此心中彼種子無有斷絕」(T31, 160b)。

此言是問「現見有境界，云何言無六塵」也。下答。^[305]就中有二。初汎釋諸法皆從心生。第二「當知」已下，指事勸知。

「以一切法皆從心起故」者，^[306]畢竟無有異心塵也。

我現見塵是所取，不即於心，云何言「無異心塵」也。下對曰「妄念而生」^[307]故。此「妄念而生」者，汝謂「有塵異心」，此皆從汝自妄心分別而生，非有別法也。

復問，能分別^[308]故名心，若無別法，此心何所分別。下對曰「一切分別，即分別自心」故。此「自分別心」者，示不假^[309]別法，此心一分顯現成相，爲所分別也。此所分別，即是分別自心也。

若使此心得自分別者，何須顯現^[310]成相，爲所分別也。下對曰「心不見心，無相可得」故。此「心不見心」者，此心若不變異，即不得自見也。^[311]「無相可得」者，以不變異，故無有相貌可得分別也。

又復「心不見心」者，本謂別有外法用而見之。今¹⁹⁶⁾^[312]既知唯心無外境界，此心何須復見於心。以不須見，故能見心滅。「無相可得」者，以無能見心，故所^[313]見之相亦不可得也。

[2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2 指事勸知] (論577b; 疏276b)

[2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2.1 法]

[2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2.2 喩]

[2.2.2.1.2.2.2.5.3.2.2.3 合]

「當知」已下，第二勸知境界分齊。於中有三。初法，次喩，後合。

「皆依衆生無明妄^[314]心而得住持」者，此有二義。一分別性境界。此境界從衆生無明妄心，建立住持。若此心^[315]不滅，一切境界亦不息也。二依他性境界。亦從衆生無明妄心，無始已來熏習本識，方得顯

196) 今 殘畫から推定。

[316]現。此本識，若功能未盡，住持此境，亦無休息也。

「是故一切法，如鏡中像，無體可得」者，示[317]此六種境界，離識之外，無體可得。

「唯心虛妄」者，若謂「境界有別體」者，於唯心[318]虛狀上，妄作如此執也。

「以心生則種種法生」者，由六七妄心生，故我塵法塵種種法生。

「心滅[319]則種種法滅」者，以六七心滅，故我塵法塵等種種法滅也。

又復「心生則種種法生」者，此阿梨耶[320]識，由諸法熏習，有生功能，似塵等種種法生也。

「滅則種種法滅¹⁹⁷⁾」者，以阿梨耶識生功[321]能滅，種種似塵亦隨滅也。

上來解意竟。

[2.2.2.2 解其識義] (論577b; 疏276c)

[2.2.2.2.1 明識體]

[2.2.2.2.1 明其識用]

[2.2.2.2.1.1 明意識立名不同]

[2.2.2.2.1.2 明依起所由]

下¹⁹⁸⁾次第二釋其識義。就中有二。初明識體。第二[322]「於諸凡夫」已下，明其識用。亦可初牒前起後，明本識體。第二正明依體起用，明其識義。

[323]「復次意識」者，牒前。

「即此相續識」者，示此識無別體，即以相續爲體也。

197) 法滅 原文は「滅法」に作るが、誤寫とみなして改める。

198) 下 この字の上に朱の鉤印あり。

「於諸凡夫」者，^[324]次明第二。於中有二。初明意識立名不同。第二「此識」已下，明依起所由。

言「依諸凡夫」者，簡^[325]非聖人意識也。

「取著轉深」者，以無對治，故取著境界，轉復深也。

「計我我所」者，初時計^[326]境謂我，後則於身計我，於塵爲所也。

「種種妄執」者，執謂「塵各有自性」。復執此性因自^[327]在不平等因及無因等生也¹⁹⁹⁾。

「隨事攀緣」者，示此不得實義，隨妄想虛僞而攀緣也。

^[328]「分別六塵」者，示不依五識各定緣一境，此識獨能遍取諸塵也。

「名爲意識」者，顯^[329]此識非有自體，是意所生識也。

「亦名分離識」者，以此識能分離遍知諸境也。

「又名^[330]分別事識」者，因分別虛僞事名也。

「此識依愛見煩惱增長義故」者，此明意識因^[331]也。是中「見」者，我見也。「愛」者，我愛也。「煩惱」者，我慢²⁰⁰⁾。因此惑爲根本，生餘，熏習本^[332]識，令此識長也。

[2.2.2.3 解其心義] (論577bc; 疏276cd)

[2.2.2.3.1 明心位分齊，嘆識甚深]

[2.2.2.3.1.1 明二乘凡夫未能覺了]

[2.2.2.3.1.2 明菩薩與佛，方能證知]

自²⁰¹⁾下第三辨其心義。就中有二。初明心位分齊，嘆識甚深。第二

199) 復執此性…因等生也 『攝大乘論釋』依止勝相品「復次若人己了別諸法因，於十二緣生則得聰慧。何以故。由果從因生，不從自在天等不平等因生，亦不無因生。是故立因果二智」(T31, 156b)。

200) 是中見者…惱者我慢 『攝大乘論釋』依止勝相品「一身見，二我慢，三我愛，四無明」(T31, 158a)。

[333] 「染心義者」已下, 正釋心義。

前中有三。初明二乘凡夫未能覺了。第二「謂依菩薩」已下, 明^[334]菩薩與佛, 方能證知。第三「何以故」已下, 問答釋凡夫不知菩薩及佛得了所由。

「此無明所^[335]起識」者, 是阿梨耶也。此識爲種種妄想所熏, 起諸念識, 謂阿陀那及六識也。

[336] 「非凡夫能知, 亦非二乘智慧所覺」者, 此所熏習識, 微細境界所攝, 故非凡夫及^[337]二乘能知也。

是誰境界。下答「謂依菩薩從初正信」乃至「唯佛窮了」此境界也。^[338]良以此識是一切因果法體, 是故初修觀菩薩, 必須緣此識, 起因果正信也。

「若證^[339]法身得少分知」者, 然法身有二種。一正說法身, 二正證法身²⁰²⁾。但十解已去, 菩薩證正說^[340]法身時, 已知此識分別性一分。

「乃至菩薩盡地不能盡知」者, 始從初地已去, 證得正證法^[341]身, 證依他、眞實二分未究竟也。

「唯佛窮了」者, 至佛地, 此識生一切法功能都盡, 了^[342]達法身。

[2.2.2.3.1.3 問答釋凡夫不知菩薩及佛得了所由] (論577c; 疏276d-277a)

[2.2.2.3.1.3.1 問]

[2.2.2.3.1.3.2 答]

[2.2.2.3.1.3.2.1 以三義答上問意]

[2.2.2.3.1.3.2.1.1 以三義明凡小不知]

201) 自 この字の上に朱の鉤印あり。

202) 法身有二…正證法身 『佛性論』辯相分、無變異品「諸佛法身有二種。一正得, 二正說。言正得法身者, 最清淨法界, 是無分別智境, 諸佛當體, 是自所得法。二正說法身者, 爲得此法身, 清淨法界正流, 從如所化衆生識生, 名爲正說法身」(T31, 808a)。

[2.2.2.3.1.3.2.1.2 就佛以結唯佛能知]

次第三問答重釋。就中初問次答。

今言「何以故」者，何以唯佛菩薩能知，凡夫二乘^[343]不能知故。下答有二。初以三義，答上問意。第二「所謂」已下，重以釋成。

前中有二。初以三^[344]義，明凡小不知。第二「雖有」已下，就佛，以結「唯佛能知」。

言三義，一不能知此心性。第二義者，^[345]「而有無明」已下，不能覺知無明。第三義，「有其染心」已下，明不能了知染心故也。以凡小具此三^[203]^[346]義，所以不覺不知。此不能知者，不能究知盡，非不分知也。

下次第二明佛窮了。

今言「雖^[347]有染心而常恒不變」者，與染爲體，不爲染變也。

「是故此義唯佛乃知」者，以凡夫^[348]無明染心具□□□^[204]彼俗見。二乘之人分除此二，由^[205]未能知。諸菩薩等隨地漸除，亦^[349]未窮盡。唯 * * * * * □^[206]，故能知也。

[2.2.2.3.1.3.2.2 重以釋成] (論577c; 疏277a)

[2.2.2.3.1.3.2.2.1 成上心性無變]

[2.2.2.3.1.3.2.2.2 成上無□□□]

下重以釋成。初成上「心性無變」。第二「以不達一^[350]法界」下，成上「無□□□^[207]」。一□^[208]略而不述。

203) 此三 殘畫から推定。

204) □ 「非」か。

205) 由 「猶」に通ず。

206) □ 「盡」か。

207) □□□ 「明染心」か。

208) □ 「種」か。

言「心性常無念, 故名爲不²⁰⁹⁾變」者, 「常無念」者, 此有二。^[351]一自性無念故, 二念心盡故。「名爲不變」者, 本隨念變異, 似念顯現。今既離^[352]念, 畢竟誰復能變也。

第二辨無明義。

「以不達一法界故」者, 然此心通爲一切法性, 名爲法界。^[353]以未得聞熏習等益其勢力, 故不能返照自體²¹⁰⁾也。

「心不相應」者, 此心與無明, 無有^[354]能所相應也。

「忽然念起」者, 示此妄心以不覺爲體也。

「名爲無明」者, 唯有顛倒²¹¹⁾ ^[355]妄執, 無有照眞之明也。

[2.2.2.3.2 正釋心義] (論577c; 疏277b)

[2.2.2.3.2.1 舉染心, 約位明治斷分齊]

[2.2.2.3.2.1.1 約染心, 總舉□數]

下次第二正辨心義。就中有三。初舉染心, 約位^[356]明治斷分齊。第二「不了一法界義者」已下, 重舉無明, 約位明治斷得證分齊。第^[357]三「言相應者」已下, 辨染淨麁細即異之義。

就初內有二。初約染心, 總舉□²¹²⁾數。^[358]第二「云何」已下, □問 * * □²¹³⁾。

[2.2.2.3.2.1.2 □問 * * * □] (論577c; 疏277b)

[2.2.2.3.2.1.2.1 執相應染]

209) 不 脱字とみなして補う。

210) 返照自體 圓測『解深密經疏』卷三「又眞諦云, 阿摩羅識反照自體」(Z1, 34, 4, 360d; SZ21, 241a)。

211) 倒 原文は「到」に作るが, 假借とみなして改める。

212) □ 「其」か。

213) □ 「釋」か。

第²¹⁴⁾一「執相應染」者，謂皮煩惱²¹⁵⁾。此是意識執外境界相，有^[359]能所□* * * * *也。亦可此當黑繫業分段。

是誰能斷。謂「依二乘^[360]解²¹⁶⁾□* * * * *」。

[2.2.2.3.2.1.2.2 不斷相應染] (論577c; 疏277b)

* * ²¹⁷⁾「不斷相應染」者，此是肉煩惱。即阿陀那識未得對治^[361]已前，恒起不慶²¹⁸⁾，與我相等境界相應，起無明等四惑也²¹⁹⁾。此義當白^[362]不繫分段。又言「不斷」者，前是四住，此望無明地，以明不斷。亦可前望地前生空，此望初地已去法執，^[363]以明不斷。

誰能對治。「依信相應地」乃至「淨心地究竟離故」。

[2.2.2.3.2.1.2.3 分別智相應染] (論577c; 疏277b)

「三者分別智相應染」，此是心^[364]煩惱，分別世間出世間論法。亦可此是白不繫分段。亦可是彼有相位²²⁰⁾中，分別障障^[365]無生觀也。

誰能對治。「依具戒地漸離，乃至無相方便地，究竟離故」。

214) 第 殘畫から推定。

215) 皮煩惱 『攝大乘論釋』依止勝相品「若以此名，分別內法，或增或減，壞正理，立非理，名肉煩惱。若以此名，分別外塵，起欲瞋等，名皮煩惱。若以此名，分別一切世出世法差別，離前二分別，名心煩惱」(T31, 180b)。

216) 解 殘畫から推定。

217) * * 「第二」などが推定できるか。

218) 慶 「變」の誤寫か。

219) 阿陀那識…等四惑也 『攝大乘論釋』依止勝相品「論曰，二有染汚意，與四煩惱恒相應。釋曰，此欲釋阿陀那識。何者四煩惱。論曰，一身見，二我慢，三我愛，四無明」(T31, 158a)，「第二識是我相等或依止能分別，故名意」(T31, 158b)。

220) 有相位 『攝大乘論釋』入因果修差別勝相品「行願行人，滿一阿僧祇劫。行清淨意行人，行有相行人，行無相行人，於六地乃至七地，滿第二阿僧祇劫。從此後無功用行人，乃至十地，滿第三阿僧祇劫」(T31, 229b)。

[2.2.2.3.2.1.2.4 現色不相應染] (論577c; 疏277b)

「四者現色^[366]不相應染」, 此是皮氣。謂外塵習氣, 染汚本識, 恒與正思惟起, 不覺其失, 名不^[367]相應也。

誰能對治。謂「依色自在地遠離故」。由此色習氣盡, 於八地中得淨土等^[368]自在也。

[2.2.2.3.2.1.2.5 能見心不相應染] (論577c; 疏277bc)

「五能見心不相應染」, 此是肉氣。此我見等惑, 有識無境, 故說能見心也。

^[369]誰能對治。謂「依心自在地遠離故」。此以肉氣盡, 故於九地中得陀羅尼等自在也。

[2.2.2.3.2.1.2.6 根本業不相應染] (論577c; 疏277c)

^[370]「六根本業不相應染」, 此是心氣, 謂最後一剎那無明氣也。

誰能對治。「依菩薩盡地, ^[371]得入如來地能離故」。

[2.2.2.3.2.2 重舉無明, 約位明治斷得證分齊] (論577c; 疏277c, d)²²¹⁾

自下 * * ²²²⁾重舉上「無明」來解。

「不了一法義」者, 非但染心通障諸地, 此無^[372]明亦通迷諸地。謂「從信相應地」「乃至如來地究竟離故」。

[2.2.2.3.2.3 辨染淨麁細即異之義] (論577c; 疏277d-278a)

[2.2.2.3.2.3.1 釋相應]

[2.2.2.3.2.3.2 釋不相應]

221) 續藏本の曇延疏は以下に錯簡がある。高崎直道 [1997] を参照。

222) * * 「第二」などが想定できるか。

次釋第三即異之義。先釋^[373]相應，後釋不相應。

言「心念法異」者，謂能念之心與所念法，各相異也。此釋「相」^[374]義。

「依染淨差別」者，示能分別心及所分別境，有此染淨差別相也。

「而知相」者，謂能^[375]知相。

「緣相」者，謂所緣相也。

「同故」者，能所合也。此釋「應」義。

次釋不相應義。

「謂即心」者²²³⁾，^[376]明此微細習氣，無相異心也。

「不覺」者，由無能所和合，故與正思惟俱起，而令思惟不^[377]覺知也。

「不同知相緣相故」者，示相應不相應差別相也。

[2.2.2.4 明此染心及與無明功能差別] (論577c; 疏278a, 277c)

[2.2.2.4.1 辨染心及與無明所障不同，立宗]

[2.2.2.4.2 問答解釋 (後缺)]

下²²⁴⁾第四顯無明染心所^[378]障不同。

〈就中有二。初辨染心及與無明所障不同，立宗。第二問答解釋。〉

染心障如理智，如『論』曰「染心義者」乃至「能障眞如根本智故」。

無明者，障如量^[379]智。如『論』曰「無明義者」乃至「自然業智故」。

亦名無分別後智。

下問答重釋此義。…… (後缺)

[2.3 約麤細兩相，以釋心生滅義 (缺)] (論577c-578a; 疏277cd, 278ab)

[2.4 就染淨眞妄體用熏習義，以解心生滅門 (缺)] (論578a-; 疏278b-)

223) 者 殘畫から推定。

224) 下 この字の上に朱の鉤印あり。

Abstract

On the Dunhuang Manuscript *Dasheng qixin lun shu* 大乘起信論疏 (provisional title; *hane* 羽 333 verso) Belonging to the Kyō'u 杏雨 Library

IKEDA Masanori

HK Research Professor, Guemgang University

As is well known, there exist four early commentaries on the *Awakening of Faith in the Great Vehicle* (AF), written in China (also in Korea): Tanyan's 曇延 (516-588) *Dasheng qixin lun yishu* 大乘起信論義疏; Jingying Huiyuan's 淨影慧遠 (523-592) *Dasheng qixin lun yishu* 大乘起信論義疏; Wōnhyo's 元曉 (617-686) *Qixin lun shu* 起信論疏; and Fazang's 法藏 (643-712) *Dasheng qixin lun yiji* 大乘起信論義記.

Among the four texts, Tanyan's commentary has been considered the oldest one. However, I found another commentary on the AF, which precedes Tanyan's one in the recently published Dunhuang manuscripts belonging to the Kyō'u 杏雨 Library in Japan. In this article, I intend

to examine the entire nature of this newly identified *Dasheng qixin lun shu* 大乘起信論疏 (provisional title; *hane* 羽 333 verso) (羽333V) in comparison with Tanyan's commentary, and make clear the following points:

1. By comparing and contrasting the 羽333V with Tanyan's commentary, we can find some cases that the latter summarizes comments of the former, and the latter added some explanations which are not in the former. We therefore, conclude that the 羽333V precedes Tanyan's commentary.

2. The 羽333V cites some paragraphs from Paramārtha's translation of the *Mahāyānasamgrahabhāṣya* (MSBh), and precedes Tanyan's commentary as mentioned above. Therefore, the 羽333V was composed after 564 C.E. when Paramārtha completed translating the MSBh into Chinese, and before 588 C.E. when Tanyan was dead.

3. In the 羽333V, we can find a number of comments based on the doctrines of the *Jiu shi zhang* 九識章 composed by Paramārtha, and of the MSBh and the *Foxing lun* 佛性論 translated by him. Compared with Tanyan's commentary, the 羽333V closes to the works of Paramārtha much more. Therefore, there is a strong possibility that the author of the 羽333V was familiar with the translations and various compositions of Paramārtha, and had a close relationship with him.

4. In the extant manuscript of the 羽333V, there are some traces of modifications probably by the author himself, but on the other hand, there are also the omission of the transcription which suggests that

the manuscript was organized by some other editor as well. Also, among these traces of modifications, a part of it was possibly known by Tanyan, but others may not. We therefore, assume that the 羽333V is probably a text whose type is a record of lecture co-produced by an author (i.e. a master) and an editor (i.e. a disciples), and it is possible that more than one text had existed in those days, and there were variant versions of compilations which have different types of editing while reflected the author's modifications.

5. It is unknown whether Huiyuan and Wōnhyo knew the 羽333V, but in Fazang's commentary, we can find some evidence that Fazang referred to it. We therefore, can assume that the 羽333V had existed in central China, at least until the 7th century.

Key Words : Dunhuang manuscript *Dasheng qixin lun shu* (hane 333 verso); Kyō'u Library; Tanyan's *Dasheng qixin lun yishu*, Paramārtha; Fazang's *Dasheng qixin lun yiji*

2012년 12월 7일 투고

2012년 12월 21일 심사완료

2012년 12월 24일 게재확정

